福岡市埋蔵文化財調査報告書第928集

KAMIHIROSE

上広瀬遺跡 2

石釜地区基盤整備促進事業関係調査報告書 3

―上広瀬遺跡第 2 次調査―

2007

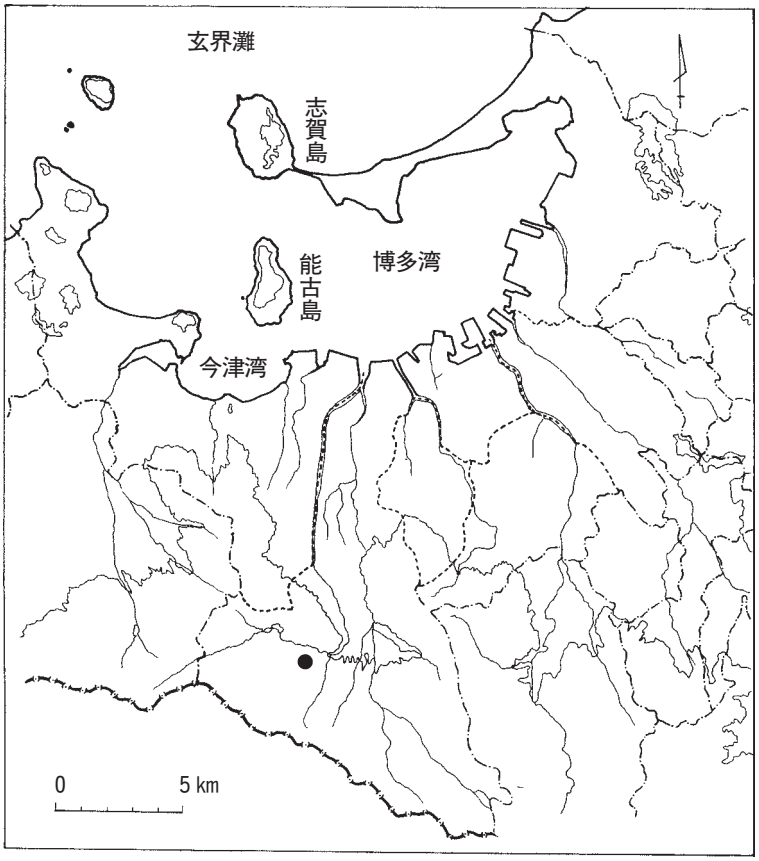
福 岡 市 教 育 委 員 会

福 岡 市

KAMIHIROSE

上広瀬遺跡 2

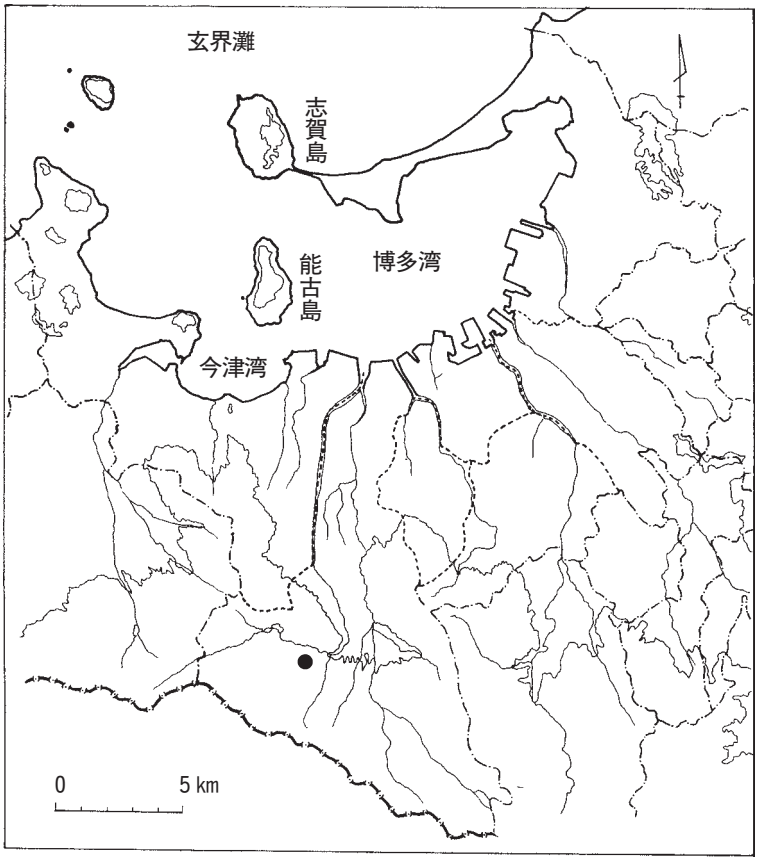
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第928集



調査番号　０４８５
調査略号　ＫＨＩ-2

２００７

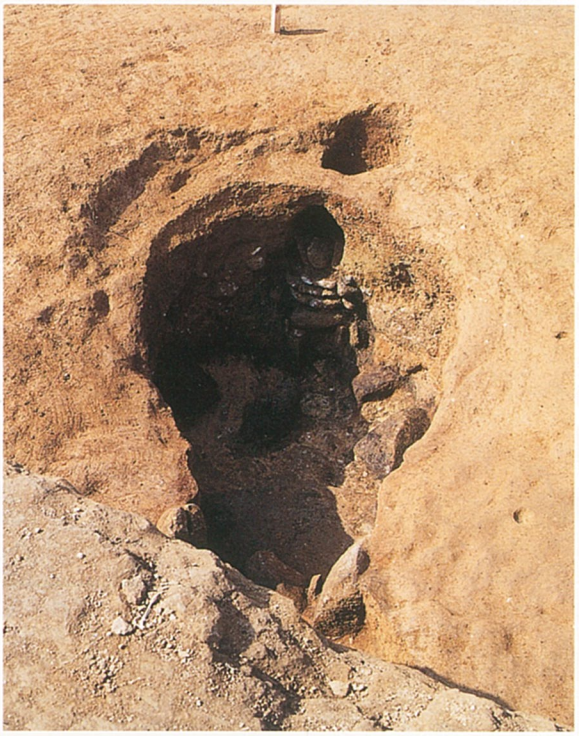
福 岡 市 教 育 委 員 会



調査番号　０４８５
調査略号　ＫＨＩ-2

1．調査区全景（西から）

2．8区落し穴SK36（西から）



3．13区炭窯SX101（北東から）

序

福岡市西郊の早良平野は、平野を北流して博多湾に注ぐ室見川の流域を中心として旧石器時代から近世までの多くの遺跡が営まれ、豊かな自然と多くの遺跡が残された地域です。

福岡市ではまちづくりの目標としての都市像に、ひとつに自然を生かす快適な生活の都市、ひとつに海と歴史を抱いた文化の都市を掲げその実現にむけ邁進しています。

しかし快適な都市づくりをめざす一方で、これにともなって消滅していく遺跡も多く、本市ではこれら開発によって、やむなく失われる遺跡の記録保存調査を行なっています。

本書は早良区石釜地区の圃場整備事業に伴い、平成16・17年度に発掘調査を行なった上広瀬遺跡第2次調査の成果報告をするものです。

調査の結果、旧石器時代から中世にかけての遺物・遺構が検出され、なかでも、古代～中世の70基弱を数える多数の焼土壙の検出と、中世初の半地下式の炭焼窯の検出から、集落から離れた山間の、炭焼を生業の中心とした遺跡であることなどがわかりました。

本報告書が市民の皆様の文化財に対する認識とご理解につながり、また、学術の分野に貢献することができましたならば幸甚に存じます。

最後になりましたが、本報告書の作成にいたるまで多大なご協力を頂いた農林水産局・石釜圃場整備組合・地元関係者の方々に対し、心よりの感謝の意を表する次第です。

平成19年３月30日

福岡市教育委員会

教育長　　植　木　とみ子

例　　言

1．本書は、石釜地区基盤整備促進事業に伴い平成16年度(2004)・17年度(2005) 発掘調査を実施した、福岡市早良区大字西字広瀬地内に所在する上広瀬遺跡第2次調査の調査報告書である。

2．調査で検出した各遺構は、土壙(SK)、溝状遺構(SD)、掘立柱建物(SB)、柱穴(SP)、他（SX）の様に頭に記号を付して呼んだ。

3．本書に掲載した遺構実測図は、加藤良彦・川嶋京子・梅野眞澄・田中昭子による。

4．本書に使用した図面類の整図および製図は、加藤の他に井上加代子・撫養久美子・副田則子・相原聡子で行った。

5．本書に使用した遺構写真は加藤が、全景等空中写真は写測エンジニアリング株式会社による。遺物写真は加藤による。

6．本書に使用した方位は旧国土座標第２系による座標北で、磁北はこれに6°10′西偏する。

7．付編の上広瀬遺跡第２次調査に伴う自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに委託した。

8．本書のⅢ-7-③の執筆は吉留秀敏が、他の執筆・編集は、加藤が行った。

9．本書に収録された遺物・写真・図面などの記録類は、平成19年度に福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに…… 1
　１．調査に至る経緯…… 1
　２．調査の組織…… 1
Ⅱ．調査区の立地と環境…… 2
Ⅲ．調査区の記録…… 7
　１．調査の概要…… 7
　２．１・２区の調査…… 8
　３．３区の調査……11
　４．４区の調査……15
　５．５区の調査……18
　６．６・７区の調査……23
　７．８区の調査……28
　８．９区の調査……33
　９．10区の調査……36
　10．11区の調査……45
　11．12区の調査……53
　12．13区の調査……60
　13．14区の調査……69
　14．15区の調査……71
Ⅳ．小　　結……71

付編．上広瀬遺跡第２次調査に伴う自然科学分析……75

挿　図　目　次

Fig. 1　周辺遺跡分布図(1/25,000) ……4
Fig. 2　調査区位置図(1/8,000) ……5
Fig. 3　調査区地形測量図(1/4,000) ……6
Fig. 4　1・2区遺構全体図(1/200) ……9
Fig. 5　1区SK01・02・03・04　2区05実測図(1/40) ……10
Fig. 6　1区出土遺物実測図 (2/3・1-1/3) 11
Fig. 7　3区遺構全体図 (1/300) ……12
Fig. 8　3区SK06・07・08・137・138、SD139・142実測図 (1/40) ……13
Fig. 9　3区出土遺物実測図 (1/3) ……14
Fig.10　4区遺構全体図 (1/200) ……16
Fig.11　4区出土遺物実測図 (1/3) ……17
Fig.12　4区SK09・10・11、SD12・13実測図 (1/40) ……17
Fig.13　5区遺構全体図 (1/200) ……19
Fig.14　5区SK14・15・21・22実測図(1/40) …20
Fig.15　5区SK16・17・18・19・20・23実測図 (1/40) ……21
Fig.16　5区出土遺物実測図 (1/3・15・18-2/3・19-1/1) ……22
Fig.17　6・7区遺構全体図 (1/300) ……23
Fig.18　6区SK24・25・26実測図 (1/40) ……24
Fig.19　7区SK27・28・30・32実測図 (1/40) 25
Fig.20　6・7区出土遺物実測図 (1/3) ……26
Fig.21　7区SX31・33・34実測図 (1/40) ……26
Fig.22　8区遺構全体図 (1/300) ……28
Fig.23　8区SK35・36・37・38、SD40実測図 (1/40) ……29
Fig.24　8区出土遺物実測図 (1/3・25～27・33-2/3・32・34-1/2) ……30
Fig.25　三稜尖頭器実測図 (2/3) ……31
Fig.26　9区遺構全体図 (1/300) ……33
Fig.27　9区SK42・43・44・45・46・47・48、SD49実測図(1/40) ……34
Fig.28　9区出土遺物実測図(1/3・38-1/2) …35
Fig.29　10区遺構全体図(1/400) ……37
Fig.30　10区SK66・72・52・53・55・56・57・58実測図 (1/40) ……38
Fig.31　10区SK59・60・61・62・63・64実測図(1/40) ……40
Fig.32　10区SK65・67・68・69・70・71実測図 (1/40) ……43
Fig.33　10区出土遺物実測図 (1/3・45-2/3) 44
Fig.34　11区遺構全体図 (1/350) ……46
Fig.35　11区SK73・74・75・76・77・78・79・80・82実測図 (1/40) ……48
Fig.36　11区SK81・83・84・85・86・87・88、SD89・117・118実測図 (1/40) ……50
Fig.37　11区出土遺物実測図 (1/3・50-2/3・55-1/2) ……52
Fig.38　12区遺構全体図 (1/350) ……54
Fig.39　12区SK124・SD120・SK90・91・92・93・94・95実測図 (1/40) ……56
Fig.40　12区SK96・X59SP1・SD126・SD127実測図 (1/20・1/40) ……58
Fig.41　12区出土遺物実測図(1/3・56～60-2/3・70～91-1/2) ……59
Fig.42　13区遺構全体図 (1/350) ……61
Fig.43　13区SK102・97・98・99・100・104実測図 (1/40) ……62
Fig.44　13区炭窯SX101実測図 (1/50) ……63
Fig.45　13区SK114・SB01・02実測図 (1/100) ……64
Fig.46　13区出土遺物実測図 (1/3) ……65
Fig.47　14区遺構全体図 (1/250) ……66
Fig.48　14区SK105・106・107・108・109実測図 (1/40) ……67
Fig.49　14区出土遺物実測図 (1/3・110-2/3) 68
Fig.50　15区遺構全体図 (1/200) ……68
Fig.51　15区SK133・134・135・136実測図 (1/40) ……69
Fig.52　15区出土遺物実測図 (2/3・113-1/2) ……70

写　真　目　次

Ph. 1　調査区全景（北東から）……2
Ph. 2　調査前風景（北から）……7
Ph. 3　２区全景（東から）……8
Ph. 4　１区SK04（北から）……8
Ph. 5　１区SK01（北西から）……8
Ph. 6　１区SK02･03土層断面（西から）……8
Ph. 7　１区SK02･03（北から）……11
Ph. 8　２区SK05（北から）……11
Ph. 9　２区全景（西から）……11
Ph.10　3-1区SK08土層断面（北西から）……12
Ph.11　3-1区SK08(北西から）……12
Ph.12　３区出土遺物……14
Ph.13　3-2区SK138土層断面（北から）……15
Ph.14　3-2区SK138（西から）……15
Ph.15　４区全景（西から）……15
Ph.16　４区SK10土層断面（北から）……16
Ph.17　４区SD12（北から）……16
Ph.18　４区SD13土層断面（北から）……17
Ph.19　４区SD13（北から）……17
Ph.20　５区全景（東から）……18
Ph.21　５区SK15土層断面（北から）……20
Ph.22　５区SK15（北から）……20
Ph.23　５区SK16（北から）……21
Ph.24　５区SK17（南から）……21
Ph.25　５区出土遺物……22
Ph.26　６区全景（東から）……24
Ph.27　７区全景（東から）……24
Ph.28　６区SK24（北から）……24
Ph.29　６区SK26（西から）……24
Ph.30　６区白磁皿出土状況……24
Ph.31　７区SX31（北から）……26
Ph.32　７区SX34土層断面（北から）……26
Ph.33　７区SK32土層断面（北から）……26
Ph.34　７区SK30（東から）……27
Ph.35　６・７区出土遺物……27
Ph.36　８区全景（西から）……27
Ph.37　８区SK36（西から）……28
Ph.38　８区SK37土層断面（西から）……28
Ph.39　８区SK37（北から）……29
Ph.40　８区SK35（北から）……29
Ph.41　８区出土遺物……30
Ph.42　８区SD40（北から）……30
Ph.43　三稜尖頭器……32
Ph.44　９区全景（東から）……32
Ph.45　９区SK45（西から）……33
Ph.46　９区SK46土層断面（北から）……33
Ph.47　９区SD49（南から）……35
Ph.48　９区SK47土層断面（西から）……35
Ph.49　９区出土遺物……36
Ph.50　10区全景（北西から）……36
Ph.51　10区SK66（西から）……39
Ph.52　10区SK72（西から）……39
Ph.53　10区SK52土層断面（北から）……39
Ph.54　10区SK56土層断面（西から）……39
Ph.55　10区SK57土層断面（東から）……41
Ph.56　10区SK57（北から）……41
Ph.57　10区SK58土層断面（北から）……41
Ph.58　10区SK64土層断面（北から）……41
Ph.59　10区SK60土層断面（東から）……42
Ph.60　10区SK60（北から）……42
Ph.61　10区SK61土層断面（北から）……42
Ph.62　10区SK61（西から）……42
Ph.63　10区SK63土層断面（東から）……44
Ph.64　10区SK63（北から）……44
Ph.65　10区SK65土層断面（東から）……44
Ph.66　10区SK67土層断面（東から）……44
Ph.67　10区SK69土層断面（北から）……45
Ph.68　10区SK71（東から）……45
Ph.69　10区出土遺物……45
Ph.70　11区全景（北東から）……47
Ph.71　11区SK74（北から）……47
Ph.72　11区SK79（西から）……47
Ph.73　11区SK75土層断面（北から）……49
Ph.74　11区SK75（西から）……49

Ph.75　11区SK76土層断面（西から）……49
Ph.76　11区SK76（北から）……49
Ph.77　11区SK84土層断面（西から）……51
Ph.78　11区SK84（北から）……51
Ph.79　11区SK83（西から）……51
Ph.80　11区SK85（東から）……51
Ph.81　11区SK86土層断面（北から）……52
Ph.82　11区SK86（西から）……52
Ph.83　11区SD89（北から）……53
Ph.84　11区出土遺物 ……53
Ph.85　12区全景（北東から）　……53
Ph.86　12区SK90土層断面（東から）……55
Ph.87　12区SK93土層断面（西から）……55
Ph.88　12区SK91土層断面（西から）……55
Ph.89　12区SK91（北から）……55
Ph.90　12区SK94土層断面（南から）……57
Ph.91　12区SK95土層断面（東から）……57
Ph.92　12区SK96土層断面（北から）……57
Ph.93　12区SK96（東から）……57
Ph.94　12区X59SP1宋銭出土状況（北から）58
Ph.95　宋銭出土状況（東から）　……58
Ph.96　12区出土遺物 ……59
Ph.97　13区SK102（南から）……60
Ph.98　13区全景（北東から）　……60
Ph.99　13区SK99（東から）……61
Ph.100　13区SK104（西から）……61
Ph.101　13区SD103土層断面（南から）……61
Ph.102　13区SX101土層断面（東から）……63
Ph.103　13区SX101（東から）……63
Ph.104　13区SX101煙出部（東から）……64
Ph.105　13区SX101焚口（西から）……64
Ph.106　13区SK114（左）SB01（右・北東から）
……64
Ph.107　13区SB02（北東から）……64
Ph.108　13区出土遺物　……65
Ph.109　14区SK106土層断面（西から）……66
Ph.110　14区SK109（南から）……66
Ph.111　14区全景（東から）……67
Ph.112　15区全景（南から）……69
Ph.113　15区SK133（北から）……70
Ph.114　15区SK134土層断面……70
Ph.115　15区SK135（東から）……70
Ph.116　15区出土遺物　……70

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

本遺跡の調査は、平成15年（2003）年度から開始された「石釜地区基盤整備促進事業」（受付番号13-1-557）の４箇年事業の３年次（平成17年度）施工事業予定地を対称に、事業計画について遺跡遺存の状況を把握するための試掘調査など、必要な事項の事前協議を行ったことを契機とする。埋蔵文化財課では施工予定地の大半に上広瀬遺跡が含まれる事を確認、刈り取りの終了した平成16年11月29日から12月７日まで施工予定地全域に計65本の試掘調査を実施した。結果事業地のほぼ全域で焼土壙・柱穴をはじめとする古代から中世にかけての遺構を確認した。

この結果を受け保存する方針で調整を進め、施工計画中の遺跡の包蔵地内の道路部分と全面切り下げ予定地12箇所を調査対象地とし、他は盛土保存することとなった。調査区は地山切り下げ工区ごとを調査区として１～12小区に分け実施した。調査は、調査予定面積が13,940㎡と広大であるため16年度中に先行して実施することとなり、平成17年１月11日から３月14日に調査区第１～４区を着手。新年度となった平成17年４月４日より調査を再開した。また、調査着手後施工計画が拡大され、平成17年５月９日から５月11日に追加対象地に計27本の試掘調査を実施した。結果、追加整備予定地の１/10ほどの面積で遺構を確認し、地山切り下げ工区２地点2,175㎡を追加調査対象地とした（第13・14区）。さらに調査終了間際の10月28日に施工設計変更が伝えられ、急遽３地点2,203㎡の調査区追加となり（3-2区・4-2区・15区）、東西約340ｍ・南北約260ｍの広大な範囲を（Fig.2）、同年12月20日に全ての行程を終了した。調査面積は15,755㎡である。

調査番号	0485	遺跡略号	KHI-2
調査地地籍	早良区大字西字広瀬地内	分布地図番号	早良17（内野）0801
開発面積	72,700㎡	調査実施面積	15,755㎡
調査期間	050111～050314・050404～051220	事前審査番号	13-1-557

２．調査の組織

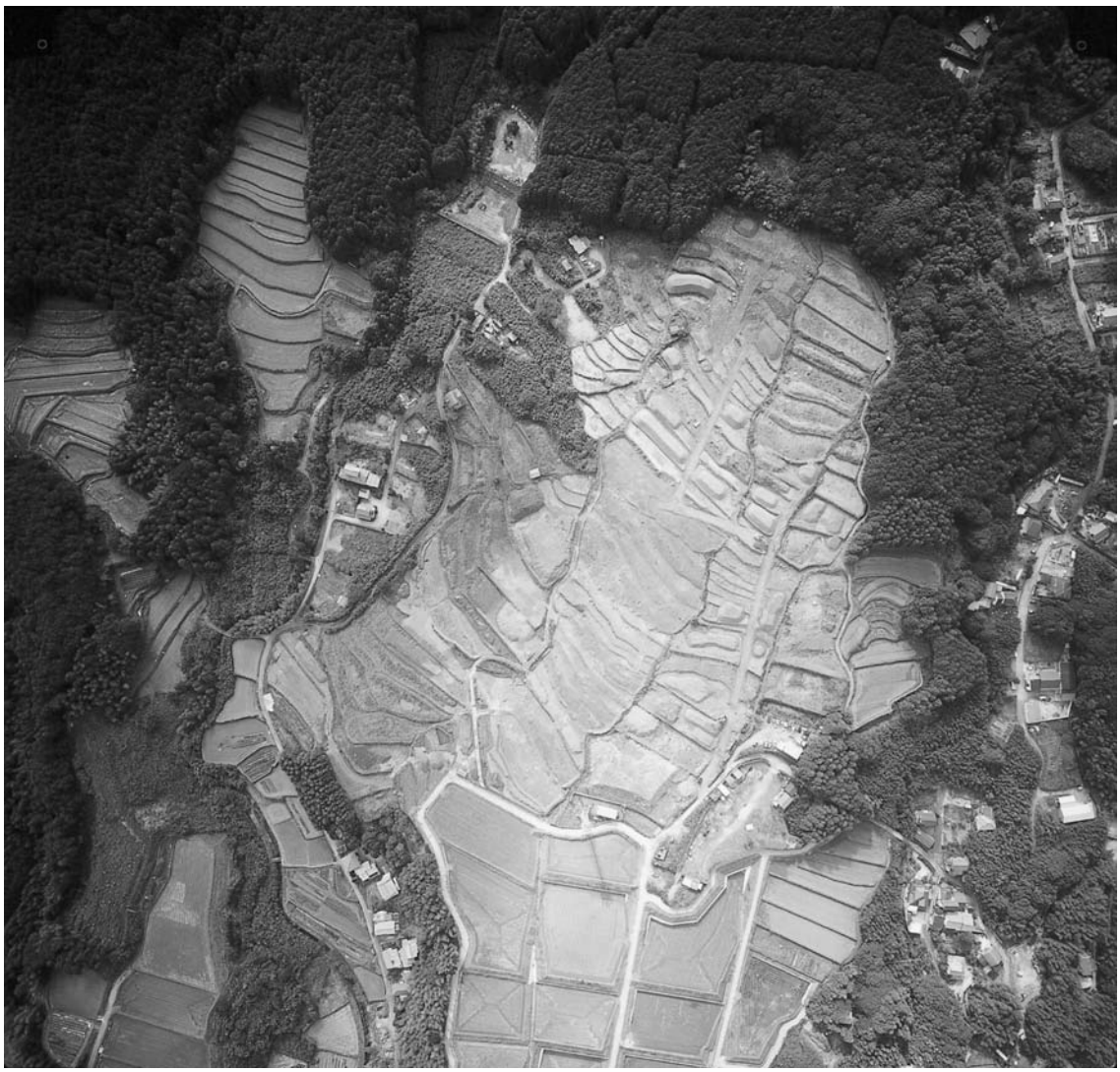
【調査委託】農林水産局農林部農業土木課(当時)
【調査主体】福岡市教育委員会　教育長　植木とみ子
【調査総括】文化財部長　山崎純男　　文化課長　山口譲治　　調査第１係長　力武卓治（当時）
【調査庶務】文化財整備課　後藤泰子
【発掘調査】加藤良彦
【発掘作業】脇山千代美　菅野　武　松尾和子　尾崎泰正　　川嶋京子　　芦馬光夫　岩永いさ子
樋口スミ子　三谷朗子　松本順子　阿比留忠義　木田ひろ子　梅野眞澄
徳永洋二郎　広瀬　梓　西川吾郎　安河内史郎　柴藤清志　　北原豊　須佐恵司
野崎賢治　神原　堅　田原忠昭　古庄孝子　田中昭子　西口キミ子　栗木昭孝

岩見美津代　永井ゆり子
【整理作業】木村厚子　国武真理子　南里三佳　竹田幸子　平川泰世

II．調査区の立地と環境

福岡市域は西から、背振山系から北流する諸河川流域である糸島・早良・福岡平野、犬鳴山地から北西に流れる諸河川流域である粕屋平野が主要な部分を占め、これらが博多湾を囲むように広がっている。

上広瀬遺跡が位置する早良平野は、西側を背振主稜から北に派生する西山・飯盛・高祖地塁山地に、東側を同じく北に派生する油山山地と更に北に延びる飯倉台地によって画され、中央部を背振山地を源流とする室見川が北流し博多湾へと注いでいる。平野の北辺には姪浜をはじめとする第三紀層の小丘陵群が散在し、これらを繋ぐように砂丘が形成され、後背には沖積低地が広がっている。また両山地の山麓部や平野中央部には中位段丘下位砂礫面が残され、小田部台地にはこの上位の火山灰層が残存している。低位段丘の多くは室見川の扇状地平野・三角州平野部に埋没している。この下流域には西新町遺跡・藤崎遺跡・有田遺跡等、中流域には吉武遺跡群・浦江遺跡・金武城田遺



Ph. 1　調査区全景（北東から）

跡・重留遺跡・東入部遺跡群等、弥生から中世を中心とする集落遺跡が展開している。

上広瀬遺跡は、これらから南に遠く離れた背振山麓に近く、北東を油山、北西を西山、南を金山に囲まれた盆地状の内野・脇山・石釜地区の、室見川上流域右岸の中位段丘上に立地する。段丘は北を室見川に南を長尾川に開析され、北東に延びる舌状台地となっており、北東に延びる同一丘陵の段丘下段100ｍ程先には広瀬遺跡の第1次調査区が広がり、長尾川をはさんだ東側の舌状台地上には峯遺跡が広がる(Fig.1)。調査区は遺跡の南部に位置し、北側の第１次調査区に隣接する。標高は115～153ｍである。

上流域の歴史環境を概観してみると、中・下流域と異なり中心となるのは旧石器・縄文時代・中世で、旧石器時代は峯遺跡でスクレイパー等が、馬立山遺跡でナイフ型石器・尖頭器、脇山Ａ遺跡で細石核・三稜尖頭器、志水Ａ遺跡でナイフ型石器、本遺跡で三稜尖頭器・スクレイパー等が出土している。

縄文時代は脇山Ａ遺跡・脇山Ｂ遺跡・栗尾Ｂ遺跡・広瀬遺跡第１次調査等で早期から晩期に至るまとまった資料が出土している。

弥生時代以降は遺跡は希薄で、谷口遺跡で弥生時代の遺構がわずかに、古墳時代では集落のみならず、１基の古墳も造営されず空白地帯となっている。

古代では峯遺跡で掘立柱建物が検出されている。

集落が形成されるのは12・13世紀の中世以降で、峯遺跡・脇山Ａ遺跡・内野遺跡・広瀬遺跡・本遺跡で多くの貿易陶磁器と掘立柱建物群・土壙墓群等を検出している。文献では脇山・横山地区は嘉保３年（1096）背振上宮東門寺領に寄進され、15世紀中頃までには大規模な潅漑施設が造られ飛躍的な開墾がはじまる。15世紀末には博多聖福寺の寺領ともなっており、これらを背景とした開墾を裏付けている。

平成16年度実施した第１次調査では、縄文時代の土壙２基・柱穴・倒木痕89基・流路８条、中世溝17条・焼土壙47基・土壙27基・掘立柱建物29棟他柱穴多数・倒木痕５基、近世溝62条・土壙33基・水田開墾時の廃石土壙14基・開田以前の畑畝溝多数・柱穴・倒木痕13基が検出され、12世紀から13世紀初頭の水害で廃絶されるまでの遺跡内での中心集落が検出されている。

参考文献：吉良国光「背振山の所領支配と村落」『九州史学』特集号1987年
『広瀬遺跡1』福岡市埋蔵文化財調査報告書第865集2005年
『福岡市埋蔵文化財年報』VOL.18 2005年
『広瀬遺跡２・上広瀬遺跡１』福岡市埋蔵文化財調査報告書第901集2006年
『広瀬遺跡３』福岡市埋蔵文化財調査報告書第902集2006年

1 上広瀬遺跡
2 峯東遺跡
3 峯遺跡群
4 中山遺跡
5 内野遺跡群
6 広瀬遺跡
7 柿木原遺跡
8 仙道製鉄Ａ遺跡
9 内野仙道製鉄遺跡
10 脇山仙道製鉄遺跡
11 脇山城ノ原遺跡
12 大門遺跡
13 脇山Ａ遺跡群
14 野中遺跡
15 谷口遺跡
16 寺地遺跡
17 山田遺跡
18 脇山Ｂ遺跡群
19 栗尾Ａ遺跡
20 栗尾Ｂ遺跡
21 志水Ａ遺跡
22 志水Ｂ遺跡
23 安楽平城址
24 馬立山遺跡
25 金ヶ原製鉄遺跡
26 内ノ畑遺跡
27 池田城址
28 大坪南遺跡
29 内野古墳群
30 内野熊山遺跡群
31 松木田遺跡
32 長峰甕棺遺跡
33 岸田遺跡群
34 下兵庫町遺跡
35 岩本遺跡群
36 東入部遺跡群
37 中通甕棺遺跡
38 荒平古墳群Ｂ～Ｌ群

Fig. 1　周辺遺跡分布図(1/25,000)

Fig. 2　調査区位置図(1/8,000)

Fig. 3　調査区地形測量図(1/4,000)

Ⅲ．調査区の記録

１．調査の概要

遺跡は福岡市の西部、早良平野を貫流する室見川の上流部南岸の中位段丘上に立地する。段丘は北を室見川に南を長尾川に開析され、北東に延びる舌状台地となっており、北東に延びる同一丘陵の段丘下段100ｍ程先には広瀬遺跡の第１次調査区が広がり、長尾川をはさんだ東側の舌状台地上には峯遺跡が広がる。調査区は遺跡の南部に位置し、北側の第1次調査区に隣接する。標高は115～153ｍである。遺構は耕作土下の赤橙色粘土上面で検出され、部分的に縄文時代包含層が残る。

調査区は地山切り下げ工区ごとを調査区として１～15小区に分け、第１次調査測量のため現田面の区画に合わせ任意で設定した５ｍ間隔のグリッド線を踏襲した。これは旧国土座標第２系北より42°東偏する。調査面積は15,755㎡である。

検出した遺構は、縄文時代の土壙２基・落とし穴６基・柱穴・倒木痕35基、古代～中世の溝20条・焼土壙81基・炭焼窯１基・土壙２基・掘立柱建物２棟・柱穴多数、近世溝１条・水田開墾時の廃石土壙14基・柱穴多数で、西側を中心に13世紀代と、ほぼ全域を昭和38年福岡大水害の土石流が覆っている。現水田面（棚田）は水害後の復旧を契機として、２、３面の田面を１面に整備している。

遺物は、中近世混入資料として旧石器・縄文時代早期晩期土器・石器を、中世溝を中心に土師器坏・皿・貿易陶磁器などコンテナ２箱分を検出している。

旧石器・縄文時代早期は落とし穴・狩猟石器から狩り場として活用されたことが伺われ、倒木痕の大半は縄文時代晩期に属し、この時期に開墾された可能性がある。AMS年代測定でも該期の年代の調査結果が得られている（付編）。

古代から中世は簡易な炭焼遺構と思われる焼土壙が殆どで、第13区では溝に囲まれた２間×２間の掘立柱建物２棟と2.8×1.8ｍの半地下式の炭焼窯を検出した。古代末から中世に操業されたもので、炭焼窯・炭焼小屋・炭倉等がまとまって検出されたものである。

中世の遺構は1次調査区に近い12区・13区で柱穴がまとまって検出される程度で、居住域としての内容は希薄であり、中世の開墾以降、畑地を中心とした耕作地であったと思われる。

Ph. 2　調査前風景（北から）

２．１・２区の調査

調査第１・２区は、事業地中央を北北東に延びる主丘陵の西緩斜面、縦方向に並ぶ棚田列に、15区と列を成して位置する調査区で、検出面は表土下の赤褐～黄褐色混礫粘質土上面。ともに東西両側と下斜面を灰黄色の土石流が厚く覆う。このため地山は大きく削られ、遺構残存の可能性は低いと判断し、土石流部は深さ１ｍ程地山面を検出した段階で作業を止めている。調査面積は１区で800㎡中362㎡、下段の２区で500㎡中204㎡である。標高は１区で137ｍ、２区で134ｍ。遺構は１区で縄文時代の貯蔵穴状遺構１基・古代～中世焼土壙４基を、２区で近世廃石土壙１基を検出した。

１）１区の調査（Fig.4）

幅７ｍ程の２面の旧水田面からなり、全面を昭和38年福岡大水害の土石流が、東西両側を中世の大規模な土石流が厚く覆う。古代～中世の焼土壙SK01・02・03・03′の４基・縄文時代の貯蔵穴状遺構1基を検出している。

⑴　縄文時代の調査　①貯蔵穴状遺構**SK04**（Fig.5 Ph.4）　下段傾斜面西に位置し、1.8×1.7ｍ深さ30㎝程方形に下層の礫層まで掘り下げ、さらに西隅に0.8×0.5ｍ深さ60㎝程礫層を掘削する。覆土は暗褐色土で砂・粘土の堆積はない。

⑵　古代～中世の調査

①焼土壙**SK01**（Fig.5 Ph.5）調査区上段中央に位置する。2.14×1.15ｍ深さ36㎝を測る大型で「広瀬１」分類の隅丸方形B類に当たる。覆土は床上に10㎝近く炭灰層が堆積し炭が一部残る。地

Ph. 3　２区全景（東から）

Ph. 4　１区SK04（北から）

Ph. 5　１区SK01（北西から）

Ph. 6　１区SK02・03土層断面（西から）

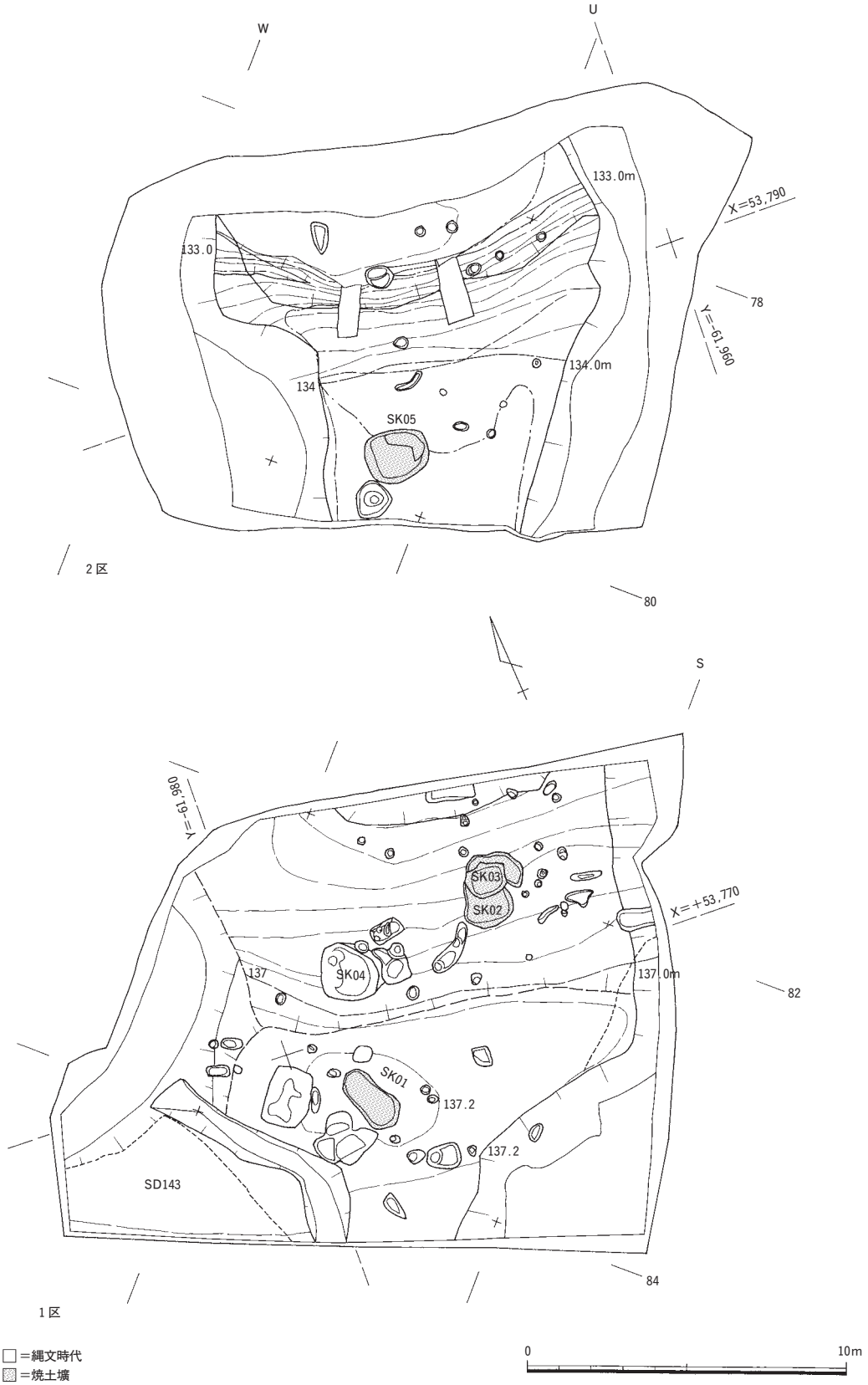


Fig. 4　1・2区遺構全体図(1/200)

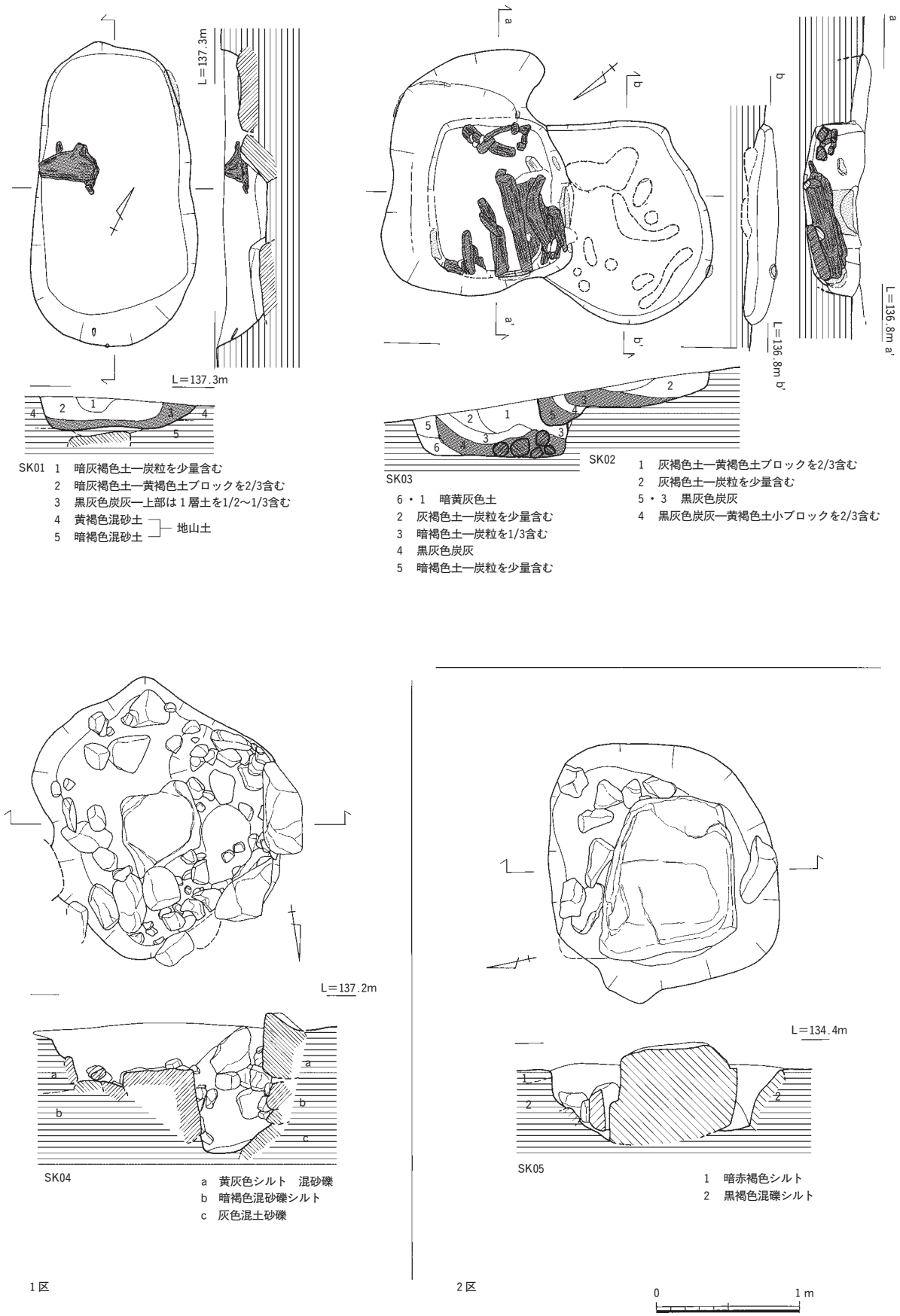


Fig. 5 1区SK01・02・03・04 2区05実測図(1/40)

Ph. 7　1区SK02・03（北から）

Ph. 8　2区SK05（北から）

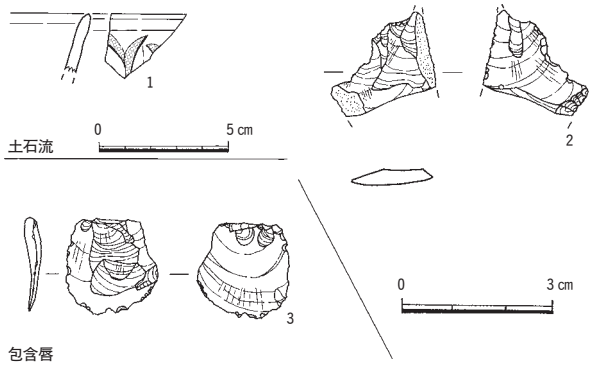


Fig. 6　1区出土遺物実測図(2/3・1-1/3)

山土混じりの暗灰褐色土で埋め戻す。

SK02・03・03′（Fig.5 Ph.6・7）　調査区下段中央に位置し3基が切り合う。03′・03・02の順で掘削される。長さ1.1～1.5m深さ35cm程の小型のB類で、SK02は炭灰層の堆積から2度操業される。SK03は床上に、径5cm前後長さ70cm程に揃えて並べられた炭が半量残されて出土した。上面の3層が被熱しており焼成中覆っていた可能性がある。

②土石流**SD143**　調査区東側を覆う灰色粗砂礫の土石流で調査第3区間を大きく抉っている。

出土遺物(Fig.6 Ph.12)遺物は少量で、**1**は龍泉窯系II類の鎬蓮弁文碗口縁。使用による擦痕が著しい。土石流が13世紀初～前半以降の時期を示す。**2**は晩期の両側を使用する腰岳黒曜石剝片。他に中世土師器片等少量出土。**3**は土石流下灰褐色包含層出土の外縁部を使用する晩期腰岳黒曜石剝片。

2）2区の調査（Fig.4 Ph.3)

1区の下方8m程に位置し高低差3m。2面の旧水田面からなり、東西両側を1区から続く中世の大規模な土石流が覆う。近世の廃石土壙SK05を1基を検出している。

Ph. 9　2区全景（西から）

(1)　廃石土壙**SK05**（Fig.5 Ph.8）　上段中央に位置し、1.8×1.6m深さ61cmを測る。径1.5m程の耕作に邪魔な巨石の南に、頂部が露出しない程度に掘り込んだ壙内に落とし込み、周辺の小石を投げ込んで処理したA類土壙で、覆土は灰色砂質土。遺物の検出は無い。

3．3区の調査（Fig.7 Ph.9）

中世土石流を挟んで2区の東に、主丘陵の西側縦方向に並ぶ棚田列に、9区と列を成して位置する調査区で、検出面は表土下の赤褐～黄褐色混礫粘質土上面。西側を灰

黄色の土石流が厚く覆う。調査は西部210㎡を行い（3-1区）東部823㎡は後日の追加調査区である（3-2区）。12×55ｍの旧田面２面の細長い調査区で、標高は134ｍ。遺構は古代～中世焼土壙５基・溝３条を検出した。

⑴　焼土壙（Fig.8）　焼土壙は西に06・07・08の３基・東に137・138の２基が分布する。軸を地形に対し直交方向に採るものが多い。

SK06（Fig.8）　調査区西端Q16グリッドに位置。1.58×0.94ｍ深さ32㎝を測るB類土壙。軸は地形に並行する。削平が深く、焼土は一部しか残らない。炭灰層が２層あり２回操業される。

SK07（Fig.8）　西部Q14グリッドに位置する。0.98×0.72ｍ深さ８㎝の特小のB類土壙。軸は地形に直交する。削平が深く、炭灰層しか残らない。

SK08（Fig.8Ph.11）　西部Q15グリッドに位置

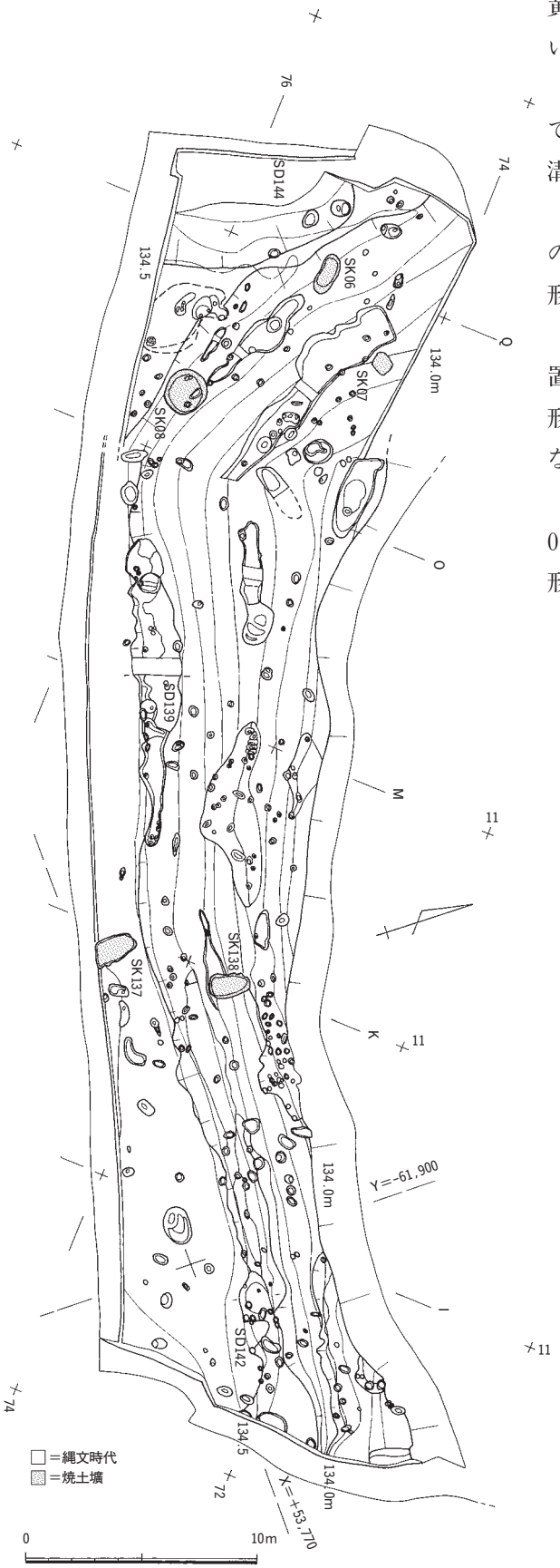
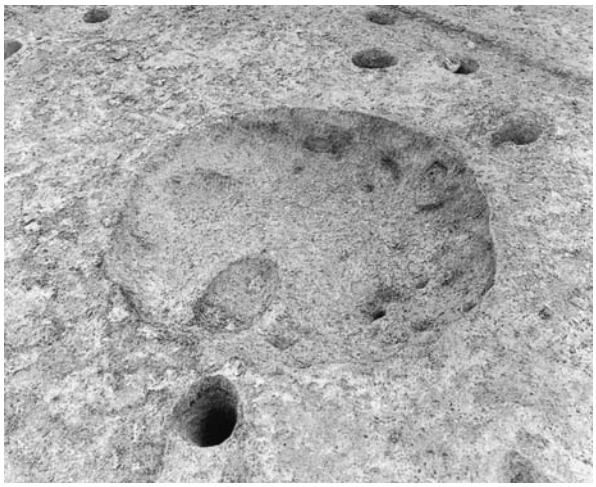


Fig. 7　３区遺構全体図(1/300)

Ph. 10　３－１区SK08土層断面（北西から）



Ph. 11　３－１区SK08（北西から）

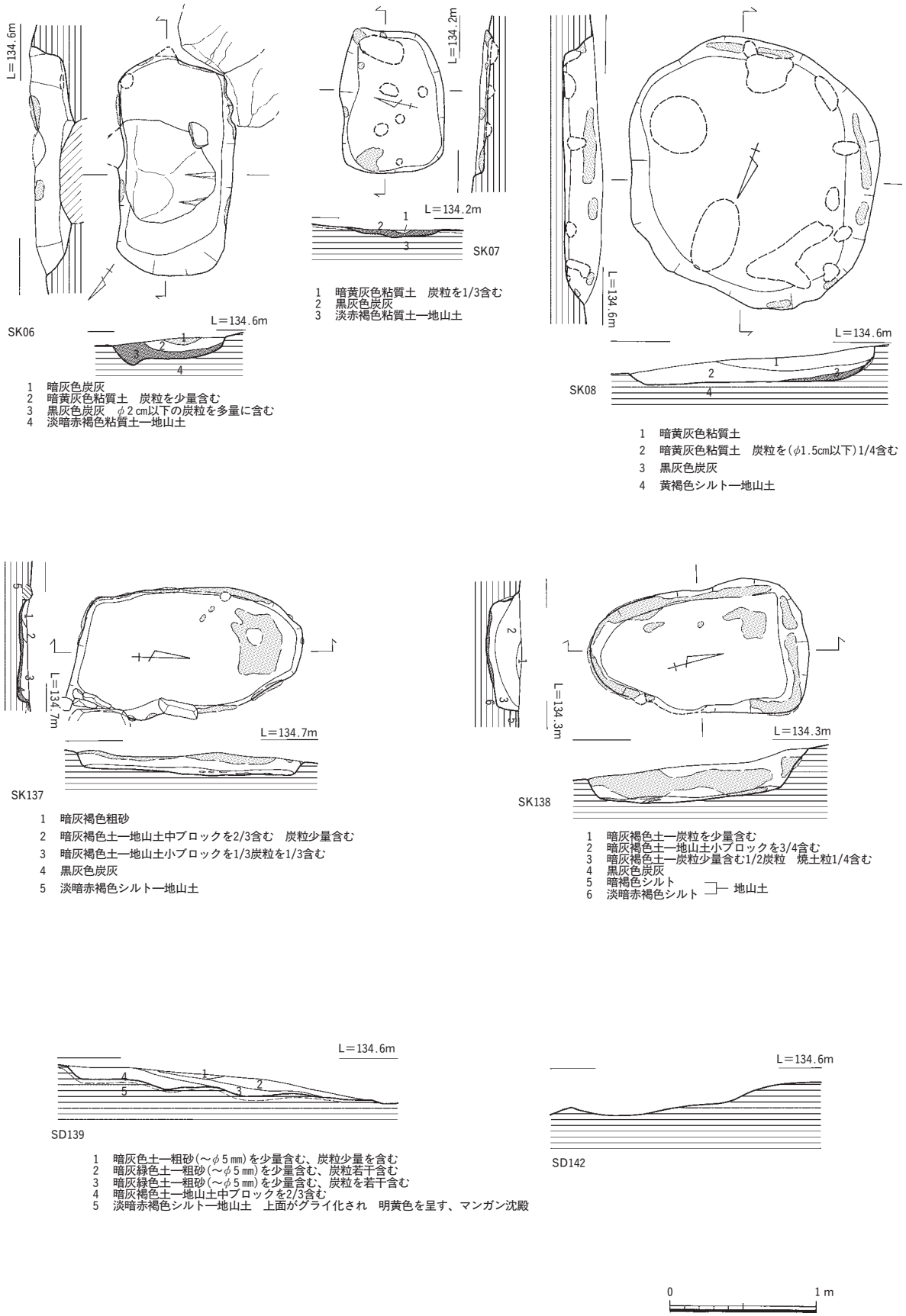
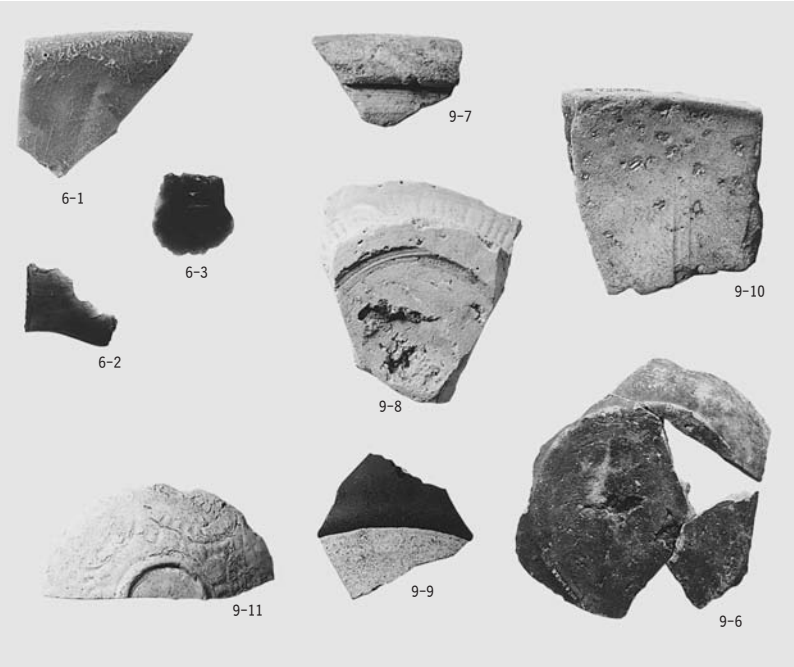


Fig. 8　3区SK06・07・08・137・138、SD139・142実測図(1/40)

する。1.85×1.67ｍ深さ27㎝の大型C類。山側に焼土壁が少量残り、炭灰層も同方にしか残らない。流土で自然に埋まる。

SK137 (Fig.8) 東部J14グリッドに位置する台形A類土壙。1.55×0.84ｍ深さ25㎝を測る。軸は地形に直交する。床上8㎝程に焼土壁が薄く残り、床直上には2～3㎝炭粒・灰層が堆積する。



Ph. 12　3区出土遺物

SK138 (Fig.8 Ph.13･14) SK137の北5ｍに位置するA類土壙。1.50×0.92ｍ深さ40㎝。軸は地形に直交。残りは比較的良好で床上3㎝程から上位に焼土壁が残り、床直上に炭粒・灰層が薄く堆積し流土で埋まる。白磁碗小片が出土。

(2)　溝状遺構 (Fig.8)　途切れながら地形に並行する3段の溝を検出しており、床面は狭い段を成し、段畑の耕作面と考えられる。

SD139 (Fig.8)　3段の最上段に位置し、幅3ｍ長さ20ｍを測り、SD142とともに3本が直列する。

鋤き返しを受け幅20㎝ほどの2段の低い段が切り合う。土層は鋤き返しにより下層ほど地山土のブロックが大きく、増加し、最下面はマンガン・鉄分が沈殿する。

出土遺物 (Fig.9) **4** は土師器坏底部で径10.5㎝。外底は右回転糸切り。12世紀後半～13世紀初。

SD142 (Fig.8)　SD139に連なり東7ｍ程に位置する。幅1.5ｍ長さ30ｍを測り、同様に幅20㎝程の2段の低い段を成す。

出土遺物 (Fig.9) **5** は短く「く」字に屈曲する土師質鍋の口縁。内面はヨコハケ外面に煤が付着する。15世紀後半か。

(3)　土石流**SD144**　1区SD143と一連の土石流で東端に位置し、地山を深く抉る。

出土遺物 (Fig.9) **6** は土師器皿

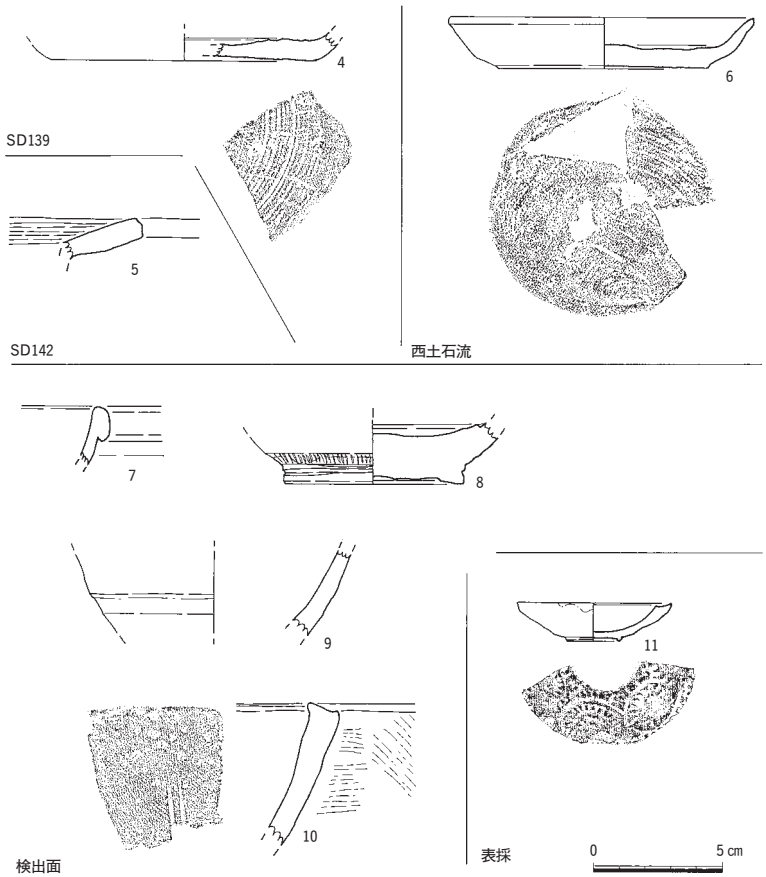


Fig. 9　3区出土遺物実測図(1/3)

Ph. 13　3－2区SK138土層断面（北から）

Ph. 14　3－2区SK138（西から）

で口径12.0器高2.0㎝。外底は右回転糸切り。分厚い底部で８㎜を測る。12世紀後半～13世紀初。

(4)　その他の遺物(Fig.9)　**7**～**10**は検出面出土。**7**は明黄灰色を呈す白磁Ⅱ類碗口縁。**8**は白磁Ⅲ類碗底部。底径7.5㎝。高台脇をトビカンナ状に削る。見込みの擦痕が著しい。周縁を打ち欠き瓦玉とする。**9**は美野瀬戸系天目碗片。茶褐色の不透明釉が外面屈曲部まで厚く掛かり以下に左回転ケズリを施す。胎土は淡黄灰色を呈し粒子が粗い。**10**は土師質擂鉢口縁部。口唇をハケで面取りし内外のヨコ・ナナメハケを粗くなでる。**11**は表採の肥前系白磁紅皿。型造りの蛸唐草文を施す。

４．４区の調査（Fig.10 Ph.15）

主丘陵の西側縦方向に並ぶ棚田列中央に、３・９区と並行して位置する調査区で、検出面は表土及び昭和38年土石流下の赤褐～黄褐色混礫粘質土上面。1区同様東西両側を中世土石流が深く抉る。調査は北196㎡を行い（4-1区）南部392㎡は後日の追加調査区である（4-2区）。旧田面２面の平坦面と中世包含層が堆積し北東に下がる緩斜面からなる。標高は141ｍ。遺構は古代～中世焼土壙３基・溝2条・土石流２条を検出した。

(1)　焼土壙（Fig.12）焼土壙は調査区北西緩斜面に09・10・11の３基が分布する。地形に並行方向を採るものが多い。

Ph. 15　４区全景（西から）

SK09（Fig.12）　調査区北西N89グリッドに位置する。1.02×0.7ｍ深さ22㎝を測る不整方形に近いB類土壙で西辺は地山の岩露頭が成す。軸は地形に並行する。削平が深く、焼土壁は床上15㎝程に若干遺存する。炭灰層下に薄い流土層があり、掘削後一定期間放置されている。

SK10（Fig.12 Ph.16）　N90グリッドに位置する。1.77×1.04ｍ深さ46㎝を測るA'類土壙で遺存状態は良好。軸は地形に並行する。床上５㎝程から壁が赤く焼け上端で厚み３㎝程になる。一部床面も赤変する。炭灰層下に薄い流土層があり、SK09同様掘

削後一定期間置かれる。炭灰層上は流土で自然に埋まる。

SK11(Fig.12)　SK09の北東に直列する。1.25×0.73m深さ18cmを測る長方形のB類土壙。軸は地形に並行する。削平が深く、焼土壁は床上10cm程に若干遺存する。薄い炭灰層上は流土で自然に埋

Ph. 16　4区SK10土層断面（北から）

Ph. 17　4区SD12（北から）

Fig. 10　4区遺構全体図(1/200)

Ph. 18　4区SD13土層断面（北から）

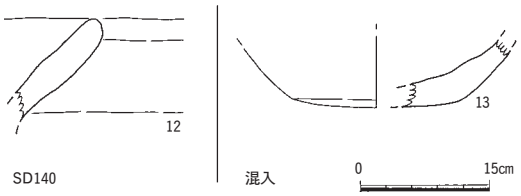


Fig. 11　4区出土遺物実測図(1/3)

まる。

(2)　溝状遺構(Fig.12 Ph.17)　調査区平坦部東西両端に幅約10ｍの間隔で稜線方向に直線的に流れる**SD12・140**の２条があるが、土石流と並行し底面も荒

Ph. 19　4区SD13（北から）

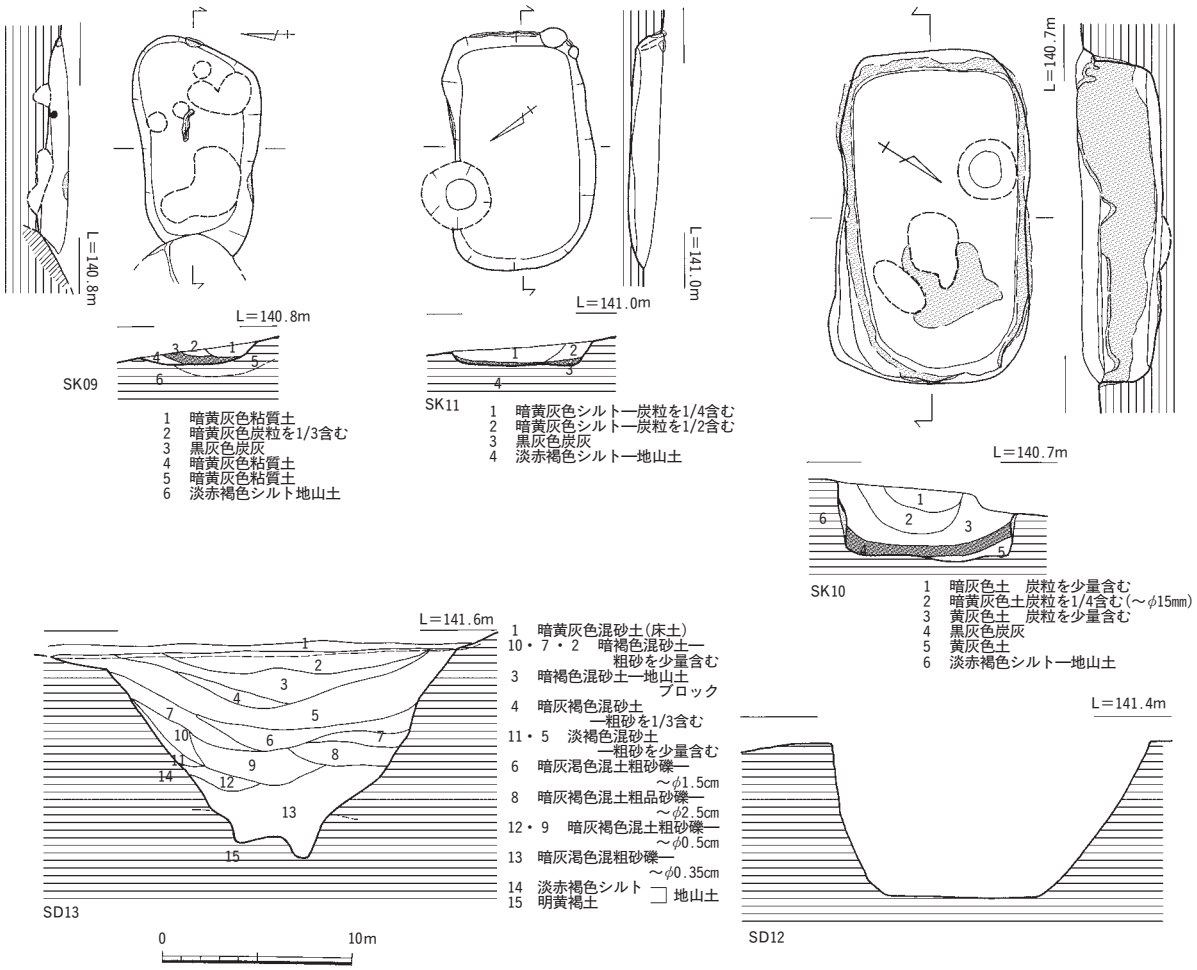


Fig. 12　4区SK09・10・11、SD12・13実測図(1/40)

れるため土石流の支流の可能性もある。

出土遺物（Fig.11）　**12**はSD12出土の弥生後期前半甕底部。他に中世土師器坏・皿片出土。**13**はSD140出土の浅い「く」字口縁土師質鍋。15世紀か。

⑶　土石流（Fig.12）　調査区東西両端にあり、特に西側は３・９区から連なり、大きく深い。

SD13（Fig.12 Ph.18・19）　調査区東に位置し、幅1.8深さ１ｍ程で稜線方向に流れ末端で他の流れに合流する。底から60㎝程は粗砂礫層で（６～13層）、以上は粒度が細かい砂質土に替わる。上面から25㎝程は地山客土で埋め戻され（第３層）、災害の復旧が測られている。遺物は土師質鍋片等が出土する。

５．５区の調査（Fig.13 Ph.20）

主丘陵の西側縦方向に並ぶ棚田列上位にあり、６・７区と並列して位置する調査区である。旧田面4面の、南平坦面と中世包含層が堆積し北東に下がる緩斜面からなる。検出面は赤褐～黄褐色混礫粘質土上面で、調査面積は636㎡を測る。標高は149ｍ。検出は縄文時代暗褐色土～暗黄灰色シルトを覆土とする倒木痕等の自然壙10基以上、遺構は古代～中世の焼土壙４基・近世廃石土壙６基・柱穴多数を検出した。

⑴　焼土壙（Fig.14）　焼土壙は調査区上位南西平坦面の、地形に沿って幅３ｍ程の帯状の範囲に14・15・21・22の４基が分布する。地形に直交するものが多い。

SK14（Fig.14）　調査区南東端に位置する。1.75×0.77ｍ深さ８㎝を測る不整形のB類土壙で軸を地形に並行にとる。遺存状態は不良。床面に落ちた焼土壁が若干検出される。炭粒層下に薄い流土層があり、掘削後一定期間置かれる。

SK15（Fig.14 Ph.21・22）　SK14の西５ｍに位置する。1.80×1.15ｍ深さ27㎝を測るA類土壙で南西部を廃石土壙SK16に切られる。床上５～18㎝上に焼土壁が残る。自然堆積の間層を挟んで炭灰層が２面あり２度操業される。

SK21（Fig.14）　調査区北西に位置し、一部が調査区外にかかる。1.50＋α×0.85ｍ深さ11㎝を測る隅丸のA'類土壙で、遺存状態は不良。床上の炭灰層が地山土ブロックを半量含み、炭灰廃棄土壙の可能性も高い。

SK22（Fig.14）　SK21の西８ｍに位置する。1.68×1.60ｍ深さ13㎝を測る浅い円形のC類土壙。床上に５㎝程焼土粒を多く含む炭灰層が堆積する。

Ph. 20　５区全景（東から）

⑵　廃石土壙（Fig.15）水田開墾時に、牛馬耕に邪魔な岩石や露頭を耕作土下面以下に埋め込み廃棄したと思われる土壙で、岩石の間近にこれより深い穴を掘って落とし込み埋め込むA類と、露頭周辺を掘削し耕作面上に突出した部分を打ち割り除去し、これ以下に埋め込むB類の２種があり、調査区東側で16・17・18・19・20・23の６基を検出した。遺物の出土は無いが、広瀬遺跡１次調査で肥前系陶磁器片が出土しており、近世に比定される。

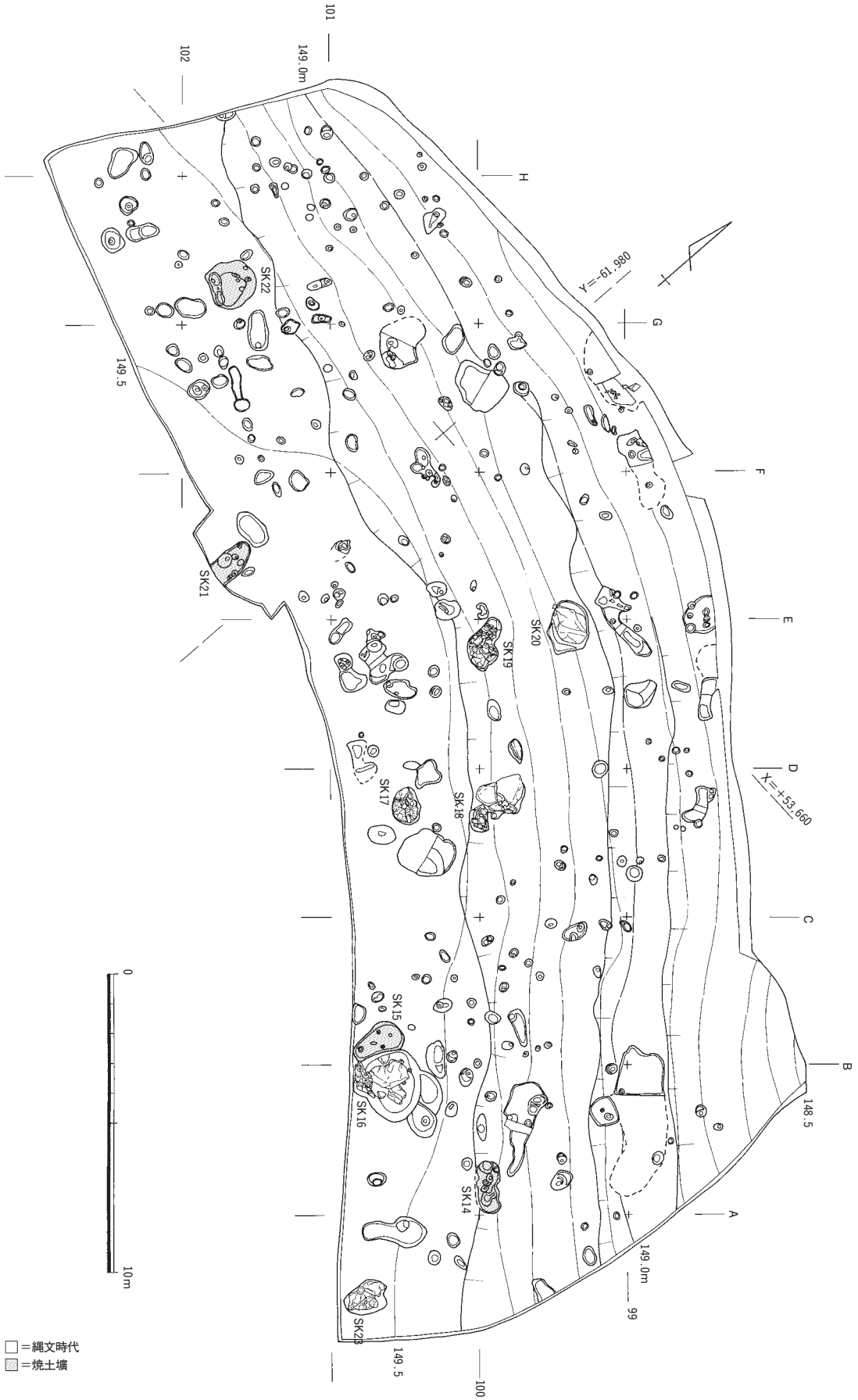


Fig. 13　5区遺構全体図(1/200)

SK16（Fig.15 Ph.23）　調査区南、B100グリッドに位置し、焼土壙SK15を切る。A･B類併用で1.3×0.5ｍの露頭の横に2.4×2.35ｍ深さ65㎝の土壙を掘り、1.35～0.6ｍの塊石を落とし込み露頭を砕いた砕石を周囲に埋め込む。

SK17（Fig.15 Ph.24）　調査区中央D100グリッドに位置するB類土壙で、1.25×0.92ｍの露頭の周

Ph. 21　5区SK15土層断面（北から）

Ph. 22　5区SK15（北から）

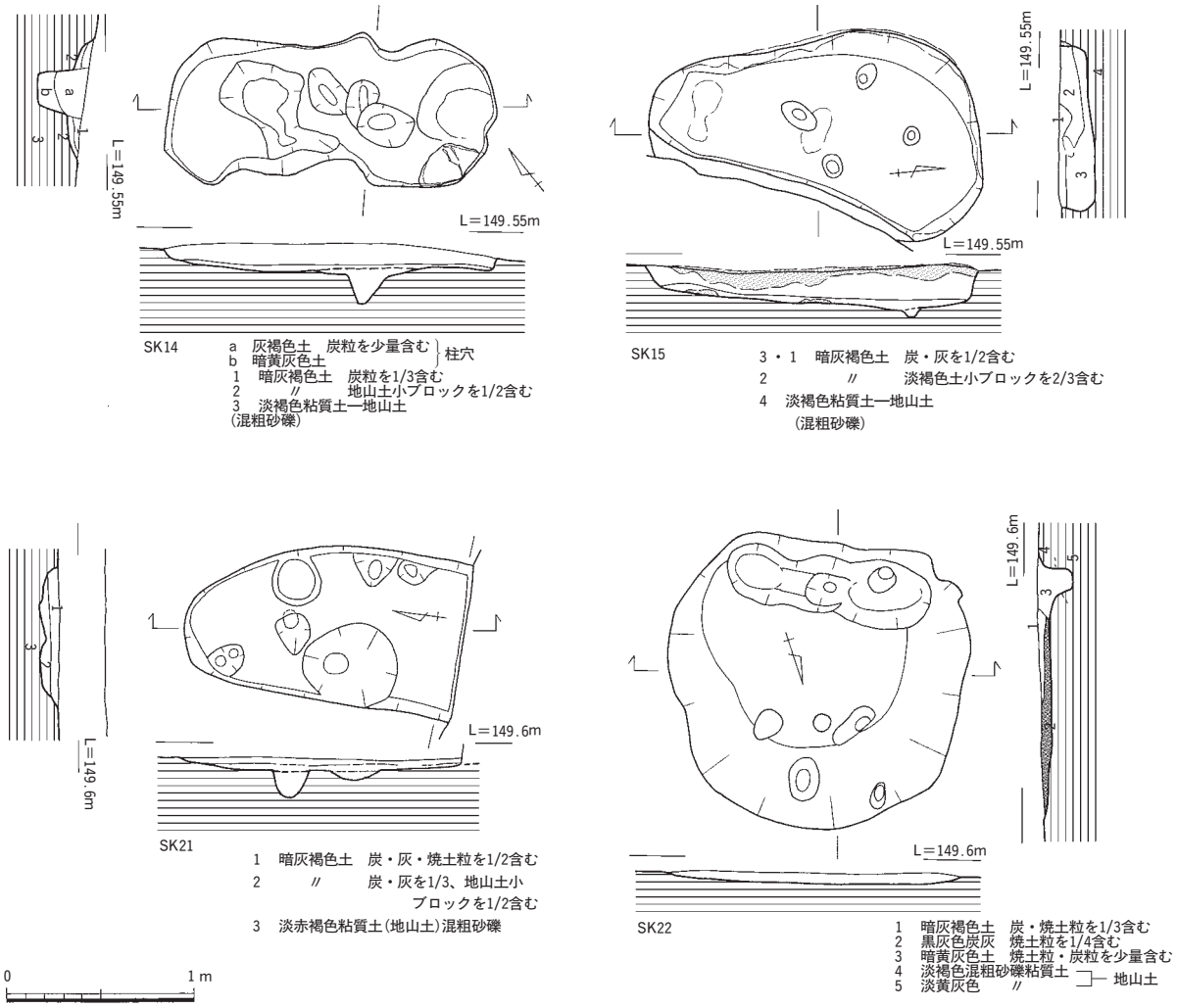
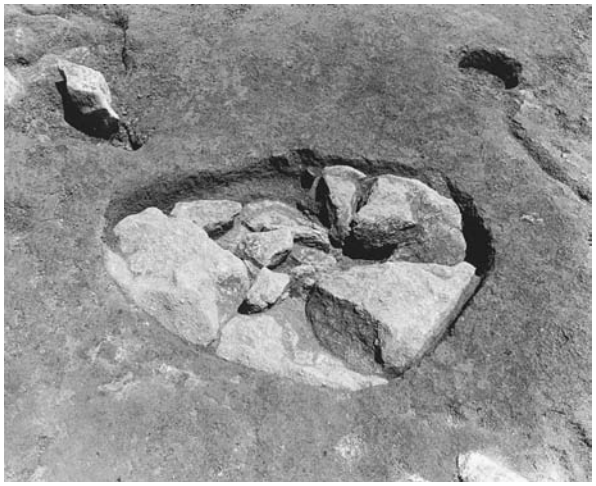


Fig. 14　5区SK14・15・21・22実体図(1/40)

Ph. 23　5区SK16（北から）



Ph. 24　5区SK17（南から）

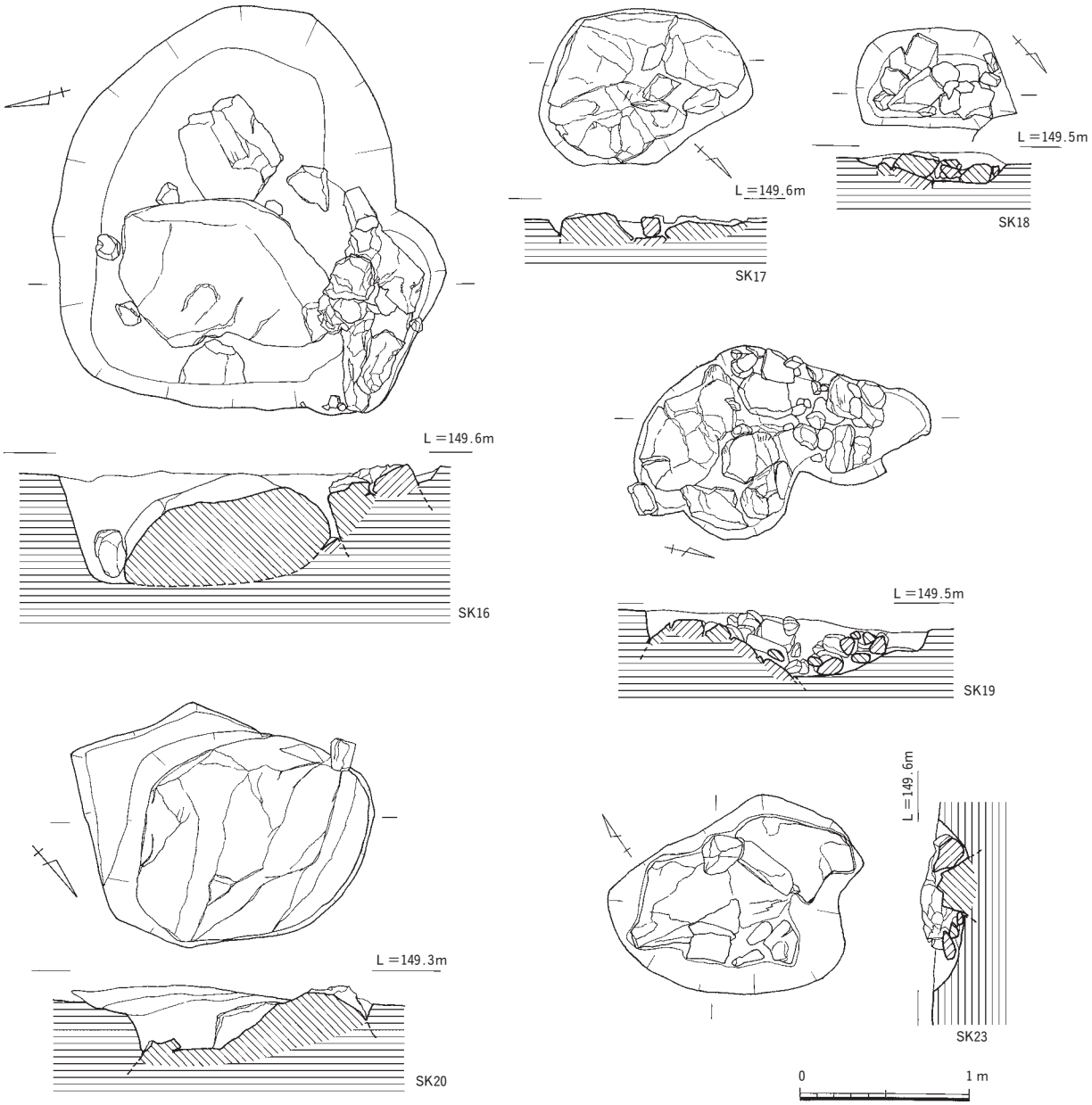


Fig. 15　5区SK16・17・18・19・20・23実測図(1/40)

りを深さ11㎝程掘り、突出部分を割り採って除去し、一部を埋め込む。

SK18（Fig.15）　SK17の北東1.5ｍに位置する小型のB類土壙で、45×35㎝程の露頭の西周りを98×60㎝深さ20㎝程掘り、露頭を砕いた砕石を埋め込む。

SK19（Fig.15）　調査区中央E99グリッドに位置するB類土壙で、90×85㎝程の露頭の北西周りを1.72×1.1m深さ35㎝程掘り、露頭を砕いた砕石を埋め込む。

SK20（Fig.15）　SK19の北1.5mに位置するB類土壙で、1.5×1.15ｍ程の巨岩の露頭の周りを深さ数㎝掘り、突出部分を割り採って除去する。

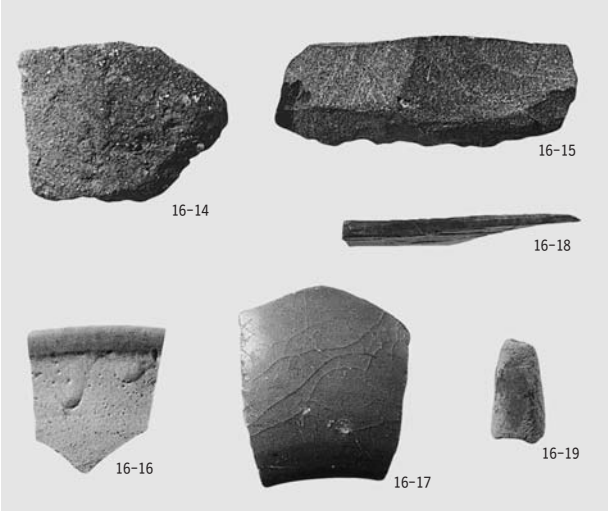
SK23（Fig.15）　調査区南端に位置するB類土壙で、1.4×0.5ｍ程の露頭の周りを1.5×1.15ｍ深さ15㎝程掘り、露頭を砕いた砕石を埋め込む。

⑶　柱穴出土遺物(Fig.16 Ph.25)　**16**はF100グリッドSP01出土の白磁Ⅱ類碗口縁で、釉は半透明の淡黄灰色を呈し、細かなピンホールが多数見られる。他に土師器坏皿片・黒耀石剝片が出土する。

他の柱穴からは器種不明の縄文土器・土師器片が少量出土する。

⑷　中世包含層出土遺物(Fig.16 Ph.25)　北西緩斜面の灰褐色砂質土からの出土。下面にマンガンが沈殿し、耕作土の可能性が高い。**17**は片切彫りの龍泉窯系青磁Ⅱ類碗小片。13世紀初～前半。**18**は淡黄緑色凝灰質安山岩ホルンフェルス製の仕上げ砥石片で砥面２面には整形時の鋸引痕が残る。上面節理方向に４㎜幅で鋸引きし、溝から連続剝離する。他に縄文・中世土師器片が出土する。

⑸　その他の資料（Fig.16 Ph.25）　**14**はSK15混入の縄文晩期粗製土器片。胎土に粗い石英粒を多量に含む。内外に不定方向の貝殻条痕を施す。**15**は検出面出土のサヌカイト製



Ph. 25　５区出土遺物

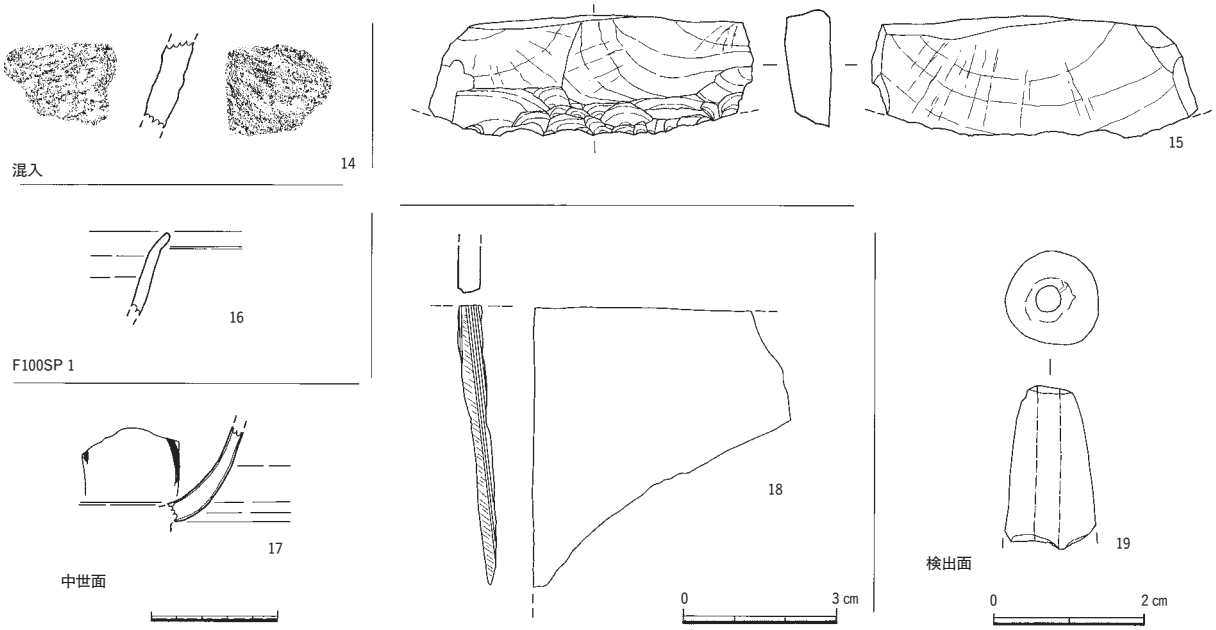


Fig. 16　５区出土遺物実測図(1/3・15・18-2/3・19-1/1)

掻器。現況で66×25×９㎜を測る。横剝ぎ剝片の主剝面側より二次剝離で厚い刃部を形成する。器表は風化が進み暗灰色を呈し、早期と思われる。両側・上部の剝離は真新しく黒灰色を呈し後代に成される。**19**は検出面出土の管状土錘の半欠品。径12孔径３㎜を測る。

６．６・７区の調査（Fig.17）

主丘陵の西側縦方向に並ぶ棚田列上位にあり、５区と並列してその上位に位置する調査区である。旧田面２～３面の細長い調査区で、南平坦面と縄文～中世灰褐色包含層が堆積し、北東に下がる緩斜面からなる。検出面は赤褐～黄褐色混礫粘質土上面で東部は中位段丘礫層が露出する。６区は調査面積588㎡、標高は151ｍ。縄文時代自然壙10基以上、近世廃石土壙３基、７区は636㎡、標高は153

Fig. 17　６・７区遺構全体図(1/300)

mで縄文時代自然壙20基以上、古代～中世の焼土壙３基・近世廃石土壙２基を検出した。

１） ６区の調査（Fig.17 Ph.26）

⑴ 廃石土壙（Fig.18） 調査区内に並行して３基が位置する。

SK24（Fig.18 Ph.28） 調査区平坦部の西端、H105グリッドに位置するB類土壙。80×90cmの露頭の周りに2.05×1.17m深さ25cmの土壙を掘り、露頭を砕いた砕石を周囲に埋め込む。

SK25（Fig.18） 調査区平坦部の中央、D104グリッドに位置するB類土壙。60×50cmの露頭の北周りに1.1×0.8m深さ40cmの土壙を掘り、露頭を砕いた砕石を北側に埋め込む。

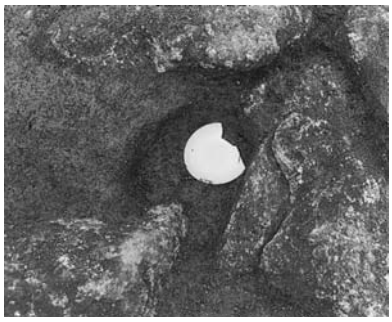
SK26（Fig.18 Ph.29） 調査区東端、A102グリッドに位置するA･B類併用土壙。95×82cm深さ23cmの土壙を掘り、85×55cm程の塊石を落とし込み、なおかつ突出した露頭を打ち割り除去する。

Ph. 26 ６区全景（東から）

Ph. 27 ７区全景（東から）

Ph. 28 ６区SK24（北から）

Ph. 29 ６区SK26（西から）



Ph. 30 ６区白磁皿出土状況

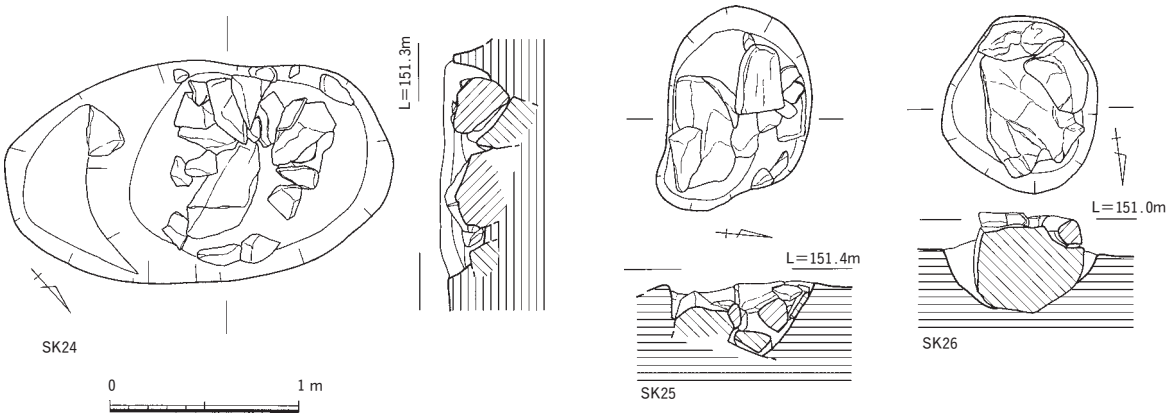
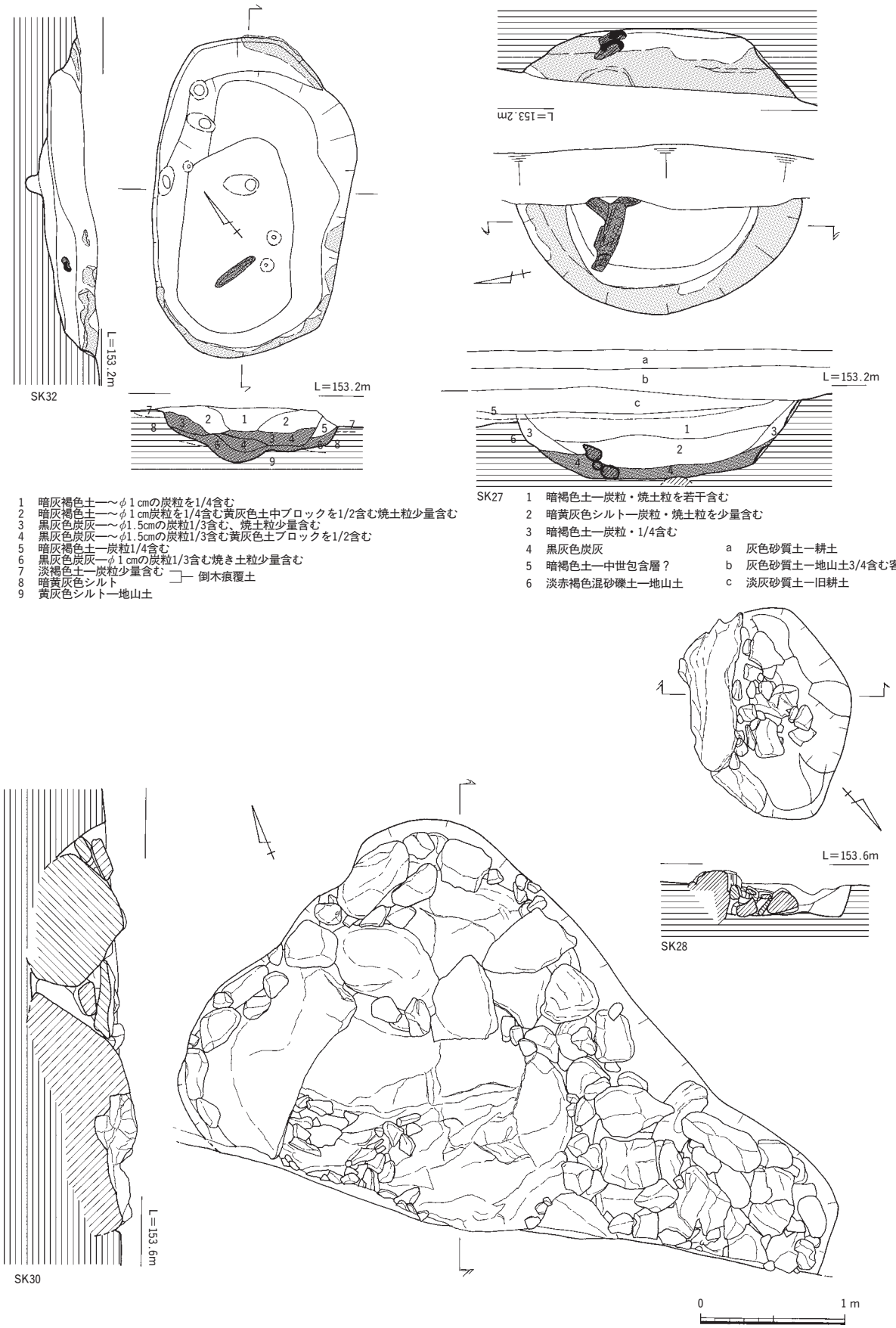


Fig. 18 ６区SK24・25・26実測図(1/40)



1　暗灰褐色土―～φ1cmの炭粒を1/4含む
2　暗灰褐色土―～φ1cm炭粒を1/4含む黄灰色土中ブロックを1/2含む焼土粒少量含む
3　黒灰色炭灰―～φ1.5cmの炭粒1/3含む、焼土粒少量含む
4　黒灰色炭灰―～φ1.5cmの炭粒1/3含む黄灰色土ブロックを1/2含む
5　暗灰褐色土―炭粒1/4含む
6　黒灰色炭灰―φ1cmの炭粒1/3含む焼き土粒少量含む
7　淡褐色土―炭粒少量含む　倒木痕覆土
8　暗黄灰色シルト
9　黄灰色シルト―地山土

1　暗褐色土―炭粒・焼土粒を若干含む
2　暗黄灰色シルト―炭粒・焼土粒を少量含む
3　暗褐色土―炭粒・1/4含む
4　黒灰色炭灰
5　暗褐色土―中世包含層？
6　淡赤褐色混砂礫土―地山土

a　灰色砂質土―耕土
b　灰色砂質土―地山土3/4含む客土
c　淡灰砂質土―旧耕土

Fig. 19　7区SK27・28・30・32実測図(1/40)

(2) その他の遺物（Fig.20 Ph.35） **20**はB103グリッドSP1出土（Ph.30）白磁B類皿で口径11.7器高2.9㎝。灯盞に使用され、口縁を打ち欠き灯心受けとし、灯心が焼き付く。**21**は暗褐色緩斜面中世包含層出土の古墳時代土師器甕口縁片。

Ph. 31　7区SX31（北から）

Ph. 32　7区SX34土層断面（北から）

Ph. 33　7区SK32土層断面（北から）

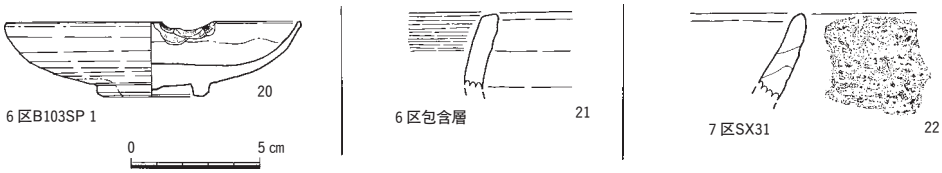


Fig. 20　6・7区出土遺物実測図(1/3)

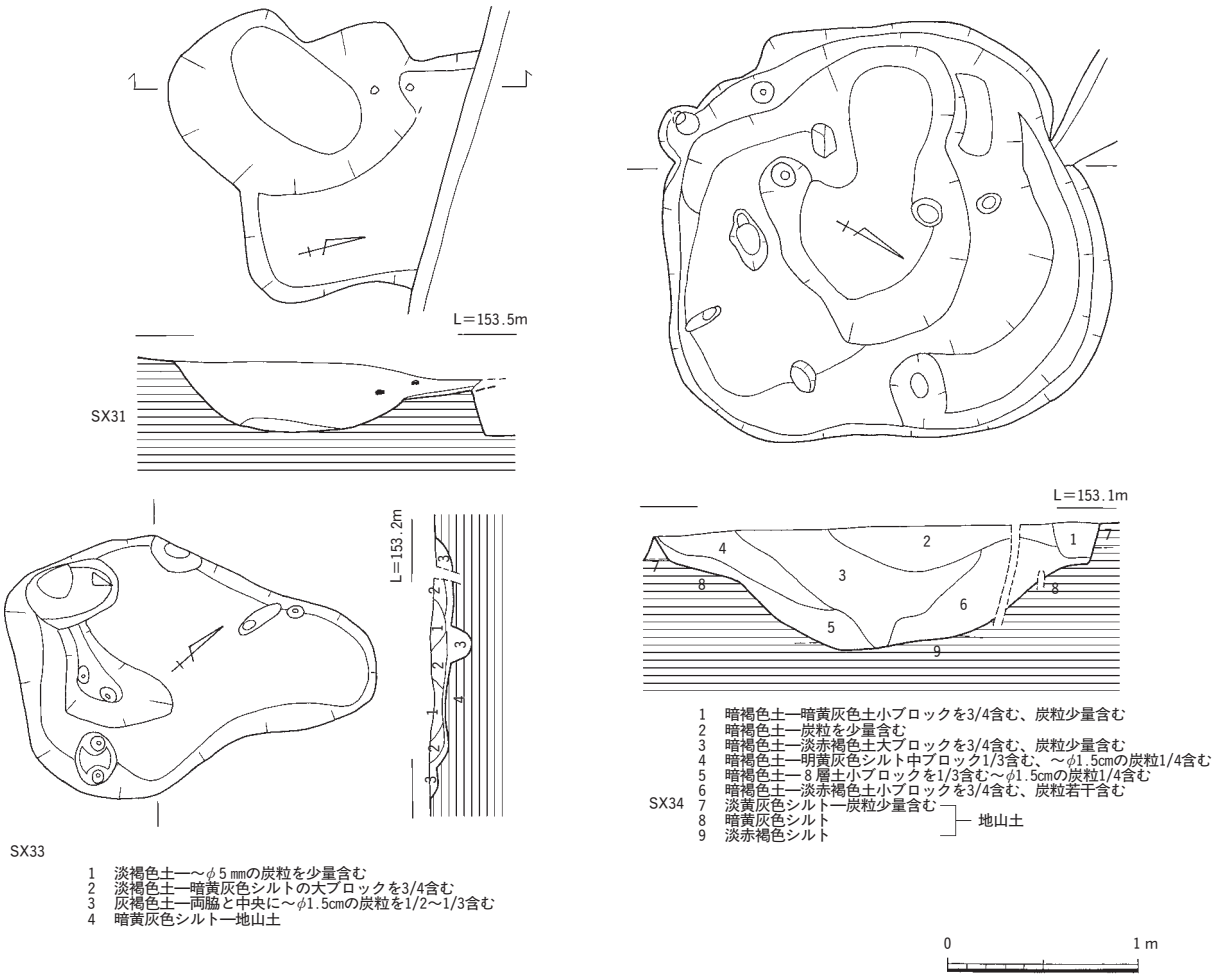
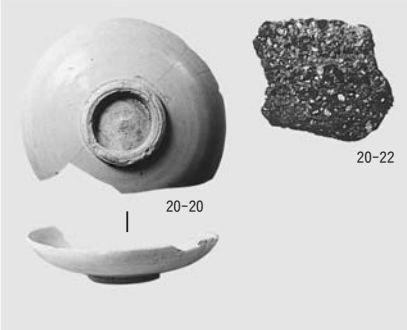


Fig. 21　7区SX31・33・34実測図(1/40)

Ph. 34　7区SK30（東から）



Ph. 35　6・7区出土遺物

2）7区の調査（Fig.17 Ph.27）

⑴　焼土壙（Fig.19）　焼土壙は 調査区内に並行して27・29・32の3基が位置する。

SK27（Fig.19）　調査区東端に位置する。2.0×0.75m＋α深さ44cmを測る不整形のA類土壙か。床に残存する炭の方向から、軸は地形に並行にとる。床上15cm程から焼土壁が残存する。厚みは2cm程で薄い。7cm程の炭灰層中に径10cm弱の炭3本が重なって残存する。上層は自然に埋没する。

SK32（Fig.19 Ph.33）　調査区中央に位置する。2.25×1.4m深さ53cmを測る隅丸方形のB類土壙。操業し埋没後内側に1.95×1.1m深さ22cmの土壙を掘削し2度目の操業を行う。このため他は削られ小口側に床上15cm程から焼土壁が残存する。厚みは3cm程。軸は地形に直交にとる。

⑵　廃石土壙（Fig.19）　調査区南部に並行して2基が位置する。

SK28（Fig.19）　調査区平坦部の南部、A107グリッドに位置するB類土壙で焼土壙SK29を切る。130×30cmの露頭北周りに1.53×1.15m深さ24cmの土壙を掘り、露頭を砕いた砕石を北側に埋め込む。

SK30（Fig.19 Ph.34）　SK28の1.5m北に位置するB類土壙。3.0×1.7・1.6×0.9mの巨岩の露頭周りに4.65×2.7m＋α深さ60cmの土壙を掘り、露頭を赤変するほど加熱後水を掛け収縮差を利用した破砕を加え、砕いた砕石を隙間無く周囲に埋め込む。

⑶　自然壙（Fig.21）　調査区全域に暗褐色土～暗黄灰色シルトを覆土とする倒木痕等の自然壙20基以上を検出している。倒木痕は開墾時の人為の可能性もあるが、明確でないため自然壙とする。

SX31（Fig.21 Ph.31）　中央のC107グリッドに位置する。1.55×1.64m＋α深さ35cmを測る不整形の土壙。床上20cm程で晩期粗製土器片を検出。覆土は炭粒をやや多く含む暗褐色土で、炭粒はAMS測定の結果BC1440～1370の年代値が得られ（付編Ⅰ）、樹種はヒサカキに比定されている（付編Ⅱ）。

出土遺物（Fig.20 Ph.35）　**22**は晩期粗製深鉢口縁片。黒褐色を呈し胎土に粗い石英粒と気泡を多量に含む黒川式期にみられるもので、内外に粗いヨコ条痕を施す。

Ph. 36　8区全景（西から）

SX33（Fig.21）　北部のF107グリッドに位置する2.0×1.4m深さ22cmを測る不整形の土壙。床上4～5cm程に1cm前後の炭粒を多量に含む灰褐色土が堆積し、焼畑による堆積土の流入を示唆する。

SX34（Fig.21 Ph.32）　SX33の北側に位置する。2.35×2.25m深さ65cmを測る不整円形の倒木痕。南から床上に、1cm前後の炭粒を1/4程含む暗褐色土が厚さ20cm程流入し、北に倒置したことを示す。焼畑による堆積土の流入を示唆しており、晩期粗

製・精製土器片を検出。炭粒をAMS測定した結果BC1220～1050の年代値が得られ（付編Ⅰ）、樹種はアカガシ亜属に比定されている（付編Ⅱ）。

7．８区の調査（Fig.22 Ph.36）

主丘陵の東側縦方向に並ぶ棚田列上位にあり、第１次調査９～３区・２次調査10～12区と並列して位置する調査区である。田面２面の、南平坦面と縄文・中世包含層が堆積し北東に下がる緩斜面からなる。検出面は赤褐～黄褐色混礫粘質土上面で、調査面積は807㎡を測る。標高は146ｍ。検出は縄文時代暗褐色土～暗黄灰色シルトを覆土とする倒木痕等の自然壙25基以上・落穴１基、古代～中世の焼土壙4基・近世廃石土壙１基・暗渠１条・柱穴多数を検出した。

(1)　旧石器・縄文時代の調査　　調査区全域に暗褐色土～暗黄灰色シルトを覆土とする倒木痕等の自然

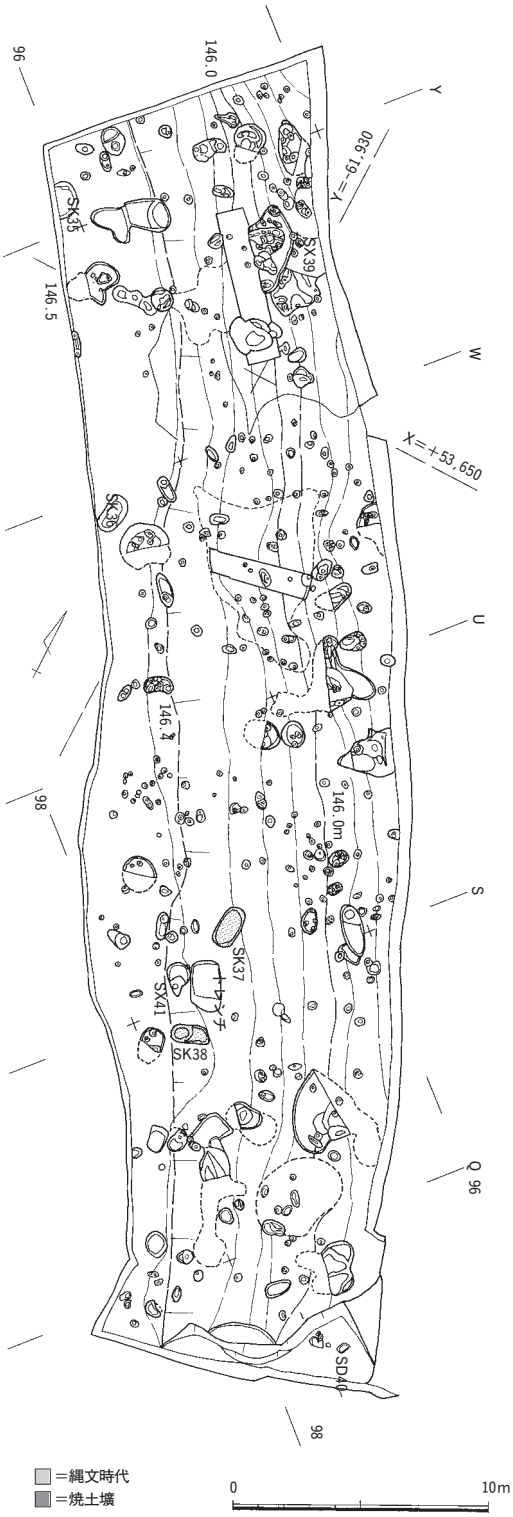
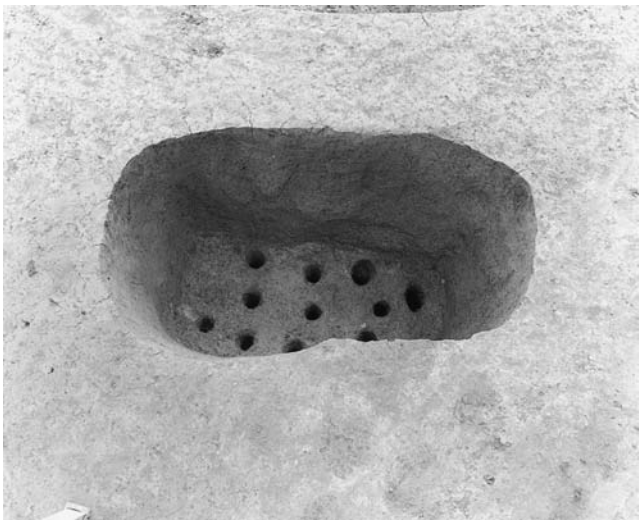
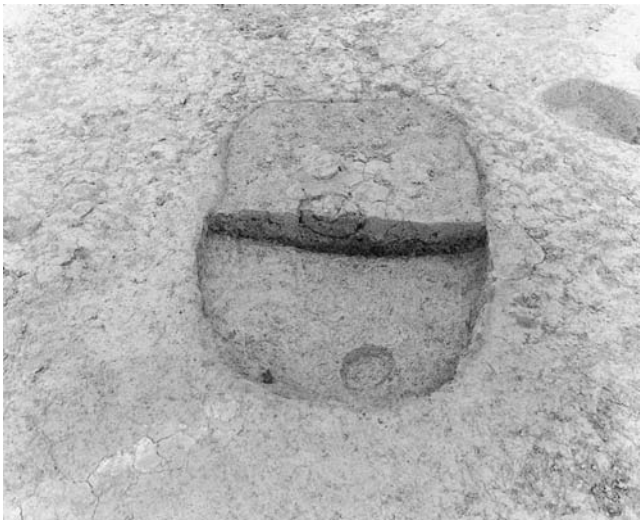


Fig. 22　８区遺構全体図(1/300)



Ph. 37　８区SK36（西から）



Ph. 38　８区SK37土層断面（西から）

壙25基以上・落穴1基を検出している。

①落穴**SK36**(Fig.23 Ph.37)　調査区中央寄りのW96グリッドに位置する。1.4×0.8m深さ92cmを測る隅丸方形断面矩形の土壙。床上に径7～10cm深さ13～23cm程の逆茂木痕が12本20～25cm間隔に配分される。覆土は暗黄灰色シルト。遺物の出土は無い。

Ph. 39　8区SK37（北から）

Ph. 40　8区SK35（北から）

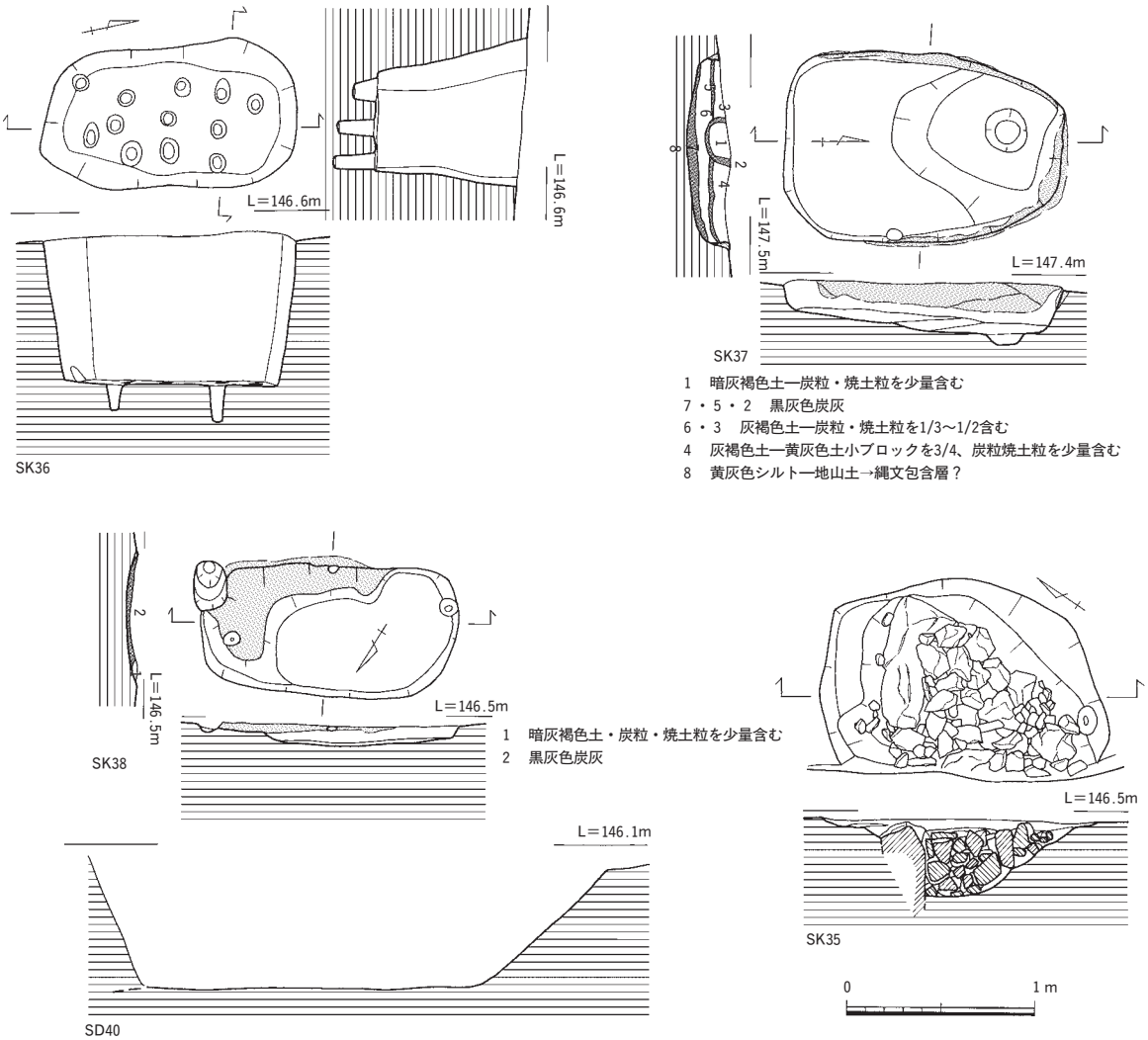
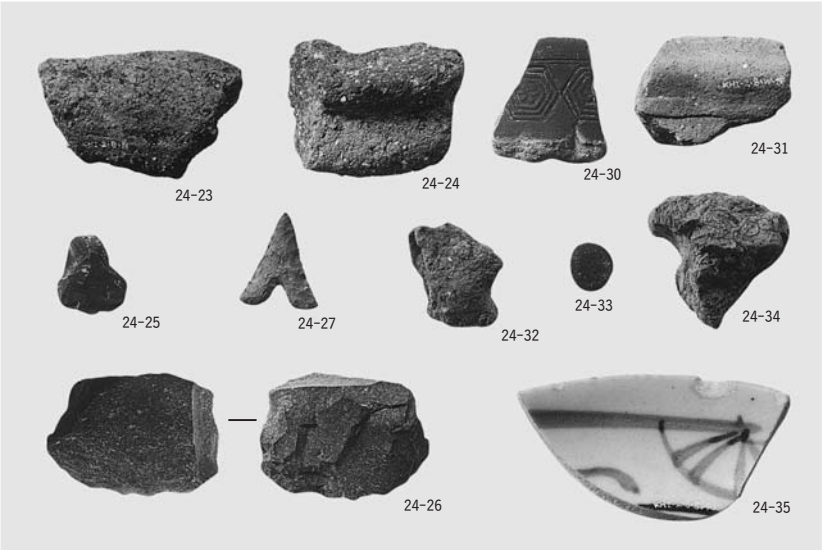


Fig. 23　8区SK35・36・37・38、SD40実測図(1/40)



Ph. 41　8区出土遺物

Ph. 42　8区SD40（北から）

②その他の遺物（Fig.24 Ph.41）

23は包含層出土の鐘崎～北久根式期の深鉢の山形口縁片で内面はヨコ貝殻条痕後ゆるいヨコナデ外面はヨコナデ。口唇項部に凹点を施す。胎土は石英粒とカクセン石を多く含む。**24**は検出面出土晩期深鉢円盤貼付底部。径8.6㎝。**25**は倒木痕SX39出土の黒耀石使用痕剥片。裏面は階段状剥離を主とする打面再生剥片で26×22×６㎜を測る。打面には擦痕がある。旧石器。**26**はサヌカイト製掻器。縦

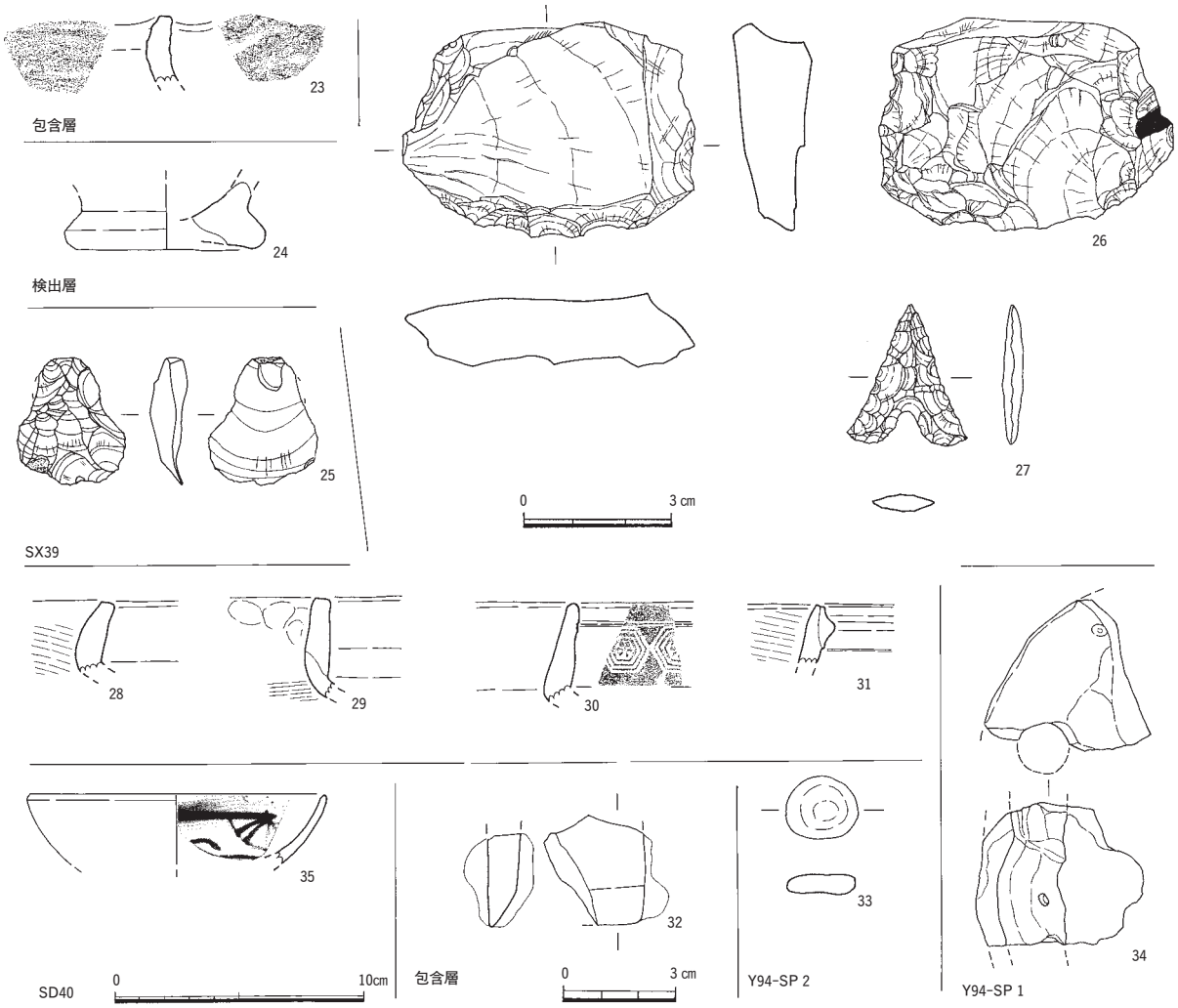


Fig. 24　8区出土遺物実測図(1/3・25～27・33-2/3・32・34-1/2)

長剝片の左側辺に階段状剝離の裏剝離面側からの２次調整で厚い刃部を造る。42×59×15㎜を測る。黒灰色で風化は浅く晩期と考えられる。**27**はサヌカイト製鍬形鏃で28×24×3.5㎜1.45gを測る。風化が進行し淡灰色を呈す。早期。

③上広瀬遺跡出土の尖頭器について（Fig.25 Ph.43）

本資料は福岡市早良区上広瀬遺跡８区西の検出面で単独出土した尖頭器である。

保存状態は良好であり、包蔵地からの遊離による二次的風化などは見られず、調査に伴う検出時のガジリが一部に見られるのみである。水田床土下の古扇状地上部の黄褐色シルト（ローム）質土上部に包含されていたと見られる。いわゆる「三稜尖頭器」であり、基部から約５㎝の位置で破断した基部破片である。現存長4.7㎝、最大幅3.6㎝、厚さ2.2㎝を測る。石材は良質の漆黒色黒曜石である。素材の主要剝離面は二次調整で失われている。基部には平坦な剝離面が残り、腹面側からの一枚の剝離面で構成されるが、素材打面かは不明である。二次調整は両側縁から腹・背両面に施されるが、稜上からの剝離調整はない。背面への二次調整傾斜角は右側縁が60°前後であるが、左側縁の調整は80°近くのやや鈍角となる。二次調整は大きな平坦剝離と側縁部付近の小剝離で構成されるが、後者は階段状剝離が多い。破断面は背面からの圧力による一面の剝離で形成されている。破断後の再生調整は認められない。本尖頭器は基部破片で本来の全体像を予測することは困難であるが、平面や側面形からみて、破断部分ですらなお中央部に達していないことは明らかである。したがって、欠損前の全長は10㎝を下回ることはなく、少なくとも15㎝前後に達する大型の尖頭器であったと考えられる。北部九州における後期旧石器時代の大型尖頭器は佐賀県多久地域の安山岩（サヌカイト）を素材とする例がほとんどであり、黒曜石製の例は少ない。特にこれほど大きい例は極めてまれといえよう。

なお、本石器の注目される点は、基部平坦面周辺に研磨と推定される磨りガラス状の摩滅痕が認められることである。摩滅痕は幅約２㎝、高さ約１㎝の平坦面全体と、二次調整後の背面の基部から約２㎝の範囲に、特に稜線に沿って分布する。また、背面には摩滅痕はなく、切り合いからみて研磨後、基部付近の剝離は再度行われたと考えられる。摩滅痕中に線条痕などは認められない。このように石器製作の工程として基部研磨が想定されるが、線条痕がなく、稜線を主としながらも緩やかな剝離面内まで摩滅が及んでいる点から見て、砥石など硬質の研磨対象を利用したのではなく、砂や土などの可変素材を研磨材としたものと予測される。

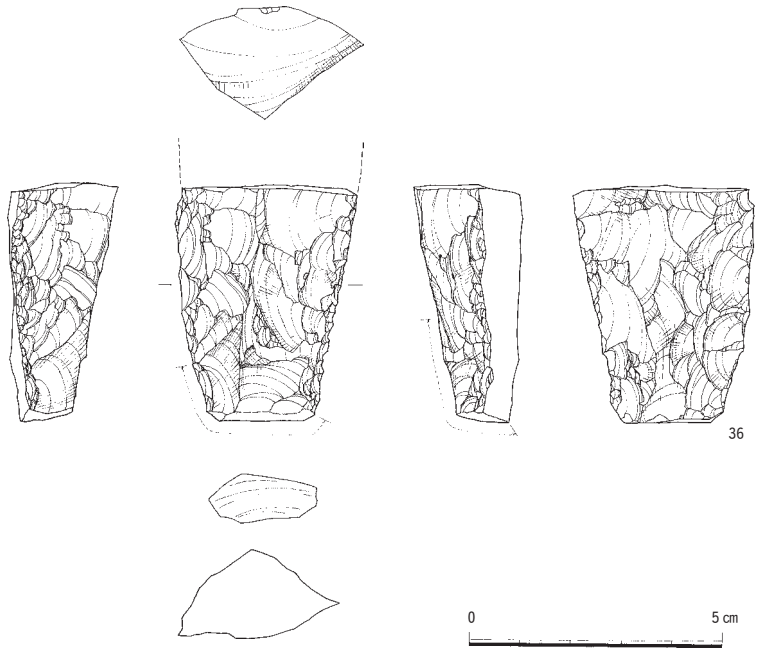


Fig. 25　三稜尖頭器実測図(2/3)

さて、このような尖頭器の基部に研磨を施す例は現時点で類例を確認する事ができない。ただし、三稜尖頭器の基部に平坦面を残す例は福岡市元岡桑原遺跡群３次調査、佐賀県、大分県百枝遺跡等がある。何れも著者

は三稜尖頭器のなかでは初期段階に位置づけている石器群に含まれている。また剝片尖頭器の古段階に相当するⅠ～Ⅱ期の基部平坦面は打面を未調整のまま残す特徴があり、著者はそれを槍先として「柄」に装着する際の段合わせの受け部となると想定した（吉留1998）。この平坦面の確保は手持ちの大型槍（突き槍）の使用時に、先頭部が離脱したり、基部が支えられず柄を破損することを避ける工夫のひとつであり、使用時により大きな衝撃や、致命傷を対象動物に与えるためにとられた形態でもある。今回の基部研磨例は、こうした剝片尖頭器や大型の三稜尖頭器にみられる基部平坦面の確保と同じ要因に背景を求めることができる。北部九州に出現した大型尖頭器の基部平坦面は剝離面や自然面で構成されている。サヌカイトの場合は槍柄に装着する際の接触面に一定の摩擦抵抗がある。これに対して西北九州産の良質な黒耀石の剝離面では平滑で摩擦抵抗が極めて少ないのである。これに対処するための工夫として剝離面への研磨が施されたと考えられる。研磨そのものの技術は当該期の骨角器などに想定されており（小野）、石器への応用もさほど特異なものといえるものではない。

⑵　古代～中世の調査

①焼土壙　SK37・38の２基が東部に分布する。

Ph. 43　三稜尖頭器

SK37（Fig.23 Ph.38･39）　中央東寄りT96グリッドに位置する。1.5×0.95ｍ深さ34㎝を測るA類土壙。軸は地形に斜行する。底面から間層を挟んで２層の炭灰層があり、期間を空けて２度操業される。焼土壁は床上５㎝程に残る。床面も薄く焼ける。自然埋没後、薄い炭灰層をめぐらす柱穴が掘削される。

SK38（Fig.23）　SK37の東５ｍに位置する。1.45×0.72ｍ深さ12㎝を測るB類土壙。軸は地形に直交する。遺存状態は悪く、東部は撹乱される。焼土は床面から薄く広がる。

②その他の遺物（Fig.23 Ph.41）　**28～31**は検出面出土。**28～30**は瓦質湯釜の口縁片。**28・29**内面にはヨコハケが残る。**30**は外面に２条の沈線下に複線亀甲文をスタンプする。**31**は肥前系の玉縁口縁土師質鍋。**32**は包含層出土片刃板状鉄斧片。刃厚８㎜。**33**はY94SP2出土黒色泥岩の15×13×４㎜を測る円礫で碁石。**34**はY94SP1出土の炉壁で径19㎜の木骨痕がある。

Ph. 44　９区全景（東から）

⑶　近世の調査　調査区東西両端に廃石土壙SK35・暗渠SD40が分布する。

①廃石土壙**SK35**（Fig.23 Ph.41）　調査区平坦部西端に位置するB類土壙。75×30㎝の露頭周りに1.6×1.2ｍ深さ40㎝の土壙を掘り、露頭を砕いた砕石を東側に埋め込む。

②暗渠**SD40**（Fig.23 Ph.42）　調査区東端に位置し、谷筋に沿って北東に流れる。幅2.7ｍ以上で断面逆台形の底面に50㎝以下の礫を集め、間に粘質・砂質土がたまり、上部を地山土で客

土する。

出土遺物(Fig.24 Ph.41)　**35**は肥前系染付の皿で、口径12.0㎝。内面に呉須で圏線を描き上下に車輪文を描く。他に瓦質の湯釜片が出土する。18世紀後半。

8．9区の調査（Fig.26 Ph.44）

主丘陵の西側縦方向に並ぶ棚田列下位にあり、3～12区と並列して位置する調査区である。田面1面の、西平坦面と北東に下がる緩斜面・縄文・中世包含層が堆積する東の北東に下がる小谷部からなる。検出面は表土・昭和38年土石流・灰褐色土下の赤褐～黄褐色混礫粘質土と平坦面の中位段丘礫層上面で、調査面積は1,024㎡を測る。標高は130m。検出は縄文時代暗褐色土～暗黄灰色シルトを覆土とする倒木痕等の自然壙25基以上・落穴2基、古代～中世の焼土壙5基・土石流1条・柱穴多数を検出した。

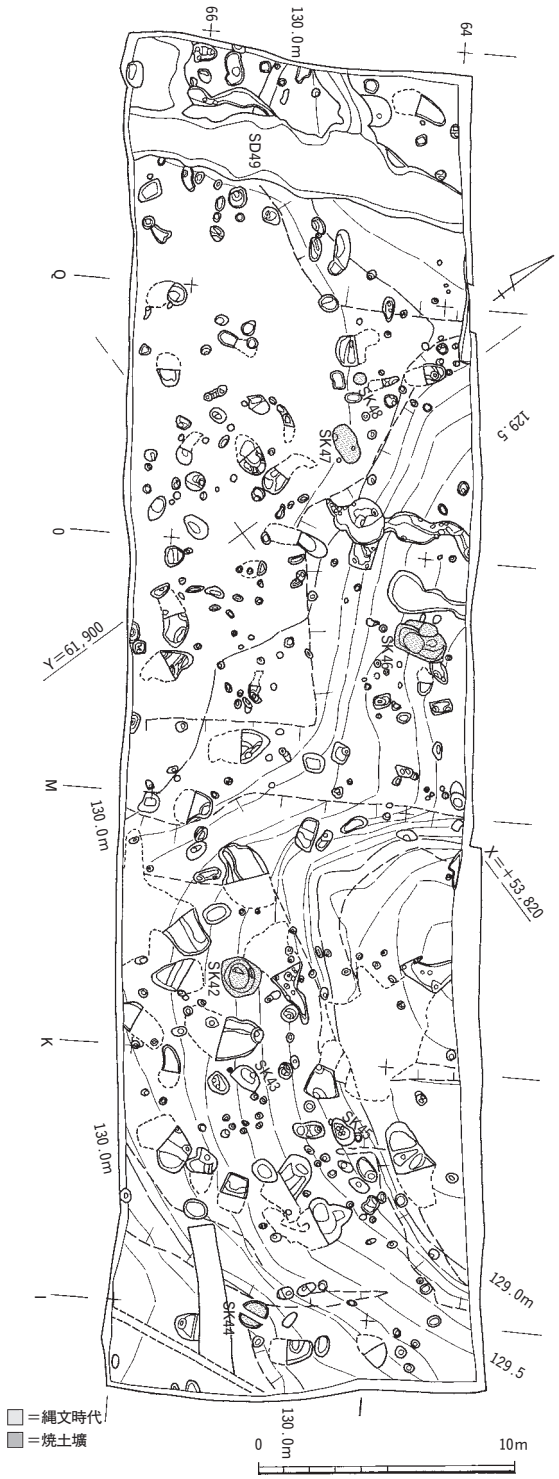
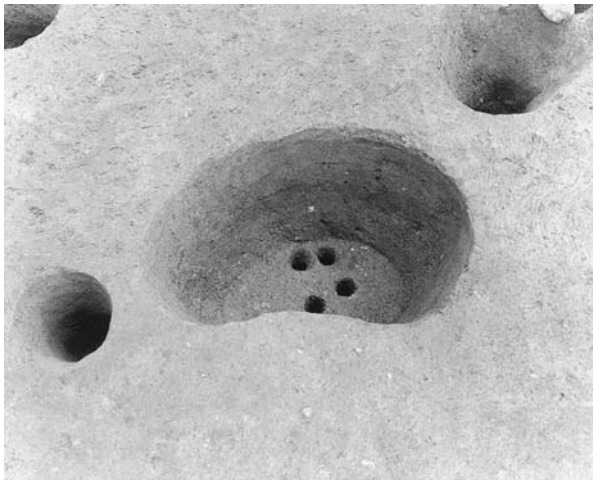


Fig. 26　9区遺構全体図(1/300)



Ph. 45　9区SK45（西から）

Ph. 46　9区SK46土層断面図（北から）

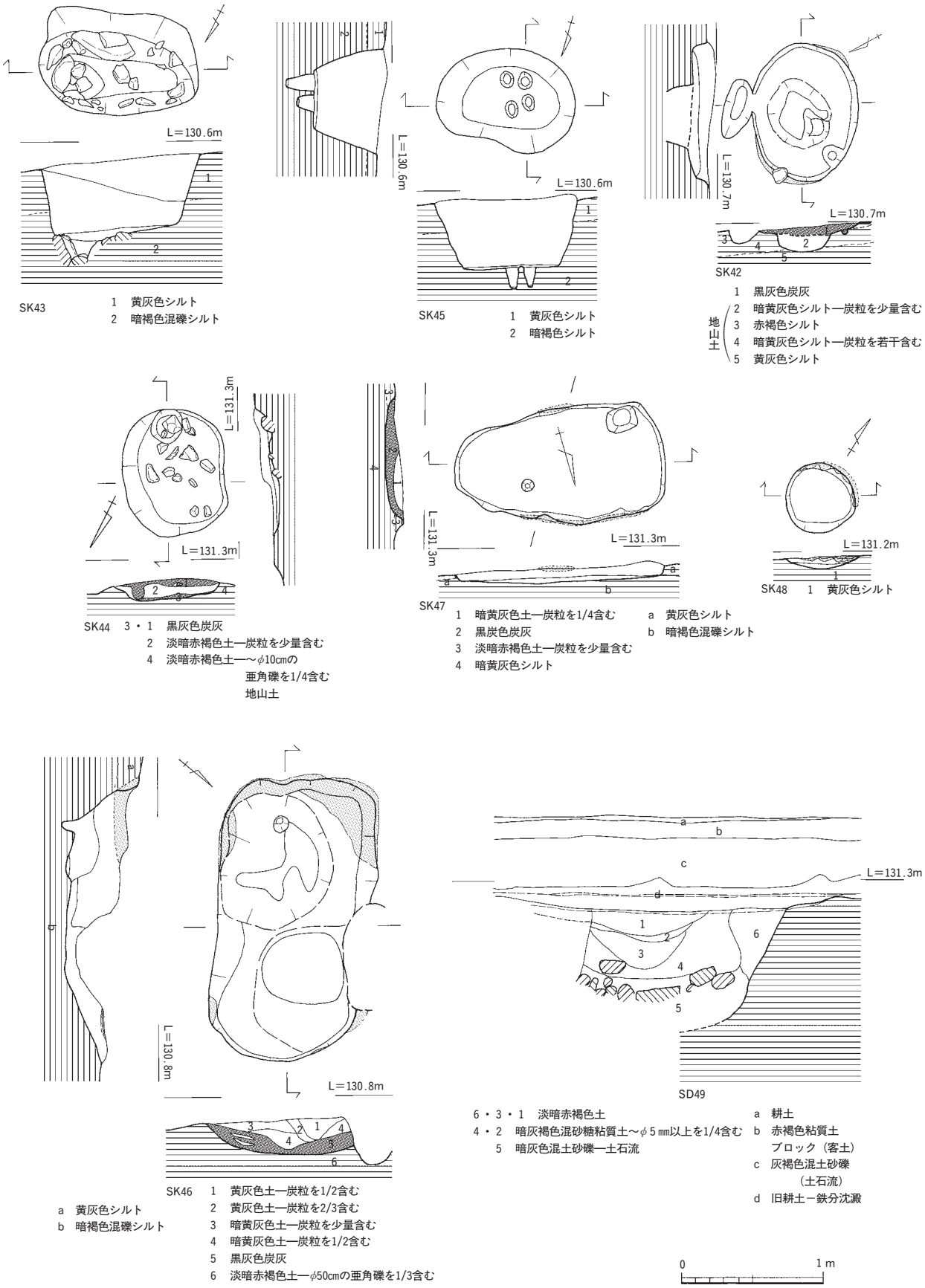


Fig. 27 9区SK42・43・44・45・46・47・48、SD49実測図(1/40)

⑴　縄文時代の調査　調査区全域に暗褐色土～暗黄灰色シルトを覆土とする倒木痕等の自然壙25基以上・落穴２基、東谷部に一部暗褐色包含層を検出している。

①落穴　調査区東谷部で小型のSK43・45の２基を検出した。

SK43(Fig.27)　調査区東谷の底近くK65グリッドに位置する。1.2×0.8ｍ深さ65㎝を測る隅丸方形断面矩形の土壙。東隅に近い床上に径20㎝深さ15㎝程の小穴を1本設ける。覆土は暗褐色土。

出土遺物（Fig.28）　**26**は晩期黒川式期の精製小型浅鉢口縁片で口縁が短く「く」字に屈曲する。

SK45(Fig.27 Ph.45)　SK43の東５ｍの谷底近くに位置する。1.0×0.73深さ71㎝を測る楕円形断面矩形の土壙。床面中央に径10㎝弱深さ13～20㎝程の逆茂木を４本13～20㎝間隔で矩形に設ける。覆土は暗褐色土。遺物の出土は無い。

②その他の遺物(Fig.27 Ph.49)　**37**は谷部包含層出土の、肩部が屈曲する晩期前半粗製深鉢の小片。内外面にヨコ条痕調整後ゆるいヨコナデを施す。胎土は粗い石英粒を多量に含む。**38**はSK47に混入した土器片円盤。外面貝殻条痕・内面にヨコナデを施す粗製深鉢片を、外面より打ち欠き円形に整形する。34.6×30.3×9.2㎜12gを測る。

⑵　古代～中世の調査　地形に沿った幅10ｍ程の帯状の範囲に焼土壙42・44・46・47・48の５基が分布し、西端は１・３区から連なる土石流が北東に流れる。

①焼土壙　**SK42**（Fig.27）　谷部の暗黄灰シルト上、L65グリッドに位置する。1.0×0.95ｍ深さ37㎝

Ph. 47　９区SD49（南から）

Ph. 48　９区SK47土層断面（西から）

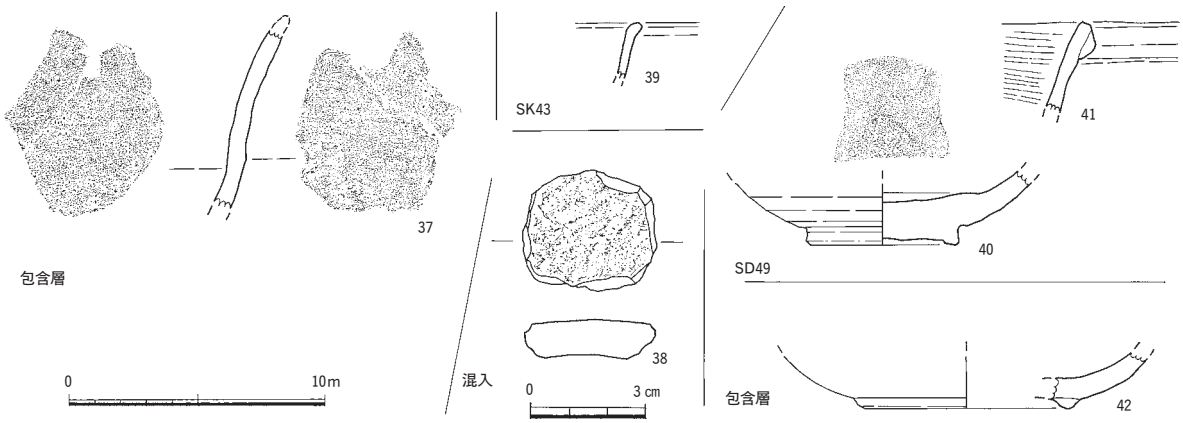
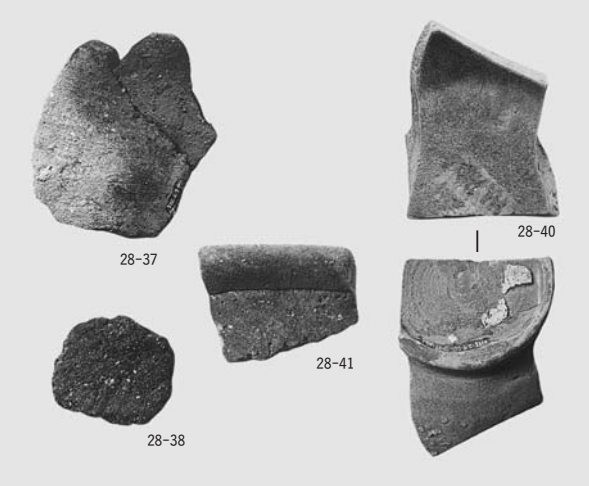


Fig. 28　９区出土遺物実測図(1/3・38-1/2)

を測る円形C類土壙。底面中央の小穴は下面の別遺構である。削平が著しく床上５㎝程に炭灰層が残るのみで、焼土壁は一部に高さ数㎝が遺存する。

SK44（Fig.27）　調査区東端の谷落ち際に位置する。0.9×0.73ｍ深さ18㎝を測る小型のB類土壙。軸は地形に直交する。底面から間層を挟んで２層の炭灰層があり、期間を空けて２度操業される。遺存状態は悪く、焼土壁は床上10㎝程に若干残る。



Ph. 49　９区出土遺物

SK46（Fig.27 Ph.46）　調査区中央西寄りの北東緩斜面に位置する。2.0×1.5ｍ深さ42㎝を測るA類土壙。軸は地形に並行する。底面から10㎝程厚く炭灰層が堆積する。焼土壁は床上30㎝程に厚さ５㎝程分厚く焼ける。

SK47（Fig.27 Ph.48）　調査区西部平坦面斜面落ち際の黄灰色シルト上に位置する。1.5×0.85ｍ深さ21㎝を測る隅丸のA類土壙。軸は地形に直交する。底面から10㎝程厚く炭灰層が堆積する。遺存状態は悪く、焼土壁は床上５㎝程に厚さ３㎝程に焼けて残る。

SK48（Fig.27）　SK47の北２ｍ、斜面落ち際の黄灰色シルト上に位置する。0.5×0.5ｍ深さ11㎝を測る円形のC類土壙。底面から５㎝程炭灰層が堆積する。遺存状態は悪く、焼土壁は床上５㎝程に厚さ３㎝程に焼けて残る。

②土石流**SD49**（Fig.27 Ph.47）　西端に位置し、地山を深さ１ｍ近く削り、底から40㎝まで砂礫層が堆積し以上は混砂粘質土・淡暗赤褐色土が覆う。以西の淡暗赤褐色土上には柱穴等が掘削される。

出土遺物（Fig.28 Ph.49）　40は底径6.0㎝の龍泉窯系青磁Ⅱ類碗。見込みに印刻・外底は露胎で胎土目がのこる。41は肥前系鍔口縁の土師質鍋。他に土師器坏・皿片が出土。13世紀初～前半。

③その他の遺物（Fig.28 Ph.49）　42は東谷部包含層出土瓦器埦底部片で、径8.5㎝。淡灰褐色で調整は不明。

Ph. 50　10区全景（北西から）

９．10区の調査（Fig.29 Ph.50）

主丘陵の東側縦方向に並ぶ棚田列にあり、８～12区と並列して中位に位置する調査区である。現田面２面・旧田面16面の、平坦面と北東に下がる緩斜面からなる。検出面は赤褐～黄褐色混礫粘質土

Fig. 29　10区遺構全体図(1/400)

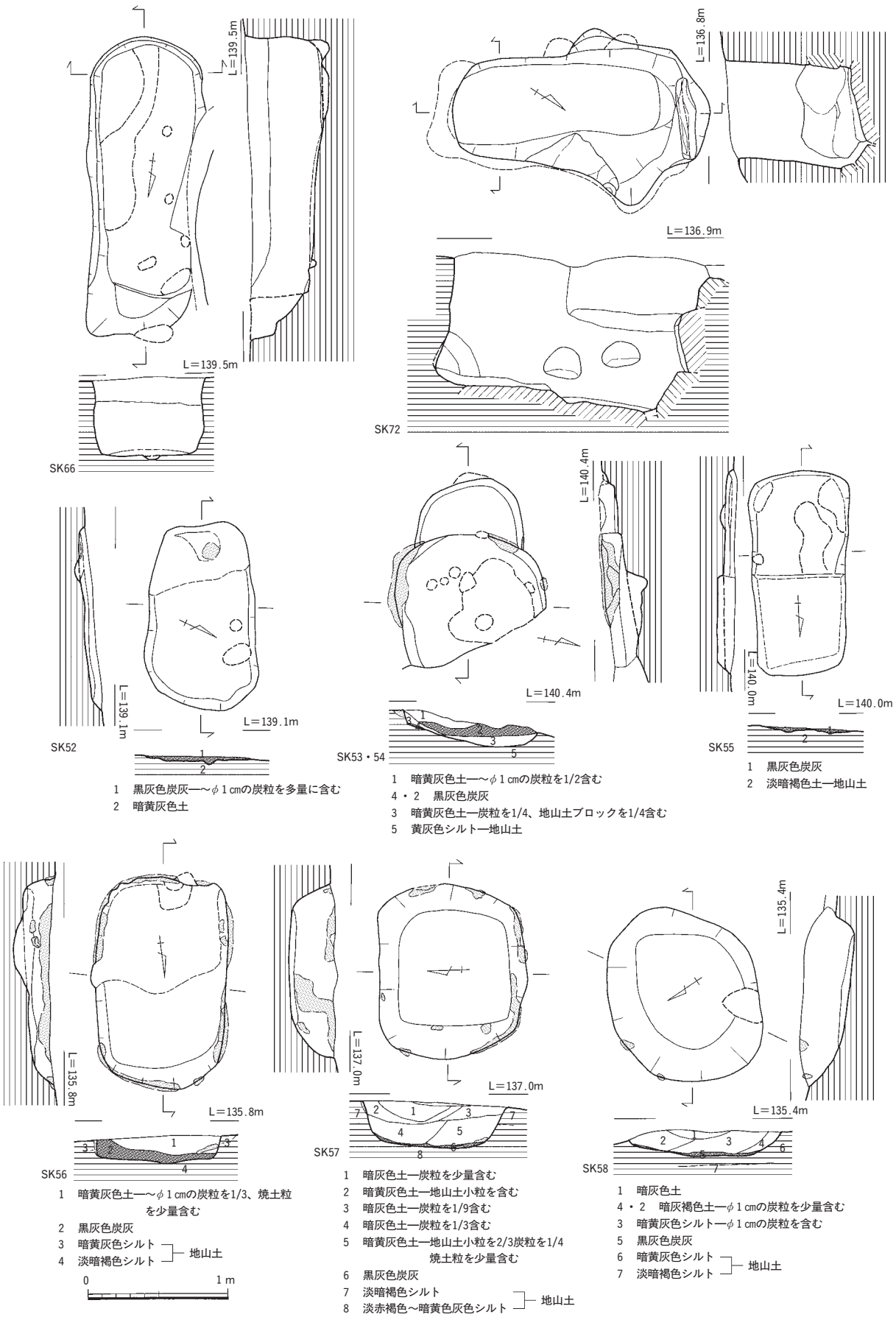


Fig. 30　10区SK66・72・52・53・55・56・57・58実測図(1/40)

上面で、調査面積は3,473㎡を測る。標高は135～139m。検出は縄文時代暗褐色土～暗黄灰色シルトを覆土とする倒木痕等の自然壙50基以上・落穴２基、古代～中世の焼土壙18基・近世廃石土壙１基・柱穴多数を検出した。

⑴　縄文時代の調査　調査区全域で暗褐色土～暗黄灰色シルトを覆土とする倒木痕等の自然壙50基以上・落穴２基を検出している。

①落穴**SK66**(Fig.30 Ph.51)　調査区北西端のF080グリッドに位置する。2.14×0.84ｍ深さ55㎝を測る長方形断面矩形の土壙。床上は平坦で逆茂木痕は検出されない。遺物の出土は無い。

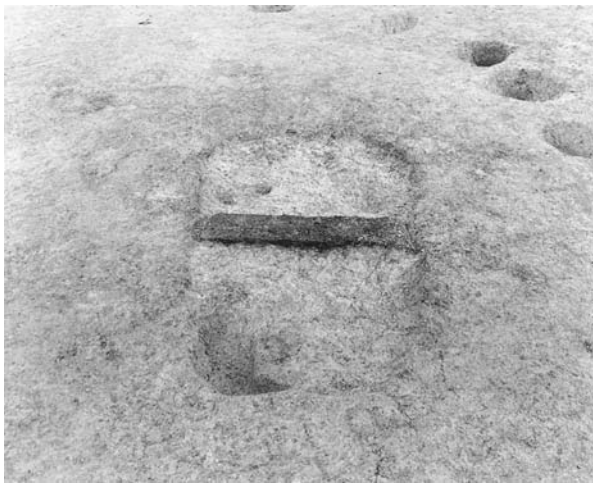
SK72 (Fig.30 Ph.52)　SK66の北東30ｍ、調査区北西端のG76グリッドに位置する。2.05×0.68ｍ深さ1.03㎝を測る長方形断面矩形の土壙で北側の上端が大きく崩落する。床上は平坦で逆茂木痕は検出されない。西側壁に足掛かり状の掘り込みが２カ所あり、貯蔵穴の可能性もある。

②その他の遺物 (Fig.33 Ph.69)　**43**・**44**はSK61混入の晩期土器。**43**は半精製深鉢口縁。内面はヨコ貝殻条痕後ヨコナデ。胎土に石英・カクセン石をやや多く含む。**44**は精製浅鉢口縁片。**45**は検出面出土黒曜石製石鏃。尖端を欠き20.1×25.8×3.5㎜・1.01gを測る。

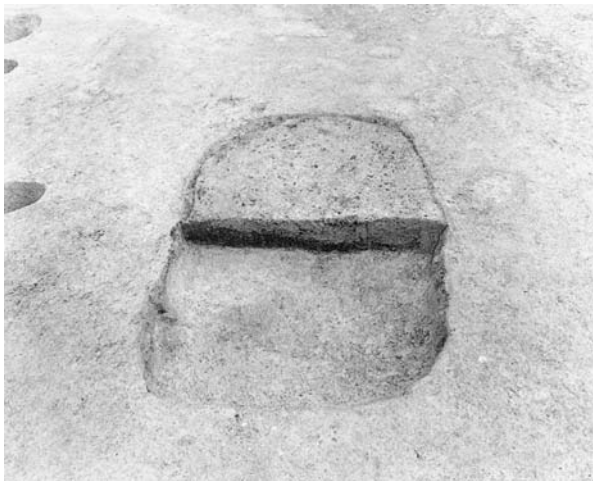
⑵　古墳時代の遺物 (Fig.33 Ph.69)　**46**は本遺跡で数少ない古墳時代資料で、外面に擬格子叩・内面に平行弧の当具痕を残す須恵器甕胴部小片である。断面が淡紫灰色を呈し陶質土器の可能性もある。

Ph. 51　10区SK66（西から）

Ph. 52　10区SK72（西から）



Ph. 53　10区SK52土層断面（北から）



Ph. 54　10区SK56土層断面（西から）

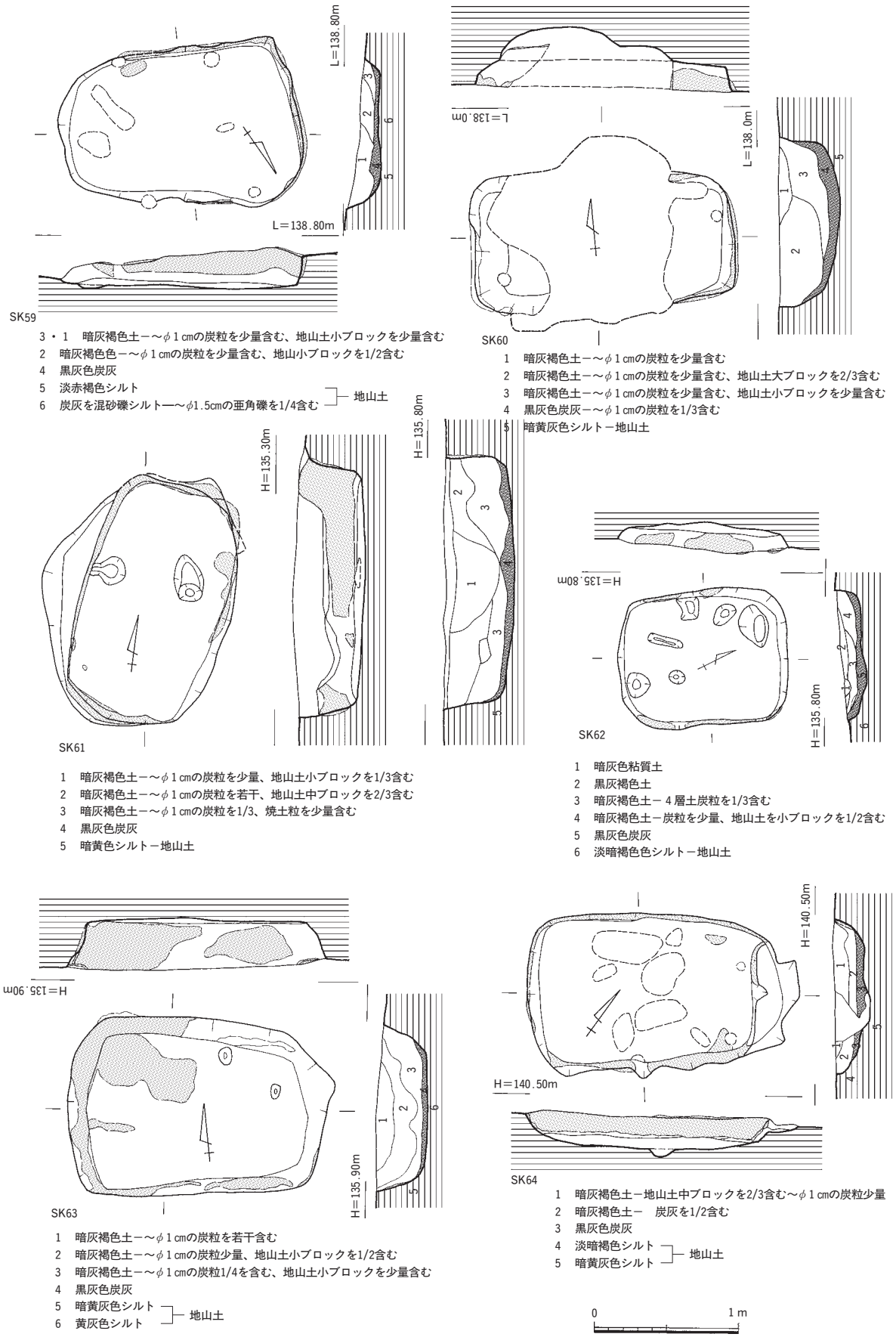


Fig. 31　10区SK59・60・61・62・63・64実測図(1/40)

⑶　古代～中世の調査　　古代～中世の焼土壙18基を北西部に3基・南東部で15基検出した。数基単位で７～10ｍ間隔を空け並行に並ぶ傾向にある。

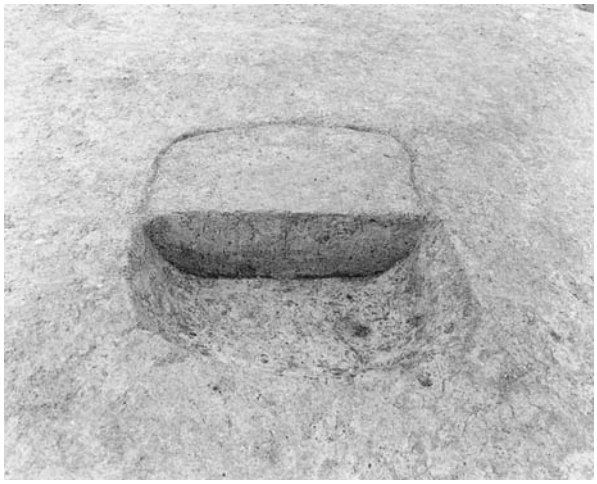
①焼土壙　**SK52**(Fig.30 Ph.53)　調査区北西部D81グリッドに位置する。1.3×0.8ｍ深さ19㎝を測るB類土壙。削平が著しく床上５㎝程に炭灰層が残るのみで、焼土壁は床面に落ち込んだ一部が検出されるのみである。軸は地形に直交する。

SK53・54（Fig.30）　調査区東端近くのX82グリッドに位置する。２基の切り合いでSK53が54を切る。東部を削平され、それぞれ幅1.15･0.75ｍ深さ17㎝を測る小型のB類土壙。軸は地形に直交する。SK53は底面から間層を挟んで２層の炭灰層があり、期間を空けて２度操業される。焼土壁は床上５㎝程から残り、上端で幅６㎝と厚く焼ける。

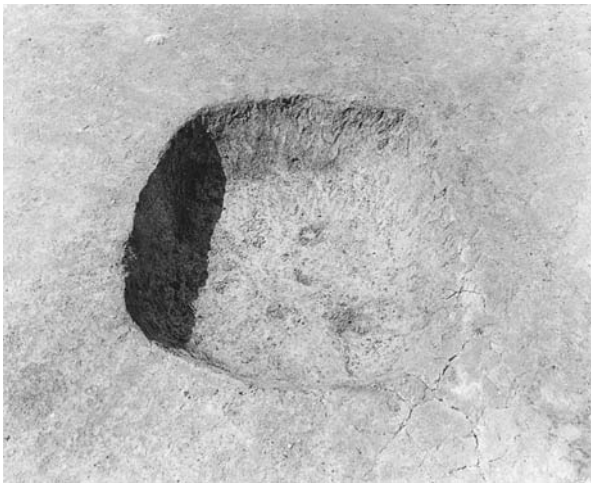
SK55（Fig.30）　SK53･54の東2.5ｍに位置する。1.46×0.72ｍ深さ７㎝を測るB類土壙。削平が著しく床上数㎝程に炭灰層が残るのみである。北半の一段低い部分は掘削時に掘り過ぎたものである。軸は地形に平行する。

SK56(Fig.30 Ph.54)　調査区中央南寄りのU81グリッドに位置する。1.52×0.98ｍ深さ26㎝を測るB類土壙。軸は地形に斜行する。床上に10㎝程厚く炭灰層が堆積し、以上は自然に埋没し、焼土壁が一部落ち込む。壁は床上５㎝程から焼けるが薄い。

SK57（Fig.30 Ph.55･56）　調査区南端R82グリッドに位置する。1.26×1.05ｍ深さ35㎝を測る正

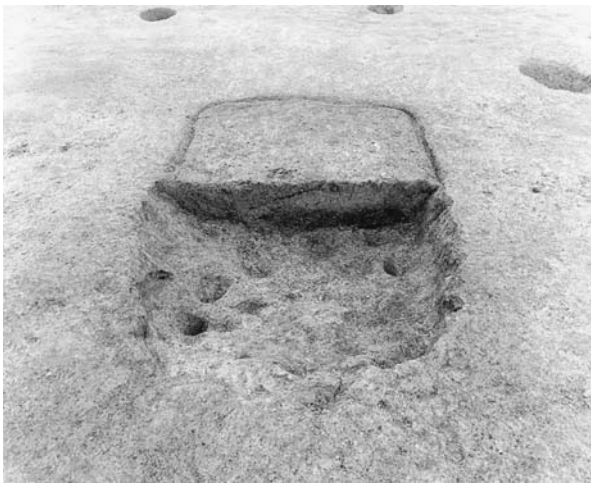


Ph. 55　10区SK57土層断面（東から）



Ph. 56　10区SK57（北から）

Ph. 57　10区SK58土層断面（北から）



Ph. 58　10区SK64土層断面（北から）

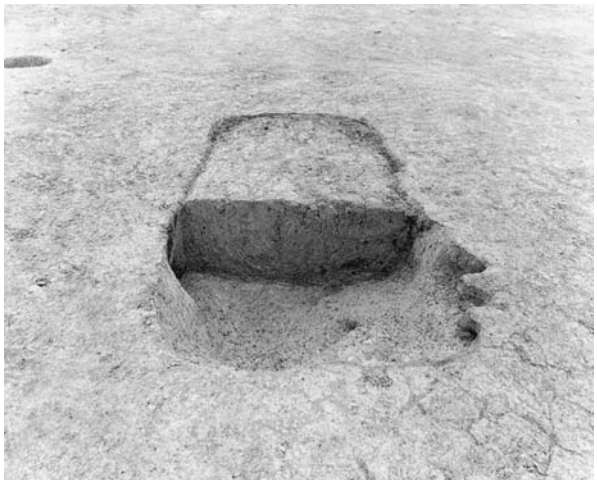
方形に近いB類。軸は地形に斜行する。床上に数cmと薄い炭灰層が堆積し、以上は流土で自然に埋没するが、埋没後２度壙内を浚えており（４・３層下面)、その都度焼土壁は剝落した模様で、遺存状態は悪い。しかし、焼土壁はブロックの状態で内部から出土することは無い。

SK58 (Fig.30 Ph.57)　SK56の東４ｍに位置する。1.32×1.1ｍ深さ38cmを測るC類土壙。床上に数cm薄く炭灰層が堆積し、以上は自然に流土で埋没する。焼土壁は上端に若干ある。

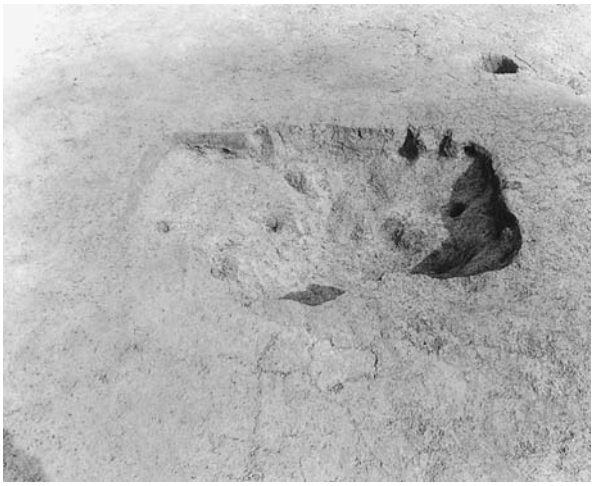
SK59 (Fig.31)　調査区のほぼ中央X78グリッドに位置する。1.70×1.18ｍ深さ25cmを測るA類土壙。軸は地形に斜行する。床上に５cm程炭灰層が堆積し、以上は流土で自然に埋没する。壁は床上５cm程から上端で厚さ3cm程焼ける。

SK60 (Fig.31 Ph.59･60)　SK59の南5mに位置する。1.87×1.3ｍ深さ44cmを測るB類土壙。中央を樹根に大きく撹乱される。軸は地形に直交する。床上に５cm程炭灰層が堆積し、以上は流土で自然に埋没する。後、南半を浚えるが使用しないまま地山土混じりの客土で埋め戻す(２層)。壁は床上５cm程から上端で厚さ３cm程焼ける。

SK61 (Fig.31 Ph.61･62)　調査区南東端U75グリッドに位置する。1.9×1.35深さ68cmを測るB類土壙。軸は地形に並行する。床上に５cm程炭灰層が堆積し、以上、半分程流土で自然に埋没後（３層)、西半部を30cm程拡張し新たな土壙とするが、使用することなく地山土混じりの客土で埋め戻す（１・２層)。壁は床上５cm程から上端で厚さ３cm程焼け、西半部は拡張時に焼土壁の上半分を削平



Ph. 59　10区SK60土層断面（東から）



Ph. 60　10区SK60（北から）

Ph. 61　10区SK61土層断面（北から）

Ph. 62　10区SK61（西から）

する。晩期土器片が混入する。

SK62(Fig.31)　SK60の東10mのU77グリッドに位置する。1.02×0.95m深さ30cmを測る小型のB類土壙。軸は地形に斜行する。床上に5cm程炭灰層が堆積し、一部上面に焼土壁が落ち込む。以上は流土で自然に埋没する。壁は床上5cm程から残るが剝落が目立つ。

SK63(Fig.31 Ph.63・64)　SK62の南西1.5mに位置する。1.19×1.3m深さ43cmを測るB類土壙。軸は地形に斜行する。西部の床の一部が薄く焼け、床上に数cm炭灰層が堆積する。以上は流土で自然に埋没する。壁は床上5cm程から薄く焼けるが、東部の焼土の多くが剝落する。剝落した焼土壁は内部に堆積しない。

SK64(Fig.31 Ph.58)　調査区中央北寄りのA78グリッドに位置する。1.88×1.15m深さ37cmを測

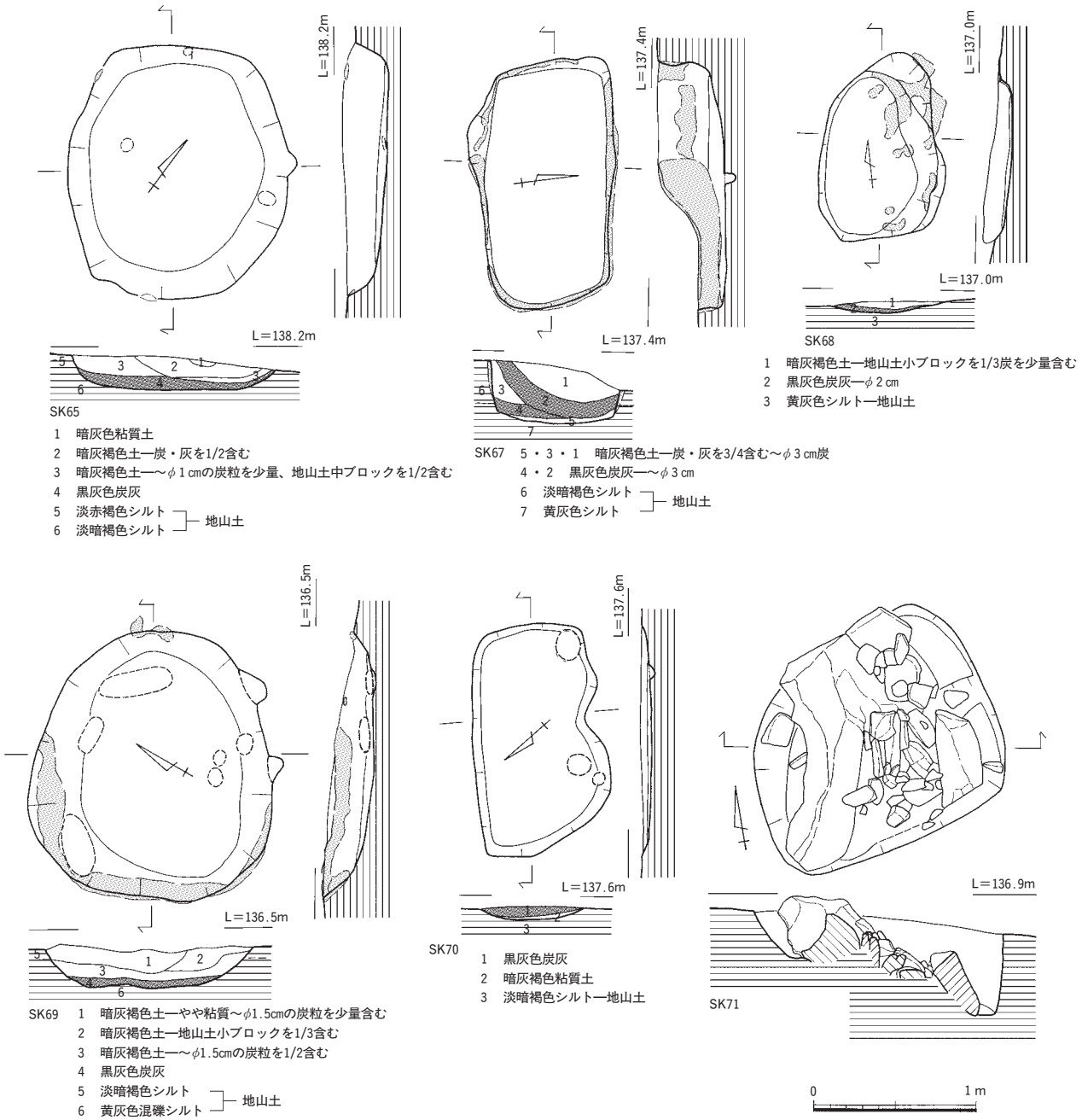
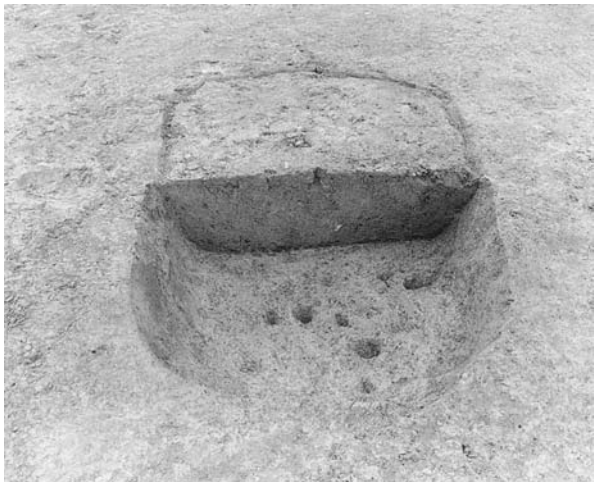


Fig. 32　10区SK65・67・68・69・70・71実測図(1/40)

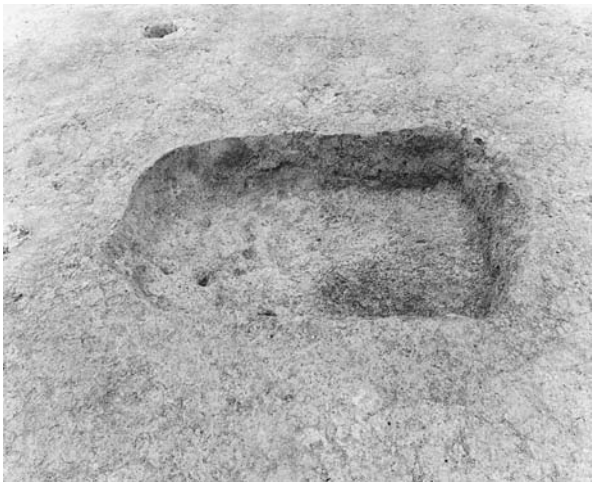
るB類土壙。軸は地形に直交する。中央部を樹根に撹乱される。床上に５㎝程炭灰層が堆積する。以上は流土で自然に埋没する。壁は床上５㎝程から薄く焼け良好な状態で残存するが、床上には剝落した焼土壁の一部が落ち込む。

SK65(Fig.32 Ph.65)　調査区西端のG97グリッドに位置する。1.57×1.42ｍ深さ40㎝を測る円形のC類土壙。床上に10㎝程厚く炭灰層が堆積する。以上は流土で自然に埋没し、壁は上端で一部に焼土が残る。

SK67（Fig.32 Ph.66）　調査区中央SK59の東４ｍのX77グリッドに位置する。1.65×0.95ｍ深さ50㎝を測る小型のB類土壙。軸は地形に斜行する。床面から間層を挟んで２層の炭灰層があり、期間を空けて２度操業される。下の炭灰層（４層）下に薄い流土層があり、掘削後一定期間置かれる。壁は床上５㎝から薄く焼け、上端で２㎝程の厚さとなる。



Ph. 63　10区SK63土層断面（東から）



Ph. 64　10区SK63（北から）

Ph. 65　10区SK65土層断面（東から）

Ph. 66　10区SK67土層断面（東から）

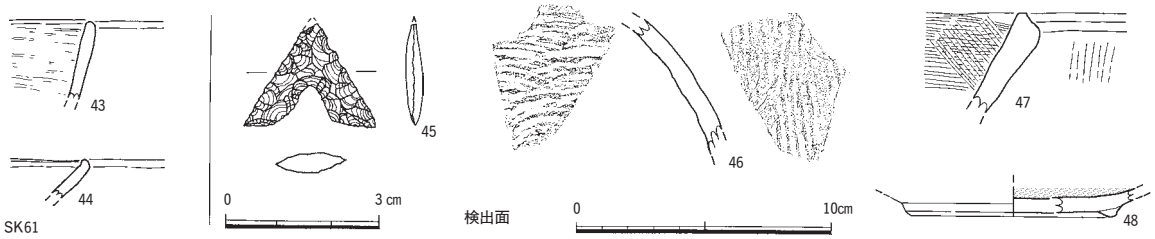


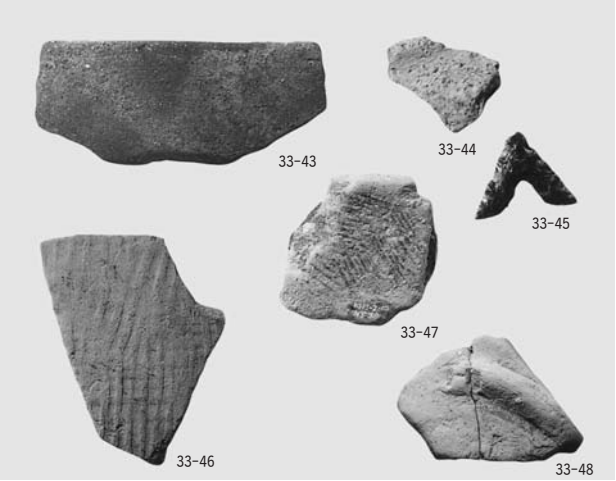
Fig. 33　10区出土遺物実測図(1/3・45-2/3)

Ph. 67　10区SK69土層断面（北から）

SK68（Fig.32）　SK67の北2.5ｍに位置する。1.22×0.8ｍ深さ16㎝を測る小型のB類土壙。軸は地形に並行する。棚田の切り下げ地業面に位置し削平が著しく遺存状態は悪い。床上に数㎝の薄い炭灰層があり、上面に焼土壁のブロックが落ち込んで検出される。

SK69（Fig.32 Ph.67）　調査区南東端部近くSK61の北10ｍに位置する。1.65×1.52ｍ深さ42㎝を測る隅丸のA類土壙。軸は地形に直交する。床上に５㎝程炭灰層が堆積し、以上は自然に流土で埋没する。壁は開き、床から10㎝程から上が焼け、東半部は殆ど剝離する。土師器甕小片等が出土。

Ph. 68　10区SK71（東から）



Ph. 69　10区出土遺物

SK70（Fig.32）　調査区中央東寄りのY77グリッドに位置する。1.5×0.9ｍ深さ12㎝を測る小型のB類土壙。軸は地形に斜行する。削平が著しく遺存状態は悪い。７㎝程の炭灰層下に薄い流土層があり、掘削後一定期間置かれる。

②その他の遺物（Fig.33 Ph.69）　検出面出土の資料で、**47**は瓦質擂鉢口縁片。外面は粗いタテハケ後ヨコナデ・内面は細かなヨコ・ナナメハケを施す15・16世紀。**48**は低小な高台の瓦器椀底部で径8.0㎝。11世紀末～12世紀初め。他に龍泉窯系青磁Ⅱ類碗小片が出土している。

⑷　近世の調査　中位段丘礫層は他の地点の耕作面より大分深い様で、調査区東端に廃石土壙SK71が分布するのみである。

①廃石土壙**SK71**（Fig.33 Ph.68）　調査区東端中央付近に位置するB類土壙。1.5×1.2ｍの露頭周りに1.95×1.23ｍ深さ50㎝の土壙を掘り、露頭を砕いた砕石を東側に埋め込む。

10．11区の調査（Fig.34 Ph.70）

主丘陵の東側縦方向に並ぶ棚田列にあり、８～12区と並列して10区の下方30ｍ程に位置する調査区である。現田面２面・旧田面12面の、平坦面と北東に下がる緩斜面からなる。検出面は赤褐～黄褐色混礫粘質土上面で、調査面積は2,470㎡を測る。標高は129～133ｍ。検出は縄文時代の暗褐色土～暗黄灰色シルトを覆土とする倒木痕等の自然壙20基以上、古代～中世の焼土壙16基・溝２条・柱

Fig. 34　11区遺構全体図(1/350)

穴多数を検出した。

⑴　縄文時代の調査　調査区全域で暗褐色土～暗黄灰色シルトを覆土とする倒木痕・自然流路等の自然壙20基以上を調査区全域で検出している。

①自然流路**SD89**(Fig.36 Ph.83)　調査区北部、C62グリッド当たりに位置し北に流れる長さ8.8ｍ幅0.5～1.0m深さ10～50㎝前後の流路で幅・底面の凹凸が著しい。覆土は暗褐色土である。

出土遺物（Fig.37 Ph.84）**49**は晩期粗製深鉢胴部小片で外面はヨコ条痕後ヨコナデ・内面はヨコ貝殻条痕を施す。胎土に石英粒・カクセン石他を多く含む。色調は暗黄褐～黒褐色を呈する。

②その他の遺物(Fig.37 Ph.84)　**50**はE63グリッドSP1出土の腰岳産黒曜石の使用痕剝片で、縦剝ぎ剝片の、主剝面側からバルブを除去した打面以外の両側辺を使用し、殊に左辺は激しく使用し、重なる刃こぼれで角度が鈍くなる。先端部も折損する。黒灰色を呈し透明。晩期と思われる。

⑵　古代～中世の調査　調査区のほぼ全域で焼土壙16基・溝２条・柱穴多数を検出した。

①焼土壙　調査区全域に分布し、南北２カ所にまとまりがある。軸は地形に直交するものが多い。

Ph. 70　11区全景（北東から）

SK73（Fig.35）　調査区中央西寄りのC68グリッドに位置し1.24×0.87ｍ深さ18㎝を測るA類土壙。軸は地形に並行する。５㎝程の土混じりの炭灰層下に薄い流土層があり、掘削後一定期間置かれる。削平が深く、焼土壁は床面上10㎝程から数㎝が一部に残のみである。

SK74（Fig.35）　調査区西端中央のA69グリッドに位置する。大半が調査区外にあり、現況で0.55＋α×0.85ｍ深さ22㎝を測

Ph. 71　11区SK74（北から）

Ph. 72　11区SK79（西から）

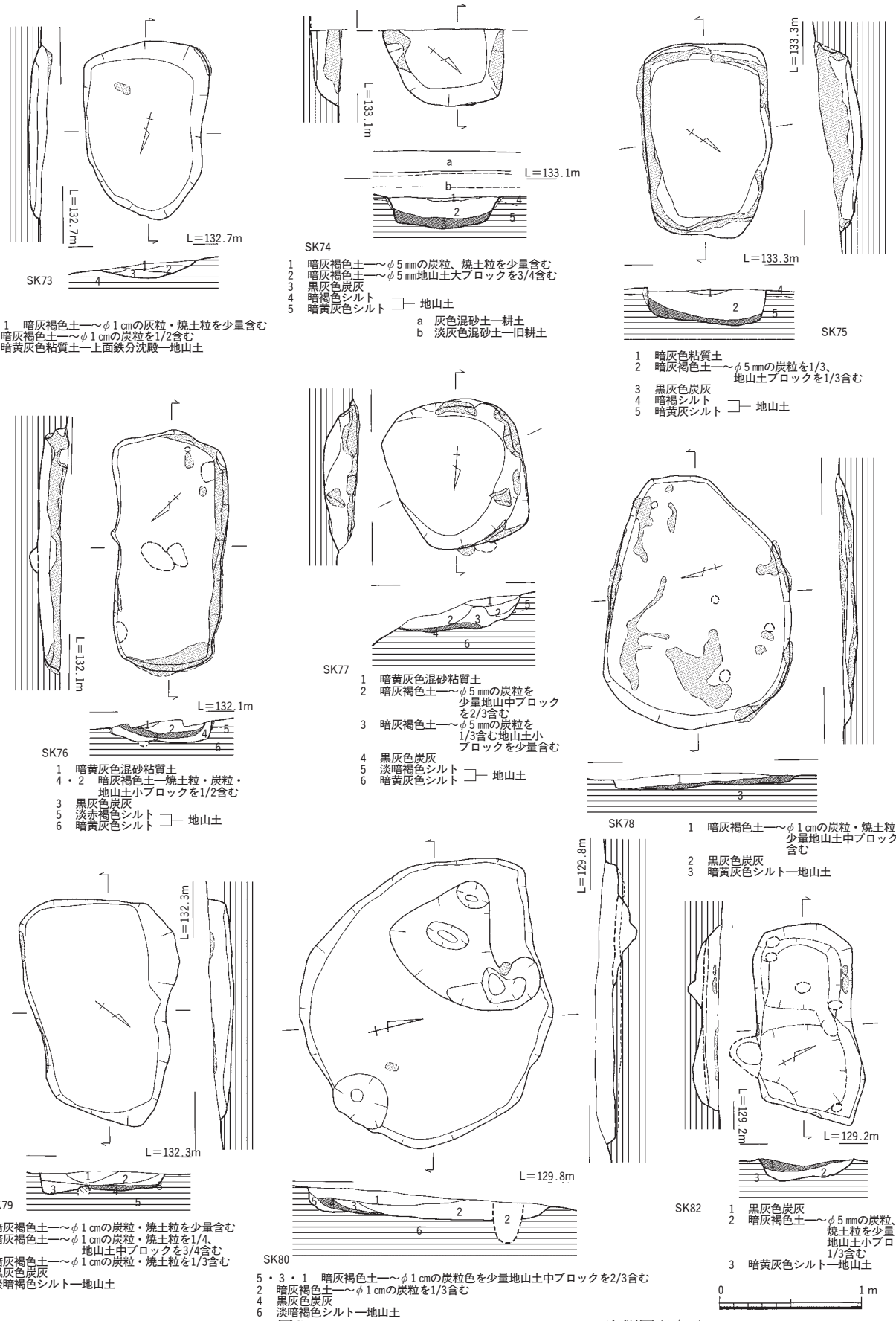


Fig. 35　11区SK73・74・75・76・77・78・79・80・82実測図(1/40)

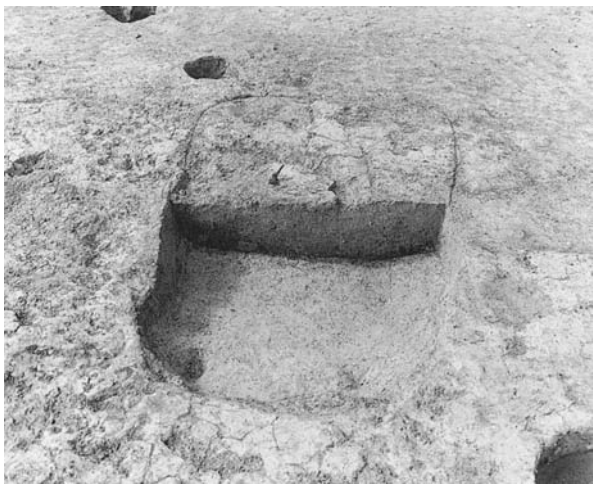
る。平面は山側に広がり、AかA'類土壙となる。軸は地形に直交する。床上に８㎝程炭灰層が厚く堆積し、上面を地山土ブロックの客土で埋め戻す（２層)。壁は床上10㎝程から焼ける。

SK75（Fig.35 Ph.73・74） SK74の６ｍ南東に位置し、1.35×0.87ｍ深さ30㎝を測るA'類土壙である。軸は地形に直交する。床上に５㎝程炭灰層が堆積し、上面を地山土ブロック混じりの客土で埋め戻す（２層)。壁は床上５㎝程から、上端で厚さ４㎝程厚く焼ける。

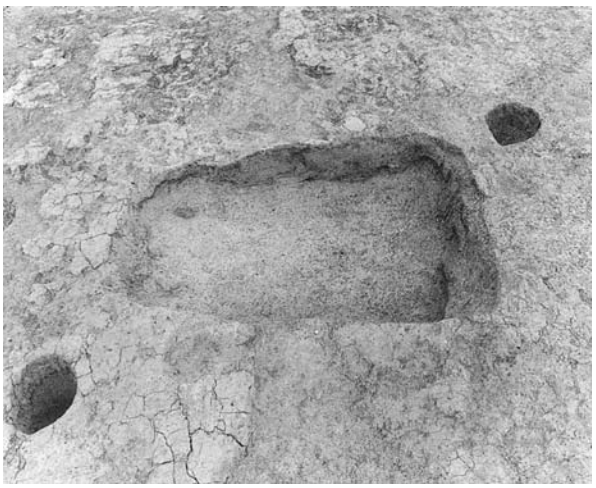
SK76（Fig.35 Ph.73・74） 調査区北端中央のF65グリッドに位置し、1.75×0.82ｍ深さ18㎝を測るB類土壙。軸は地形に並行する。５㎝程の炭灰層下に同程度の流土層があり、これが焼土壁を覆っているため、１回目の操業後床上の炭灰層を除去し、後一定期間置かれ、２度目の操業が成されている。炭灰層上は流土で自然に埋没する。壁は床直上から上端で厚さ５㎝程、厚く焼ける。

SK77(Fig.35) 調査区中央北寄りのC65グリッドに位置し、1.2×1.08ｍ深さ28㎝を測る小型の正方形に近いB類土壙である。軸は地形に並行する。傾斜面に位置するため遺構全体が斜めに削られ東壁部が遺存しない。床上に数㎝の薄い炭灰層が堆積し、上面に10㎝程自然堆積後客土で埋め戻される(２層)。壁は床上15㎝程から上端で厚さ５㎝程厚く焼ける。部分的に２段に焼け、一部剝落して床上まで落ち込む。

SK78(Fig.35) 調査区中央南寄りのZ67グリッドに位置し、1.78×1.3ｍ深さ13㎝を測る隅丸のA類土壙。軸は地形に斜行する。削平が深く遺存状況は悪い。床上に５㎝程炭灰層が堆積し、上面に剝落した焼土壁ブロックが部分的に堆積する。上面は客土で埋め戻される(１層)。壁は床上５㎝程

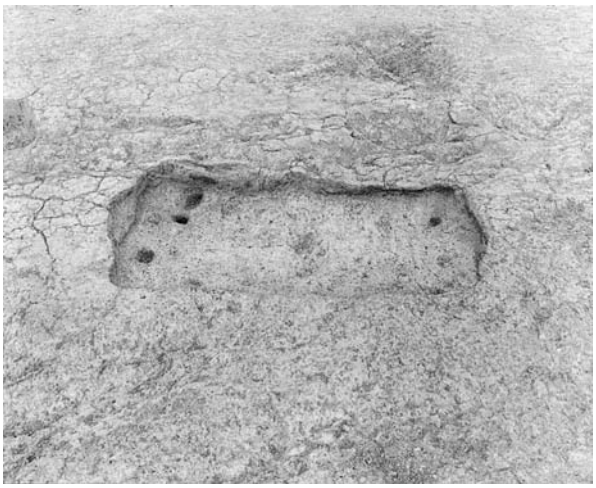


Ph. 73 11区SK75土層断面（北から）



Ph. 74 11区SK75（西から）

Ph. 75 11区SK76土層断面（西から）



Ph. 76 11区SK76（北から）

から焼け、部分的に残る。

SK79 (Fig.35 Ph.72)　SK78の南３ｍに位置し、1.75×1.12ｍ深さ22㎝を測る隅丸のA'類土壙である。軸は地形に直交する。削平が深く、遺構の遺存状況は悪い。床上に数㎝、薄く炭灰層が堆積し、上面は地山土ブロック混じりの客土で埋め戻される。焼土壁は南側に、上端から数㎝程部分的に残るのみである。

SK80(Fig.35)　調査区北端中央、SK76の東南7.5ｍに位置し、2.15×1.8ｍ深さ18㎝を測るC類土

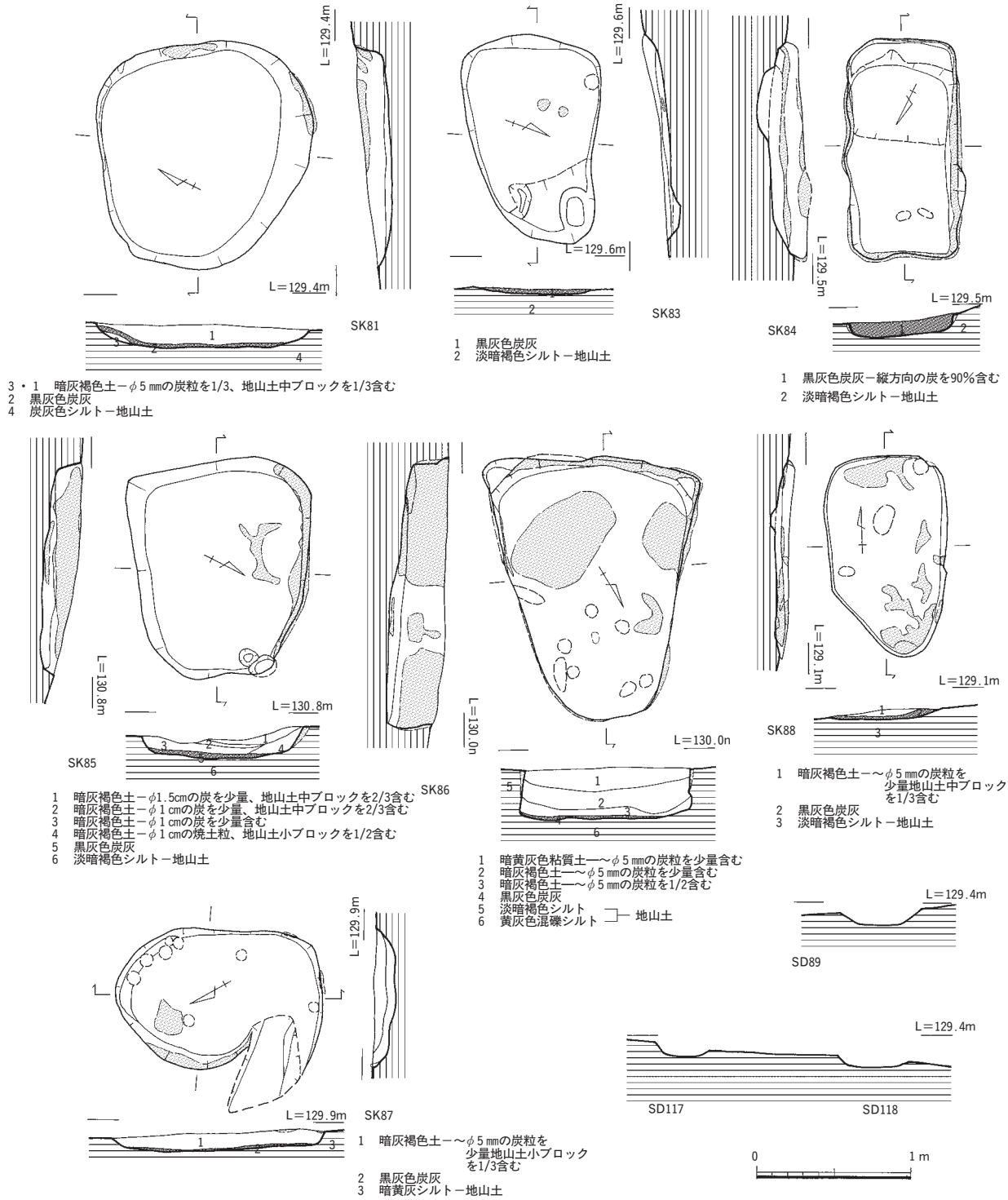


Fig. 36　11区SK81・83・84・85・86・87・88、SD89・117・118実測図(1/40)

壙。炭灰層は部分的に堆積し(４層)、大部分は地山ブロック混じりの客土で埋め戻される。焼土の10㎝程のブロックが若干床近くに残る。炭灰の廃棄土壙の可能性がある。内部からは陶器甕の小片が１片出土。

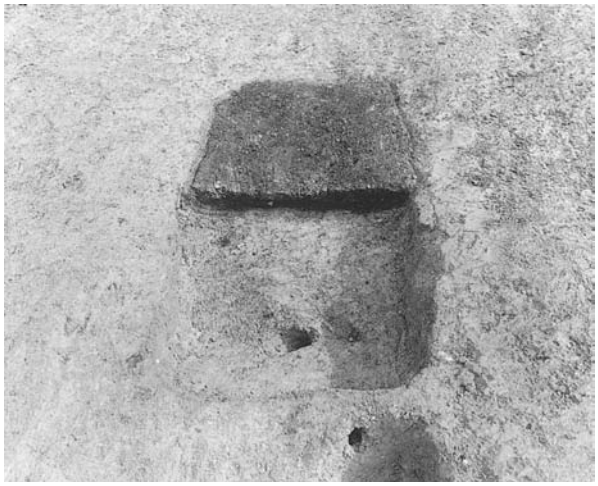
SK81(Fig.36)　調査区北東部、D63グリッドに位置し、1.6×1.4ｍ深さ22㎝を測る隅丸の方形に近いA類土壙である。軸は地形に並行する。床上に数㎝薄く炭灰層が堆積し、上面は地山土ブロック混じりの客土で埋め戻される(１層)。壁は床上10㎝程から上端で厚さ２～３㎝程薄く焼け、焼土の大部分が剝落し、部分的にしか残らない。

SK82（Fig.35）　SK81の南東４ｍ、C63グリッドに位置し、1.5×0.9ｍ深さ12㎝を測るB類土壙。軸は地形に並行する。削平が深く、炭灰層が露出する。この10㎝程の炭灰層下に６㎝程の流土層があり、これが焼土壁を覆っているため、操業後床上の炭灰層を除去後一定期間置かれ、２度目の操業が成されている。焼土壁は上端から数㎝部分的に残る。

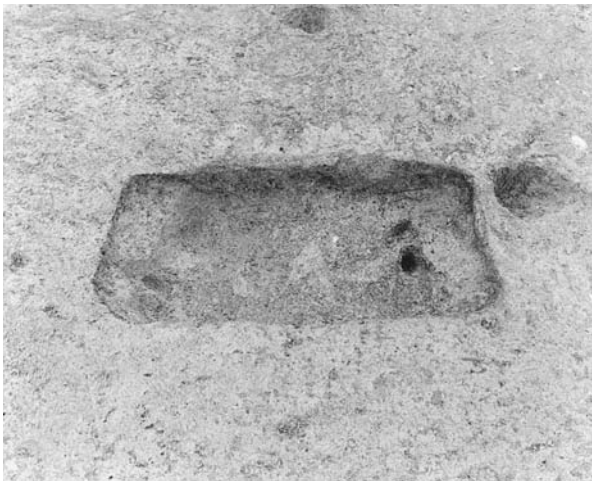
SK83(Fig.36 Ph.79)　SK82の南４ｍ、C64グリッドに位置し、1.4×1.0ｍ深さ12㎝を測る小型のA'類土壙。軸は地形に直交する。削平が深く、炭灰層のみが５㎝程残る。

SK84（Fig.36 Ph.77・78）　調査区中央南東寄りの、Z65グリッドに位置し、1.5×0.8ｍ深さ23㎝を測るB類土壙。軸は地形に並行する。削平が深く、10㎝程の炭灰層が露出する。焼土壁は床直上から上端で厚さ４㎝程が焼ける。

SK85（Fig.36 Ph.80）　SK84の南６ｍの、Y65グリッドに位置し、1.56×1.32ｍ深さ23㎝を測る



Ph. 77　11区SK84土層断面（西から）



Ph. 78　11区SK84（北から）

Ph. 79　11区SK83（西から）

Ph. 80　11区SK85（東から）

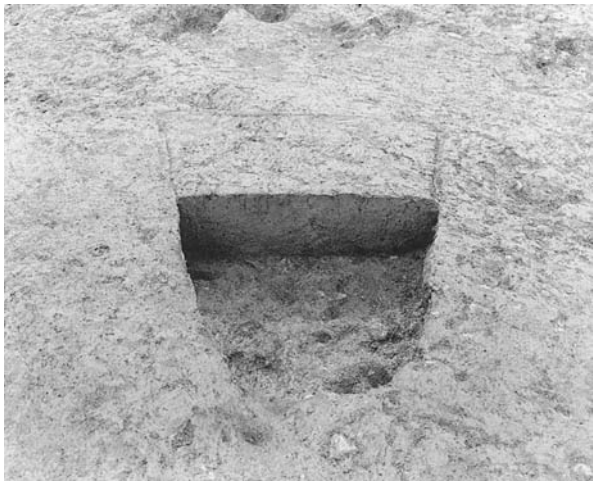
A類土壙。軸は地形に直交する。床上５㎝程炭灰層が堆積し、一部床面が薄く焼ける。上面が10㎝弱自然に埋没後（３・４層)、地山土ブロック混じりの客土で埋め戻される（１・２層)。焼土壁は床直上から上端で厚さ５㎝程厚く焼け、南部は剝落し殆ど遺存しない。

SK86（Fig.36 Ph.81･82） 調査区南東端のX65グリッドに位置し、1.9×1.4ｍ深さ38㎝を測る典型的A類土壙。軸は地形に斜行する。床上５㎝程炭灰層が堆積し、一部一部床面が薄く焼ける。上面は流土で自然に埋没する。真っ直ぐ立ち上がる壁は床直上から上端で厚さ４㎝程厚く焼け、部分的に剝落するが遺存状態は良好である。

SK87（Fig.36） SK82の東3.5ｍ、B62グリッドに位置し、1.38×1.15ｍ深さ13㎝を測る隅丸のA類土壙。軸は地形に直交する。床上に５㎝程の炭灰層が堆積し、一部床面が薄く焼ける。上面は流土で自然に堆積する。壁は床上5㎝程から焼け、部分的に遺存する。

SK88（Fig.36） 調査区東端北寄りの、C61グリッドに位置する、1.32×0.8ｍ深さ13㎝を測るA'類土壙。軸は地形に直交する。床上に３㎝程の炭灰層が堆積し、床面が部分的に薄く焼ける。上面は流土で自然に堆積する。壁は床直上から焼け、部分的に遺存する。

②溝**SD117･118**（Fig.36） 調査区最下段の旧田面に、30～90㎝の間隔を空け等高線に並行する２条の溝SD117･118を検出した。幅40～50㎝前後、深さ10㎝足らずの浅い溝で、南12ｍ程の位置に、溝が途切れながらこれに連なり、３区のSD139同様段畑の畝溝と考えられる。同様の溝が他に数条並行する。



Ph. 81 11区SK86土層断面（北から）

Ph. 82 11区SK86（西から）

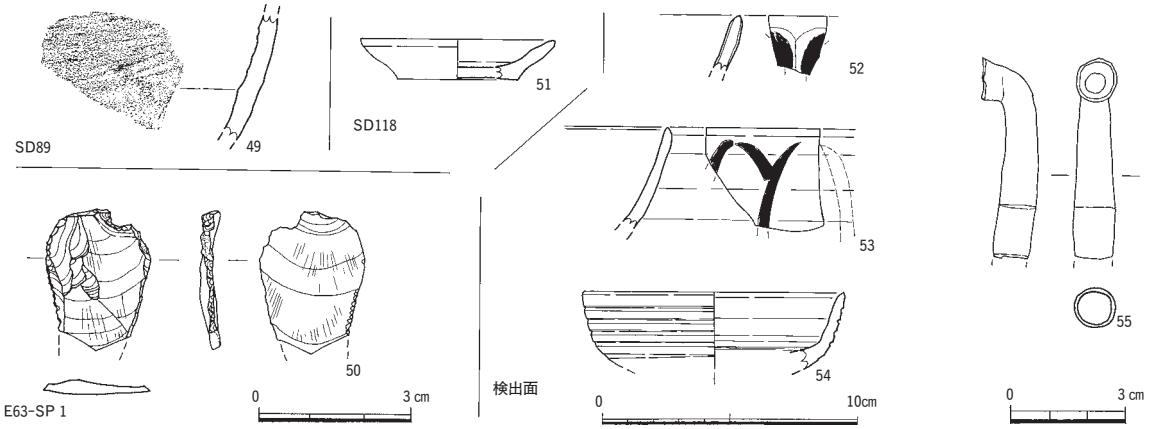


Fig. 37 11区出土遺物実測図(1/3・50-2/3・55-1/2)

出土遺物（Fig.37 Ph.84）**51**はSD118出土の土師器皿で、口径7.6器高1.6cmを測り、口縁が大きく開く。外底は摩滅するが糸切りと思われる。15・16世紀。他にSD117から瓦器埦小片が出土する。

③その他の出土遺物（Fig.37 Ph.84）　**52**は検出面出土の龍泉窯系青磁Ⅱ類の鎬蓮弁文碗の小片。**53**は表土出土の龍泉窯系青磁Ⅱ類の片切彫り蓮弁文碗の小片。

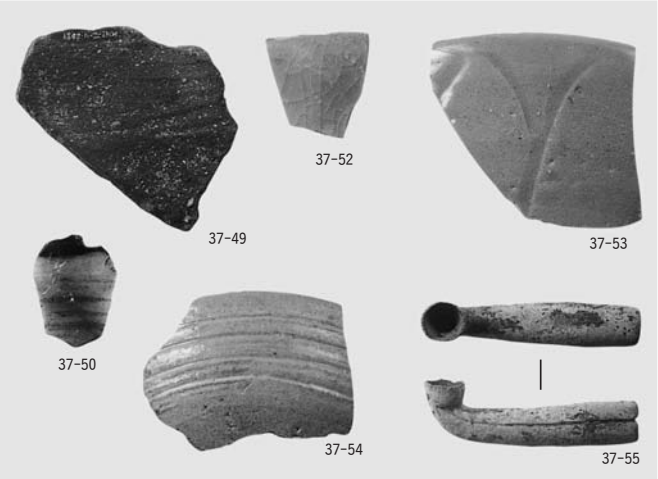
⑶　近世の調査　調査区の全域、幅３～５ｍ幅の狭い棚田は近世以降の開田と考えられ、遺物が若干出土する。

①**出土遺物**（Fig.37 Ph.84）　**54**は肥前系陶器の坏で口径10.3cmを測る。外面に沈線４条・内面見込みの２条の圏線に白泥で刷毛目を施し雑に拭き取る。全体的に被熱し、淡灰～赤桃色を呈する。**55**は検出面出土の銅製煙管雁首で、5.2cmを測る。

Ph. 83　11区SD89（北から）

11．12区の調査（Fig.38 Ph.85）

主丘陵の東側縦方向に並ぶ棚田列にあり、８～11区と並列して11区の下方10ｍ程の最下位に位置する調査区である。現田面２面・旧田面６面の、平坦面と北東に下がる緩斜面からなる。検出面は赤褐～黄褐色混礫粘質土上面、一部で中位段丘礫層面上で、調査面積は1,812㎡を測る。標高は126～127ｍ。検出は縄文時代暗褐色土～暗黄灰色シルトを覆土とする倒木痕等の自然壙７基、古代～中世の焼土壙７基・溝８条・整地層・柱穴多数を検出した。



Ph. 84　11区出土遺物

Ph. 85　12区全景（北東から）

⑴　縄文時代の調査　暗褐色土～暗黄灰色シルトを覆土とする倒木痕・自然流路等の自然壙7基以上・土壙1基を検出している。

Fig. 38　12区遺構全体図(1/350)

①土壙**SK124**（Fig.39）調査区中央部西寄りの、B56グリッドに位置し、0.62×0.5m深さ24cmの方形の土壙で、覆土は暗褐色土である。遺物は縄文土器小片が出土している。

②その他の出土遺物（Fig.41 Ph.96）　**56**はSD120混入の黒耀石製鍬形鏃で、尖端部を折損する。幅21.9mm。漆黒色不透明で横方向に層理が走る。**57**はX59グリッドSP2混入のサヌカイト製鍬形鏃の尖端部。**58**は倒木痕SX128出土のサヌカイト製剝片鏃。横剝ぎ剝片の剝離面を両面に残す。尖端と脚端の一部を欠く。現況で16.7×16.5×3.4mmを測る。**59**は検出面出土黒耀石製使用痕剝片で、打面調整を行った縦長剝片の両側を使用し、先端を欠損する。黒灰色透明で層理は縦に走る。**60**は焼土壙SK95混入の黒耀石製使用痕剝片で、表皮を残した縦長剝片の打面以外の側縁を使用する。黒灰色透明で層理は横に走る。

⑵　古代～中世の調査

調査区の全域で焼土壙7基・溝8条・整地層・柱穴多数を検出した。

①焼土壙　調査区全域に分布し、南北方向の地形に沿って2本の帯状に3～4基が分布する。軸は地

形に並行するものがやや多い。

SK90(Fig.39　Ph.86)　調査区上段北端部のF54グリッドに位置し、1.82×1.4ｍ深さ50㎝を測る大型のA類土壙で、中世溝SD122に切られる。軸は地形に並行する。床上に５㎝程炭灰層が堆積し、さらに５㎝程炭粒･焼土粒混じりの流土が自然堆積後（４層)、地山土ブロック混じりの客土で埋め戻される（３層)。

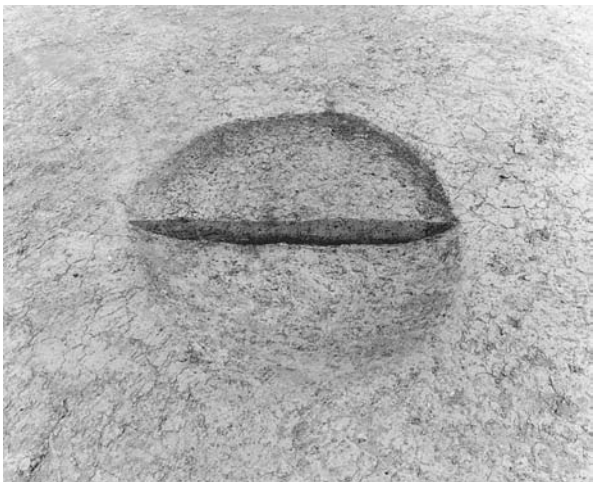
SK91（Fig.39　Ph.88・89）　調査区上段西端部中央寄りのD57グリッドに位置し、1.76×0.95ｍ深さ30㎝を測るB類土壙で、軸は地形に斜行する。床上に３㎝程炭灰層が堆積し、床面の一部が薄く焼ける。以上は流土で自然に埋没する。壁は床上５㎝程から厚さ３㎝程が焼け、半分近く剝落する。

SK92（Fig.39）　上段西端部でSK91の７ｍ南に位置し、1.65×0.98ｍ深さ22㎝を測る隅丸のA類土壙で、軸は地形に直交する。床上に数㎝薄く炭灰層が堆積し、床面の大部分が薄く焼ける。上面は地山土ブロック混じりの客土で埋め戻す。壁の床直上から薄く焼け、東西の焼土が剝落する。

SK93(Fig.39　Ph.87)　上段西端部でSK92の３ｍ南に位置し、1.32×1.04ｍ深さ16㎝を測るC類土壙。床上に３㎝程炭灰層が堆積し、上面は炭粒混じりの流土が同程度堆積し(２層)、以上は地山土ブロック混じりの客土で埋め戻す（１層)。壁の床直上から薄く焼け、焼土の大部分は剝落する。

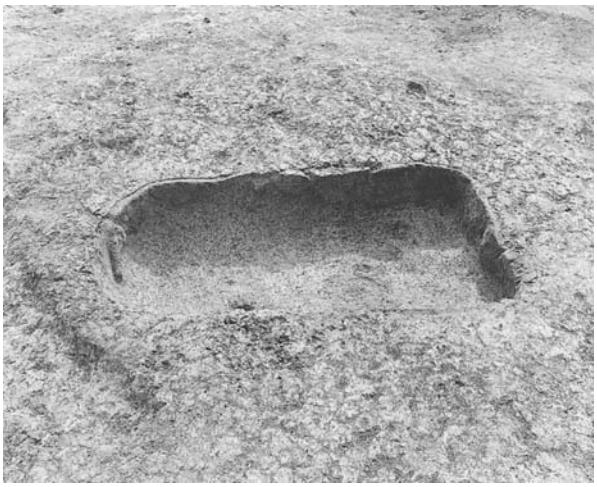
SK94（Fig.39　Ph.88･90）　下段東端部南寄りのZ54グリッドに位置し、1.55×1.1ｍ深さ36㎝を測るA’類土壙で、軸は地形に直交する。７㎝程の炭灰層下に流土層があり(５層)、掘削後一定期間

Ph. 86　12区SK90土層断面（東から）



Ph. 87　12区SK93土層断面（西から）

Ph. 88　12区SK91土層断面（西から）



Ph. 89　12区SK91（北から）

Fig. 39　12区SK124・SD120・SK90・91・92・93・94・95実測図(1/40)

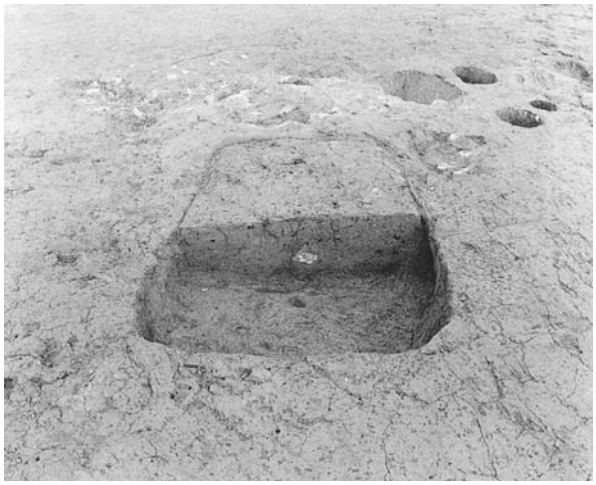
置かれ操業される。上面が半量ほど自然に埋没後、地山土ブロック混じりの客土で埋め戻す(１層)。壁は床上10㎝程から厚さ３㎝程が焼け、焼土の大部分は剝落し、西側には殆ど遺存しない。

SK95（Fig.39　Ph.91）　調査区下段東端部北寄りSK94の北18ｍに位置し、1.8×1.32ｍ深さ30㎝を測るB類土壙で、軸は地形に並行する。床上に７㎝程炭灰層が堆積し、南側では剝落した焼土壁ブロックが流れ込む。上面は流土で自然に埋没する。壁は床上７㎝程から上端で厚さ３㎝程が焼け、焼土の大部分は剝落し、南側には殆ど遺存しない。内部から混入の黒耀石使用剝片が出土した。

SK96A・96B（Fig.39　Ph.92・93）　調査区下段北東端部、SK95の北10ｍに位置し、1.81×1.2ｍ深さ45㎝を測るB類土壙で、軸は地形に並行する。1.45×0.92ｍの焼土壙を埋没後(SK96B)、20㎝程上位に一回り大きな焼土壙を設けた（SK96A）もので、焼土壁が２段となる。Bの床上に７㎝程炭灰層が堆積し、上面は地山土ブロック混じりの客土で埋め戻され(４層)、Aの床面を作り出し、これをベースに周壁を拡張する。Bの壁は床上７㎝程から上端で厚さ3㎝程が焼け、焼土の西側の大部分は剝落する。Aの床上には５㎝程炭灰層が堆積し、上面は流土で自然に埋没する。やや開く壁は床上５㎝程から上端で厚さ３㎝程が焼け、焼土の北側の大部分は剝落する。

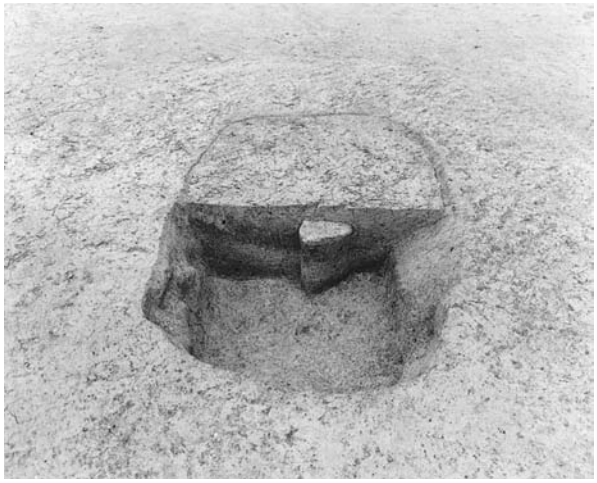
②溝　調査区上段に地形に並行する溝SD119・120・121・122・123・125の６条と地形に直交する溝SD126・127の２条を検出している。

SD122他（Fig.38）　上段に、地形に並行するSD119・120・121・122・123・125の幅１ｍ前後・深さ５～10㎝程の浅い溝６条が２～５ｍ間隔で概ね３列に連なる。明黄灰色粘土が堆積しSD122は焼



Ph. 90　12区SK94土層断面（南から）

Ph. 91　12区SK95土層断面（東から）



Ph. 92　12区SK96土層断面（北から）

Ph. 93　12区SK96（東から）

土壙SK90を切る。内部からは土師器坏・鍋等が出土する。耕作に伴う畝溝と考えられる。

SD126・127（Fig.40）　上段南部で地形に直交する溝で、幅40～110㎝深さ15㎝程で灰褐色砂質土が堆積する。柱穴が密集する整地部分の北を区画する。

出土遺物（Fig.41　Ph.96）　**61**はSD127出土の土師質擂鉢で内面は粗いヨコハケ後6.5㎜間隔の擂目を入れる。15・16世紀代。他に須恵器・土師器片が出土する。

③整地層（Fig.40）　調査区南端、SD126に区画される柱穴が密集する部分で、上段平坦部に高さを合わせて東傾斜面灰褐色土上に地山土で客土を行っていた。調査時、水田開墾時の地業と誤認し表土とともに除去したため、遺構面を失い、柱穴が建物としてまとまらない状態となってしまって

Ph. 94　12区X59SP1宋銭出土状況（北から）

Ph. 95　宋銭出土状況（東から）

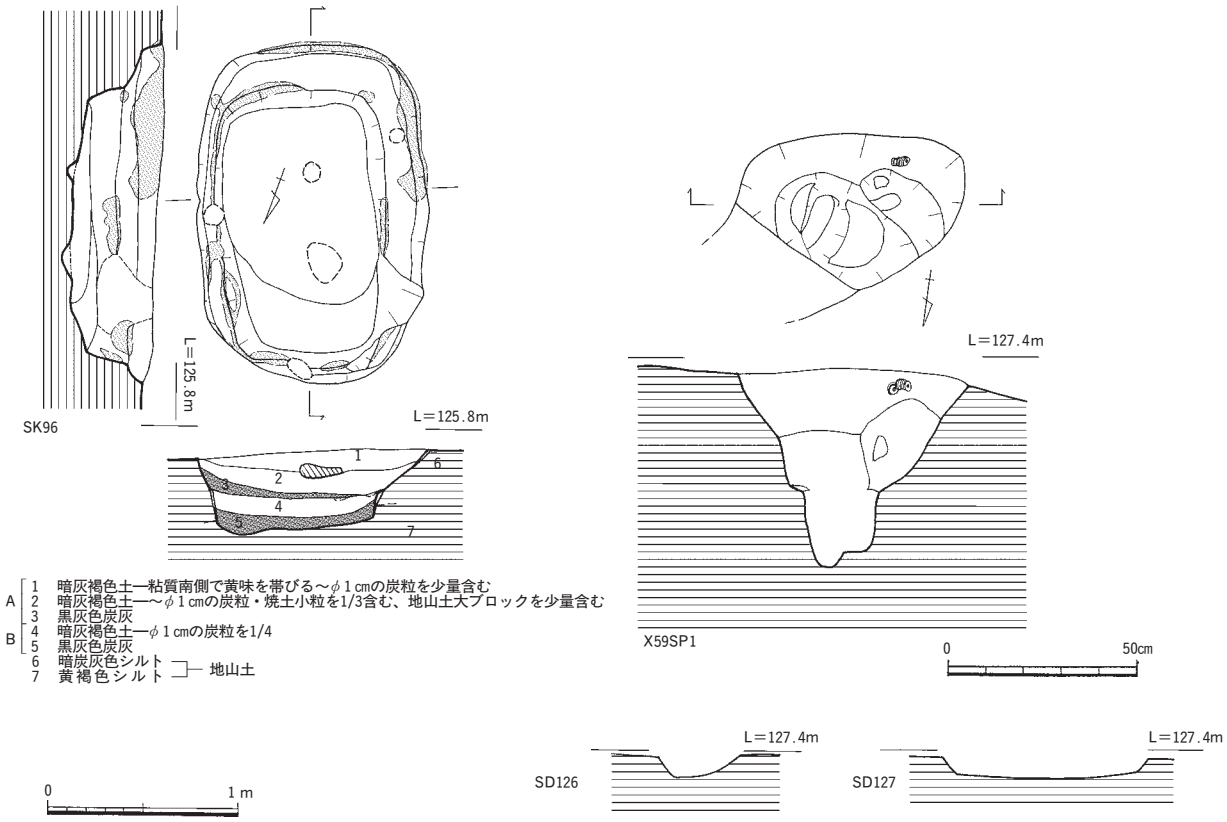
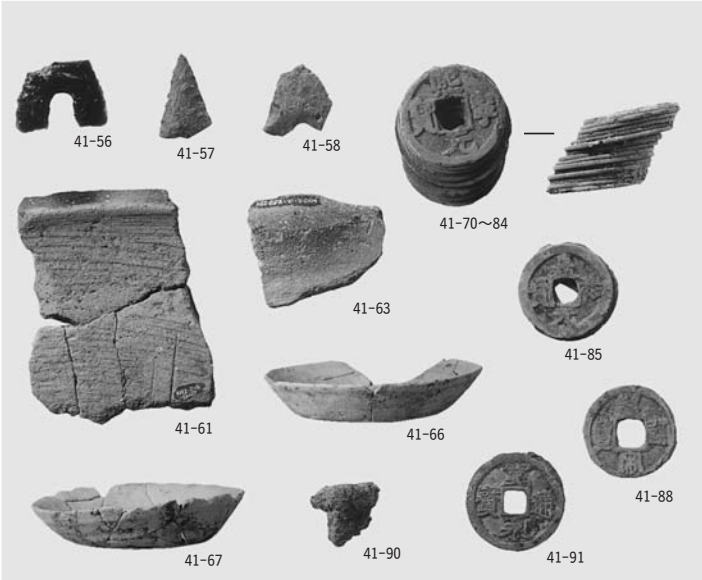


Fig. 40　12区SK96・X59SP1・SD126・SD127実測図(1/20・1/40)



Ph. 96　12区出土遺物

いる。上段に近い客土下から土師器坏をまとまって回収している。

出土遺物（Fig.41　Ph.96）**66**～**68**は土師器坏。口径10.9～11.8器高2.2～2.6cmを測り、外底は全て糸切り。**69**は肥前系の土師質玉縁鍋口縁片。内面に粗いヨコハケを施す。15世紀後半。**62**は柱穴Z59SP4出土龍泉窯系青磁Ⅳ類碗口縁片。**70**～**89**はX59SP1出土の宋銭（Fig.40　Ph.94・95）。熙寧元寶・嘉祐元寶・皇宋通寶等、20枚が緡銭状態で柱穴の壁より1.5cm程浮いて出土した。建物の鎮壇に用いたと思われる。1枚径27mm

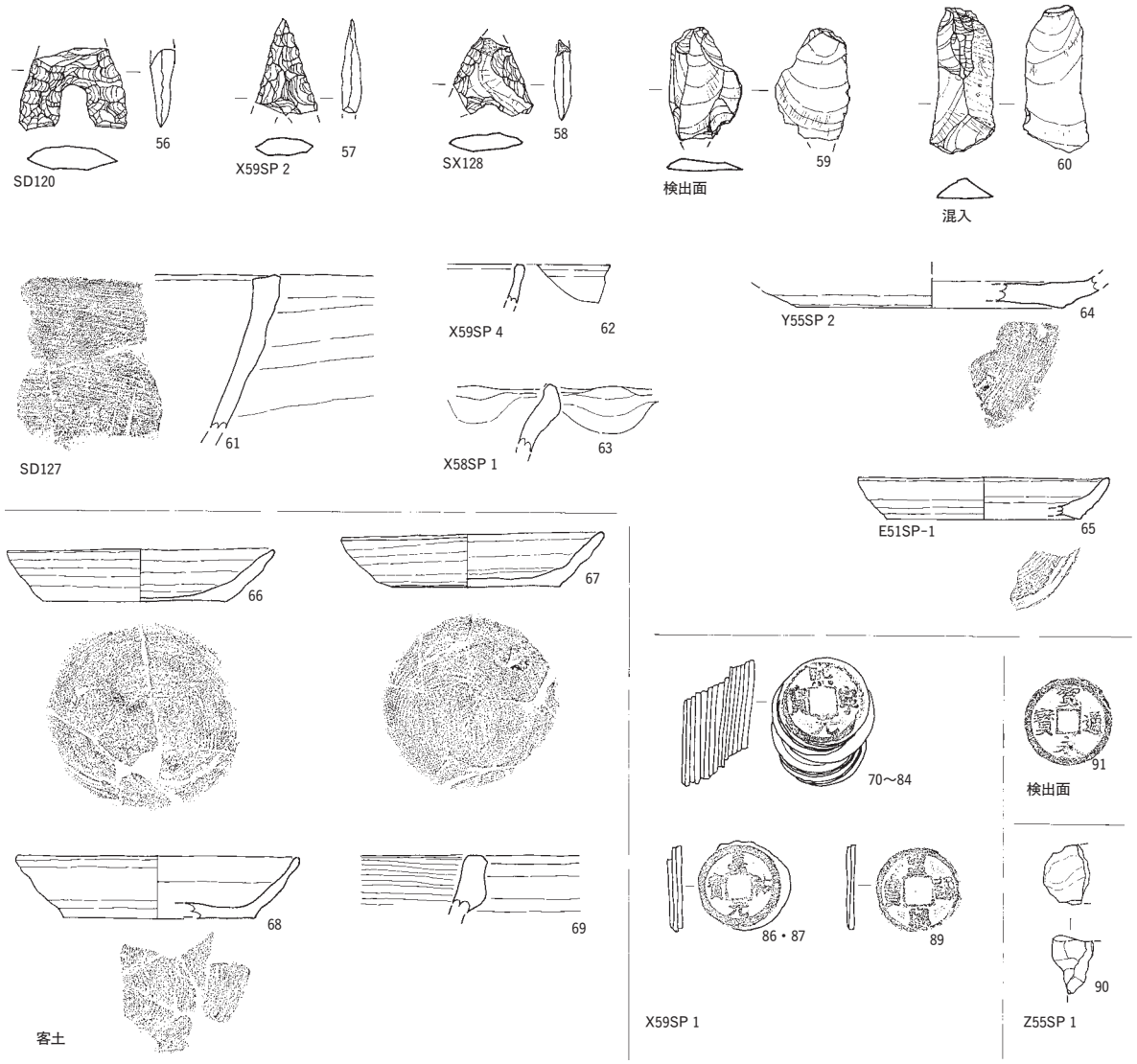


Fig. 41　12区出土遺物実測図(1/3・56～60-2/3・70～91-1/2)

の折二・折四の大銭を含む。

④その他の出土遺物(Fig.41　Ph.96)　**63**～**65**・**90**は柱穴出土遺物。**63**は東播系捏鉢の片口部。**64**・**65**は土師器坏・皿。**64**で底径11.0・**65**で口径10.4器高1.7㎝。何れも外底は糸切り。**90**はガラス質滓の半欠品である。

⑶　近世の遺物（Fig.41　Ph.96)

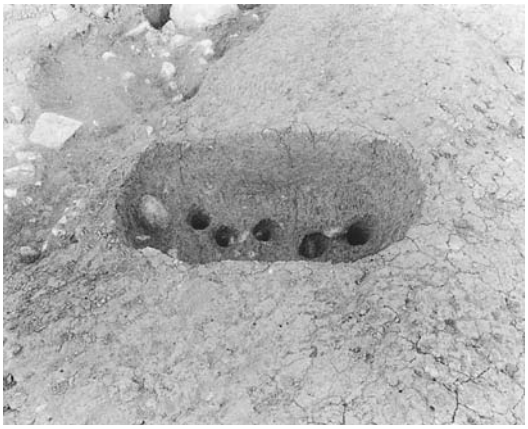
91は検出面出土の新寛永通寶である。

12．13区の調査（Fig.42 Ph.98）

小谷を挟んで主丘陵から北東に分岐する小支丘上の棚田列下方にあり、14区と並列する調査区である。現田面1面・旧田面３面の、平坦面と北東に下がる緩斜面からなる。検出面は赤褐～黄褐色混礫粘質土上面、調査面積は931㎡を測る。標高は127ｍ。検出は暗褐色土を覆土とする縄文時代倒木痕・自然流路等の自然壙２基・落穴１基、古代～中世の焼土壙４基・炭焼窯１基・掘立柱建物２棟・土壙1基・溝1条・柱穴多数を検出した。

⑴　縄文時代の調査　暗褐色土を覆土とする倒木痕・流路等の自然壙２基・落穴１基を検出した。

①落穴**SK102**(Fig.43 Ph.97)　調査区中央西端の、I64グリッドに位置し中世溝SD103に切られる。1.32×0.65ｍ深さ95㎝の隅丸長方形の土壙で、軸は地形に斜行する。床面中央に径10～12深さ6～16㎝の逆茂木５本が15～20㎝間隔で一列に並ぶ。遺物の出土は無い。



Ph. 97　13区SK102（南から）

②その他の出土遺物　自然流路SX111より縄文土器２片・倒木痕SX112より晩期粗製土器片を検出している。

⑵　古代～中世の調査　調査区の南半部を中心に焼土壙４基・炭焼窯１基・掘立柱建物２棟・土壙１基・溝１条・柱穴多数を検出している。

①焼土壙　調査区南半部にSK97～100の４基・北半部にSK104の１基が分布する。軸は地形に直交するものがやや多い。

Ph. 98　13区全景（北東から）

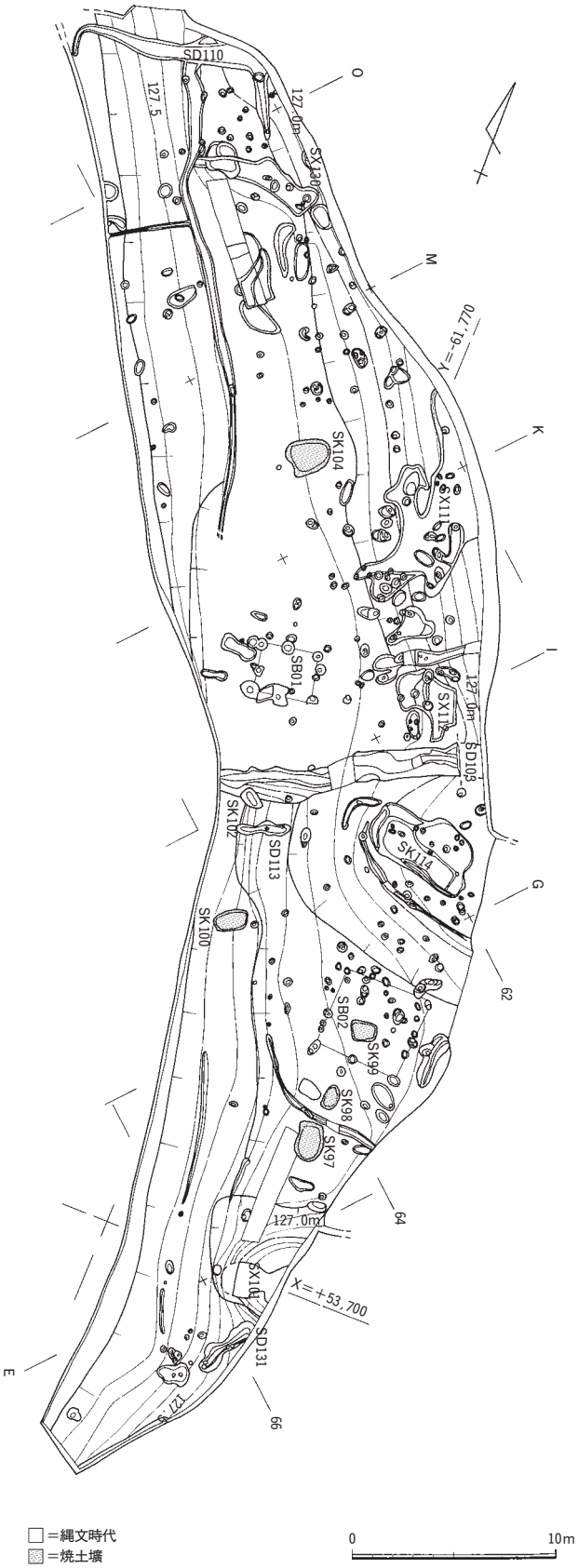


Fig. 42　13区遺構全体図(1/350)

SK97 (Fig.43)　SD103で北を画された南半部の中央、F64グリッドに位置し、1.84×1.35ｍ深さ46㎝を測る隅丸のA類土壙で、軸は地形に並行する。焼土壁が床上30㎝の位置で１段、さらに広がり上端で２段となり、12区SK96同様２基の焼土壙が重なっている。下段で1.58×1.08ｍを測る。上下とも焼土の半量以上が剝落する。

SK98 (Fig.43)　SK97の北１ｍに位置し、

Ph. 99　13区SK99（東から）

Ph. 100　13区SK104（西から）

Ph. 101　13区SD103土層断面（南から）

これに直列する。1.18×0.6m深さ6cmを測るB類土壙で、軸は地形に並行する。遺存状況は悪く、床上の3cm程の炭灰層が露出する。床面に焼土壁のブロックが一部落ち込む。

壁は床直上から薄く焼け、大部分剝落し、南半には遺存しない。

SK99（Fig.43 Ph.99） SK98の北2.5mに位置し、掘立柱建物SB02と切り合う。1.26×1.18m深さ26cmを測る方形に近いB類土壙で、軸は地形に直交する。床上に3cm程炭灰層が堆積し、床面が一部薄く焼ける。上面は地山土ブロック混じりの客土で埋め戻す。壁は床直上から厚さ3cm程焼け、焼土の遺存状態は良好である。

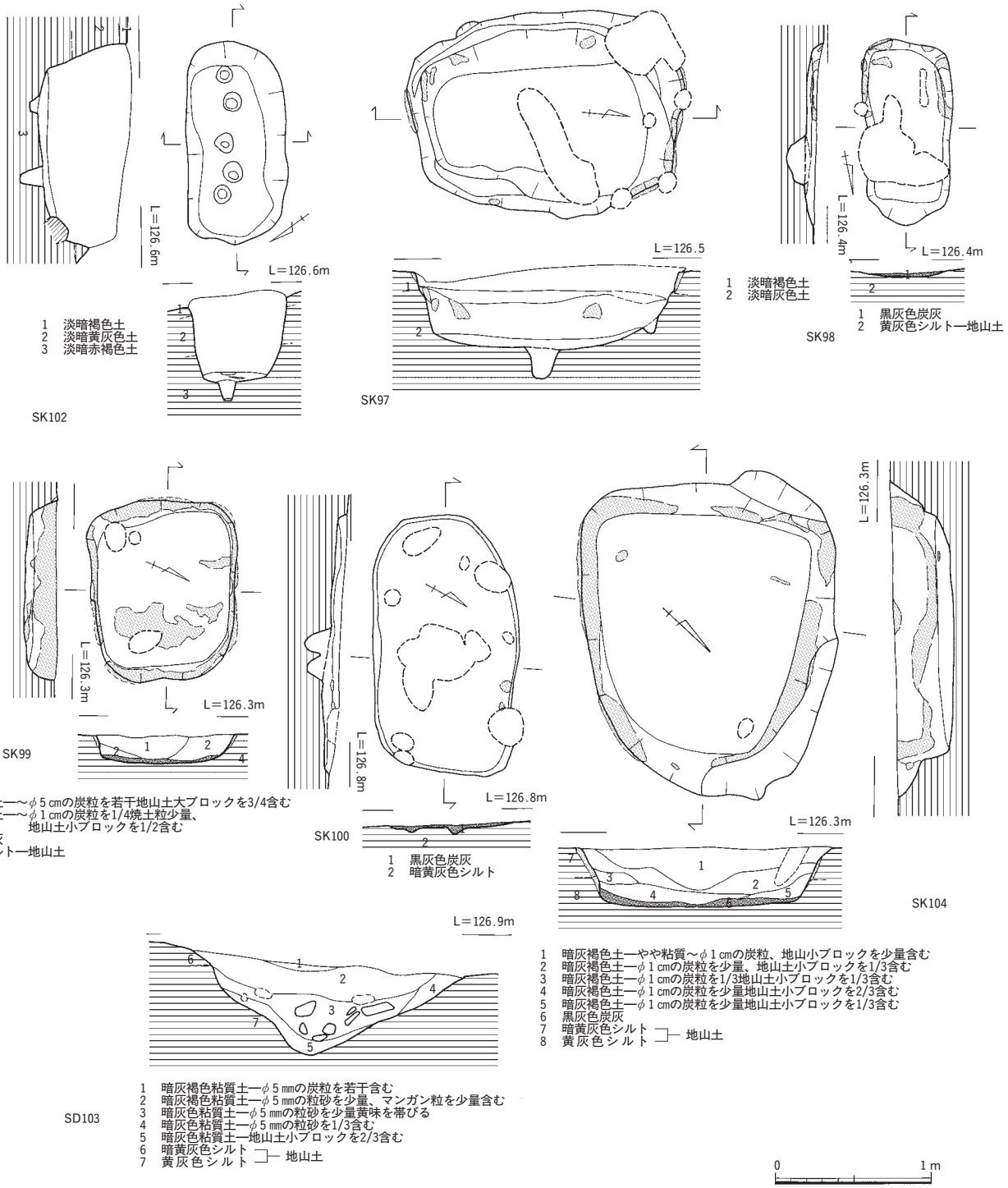
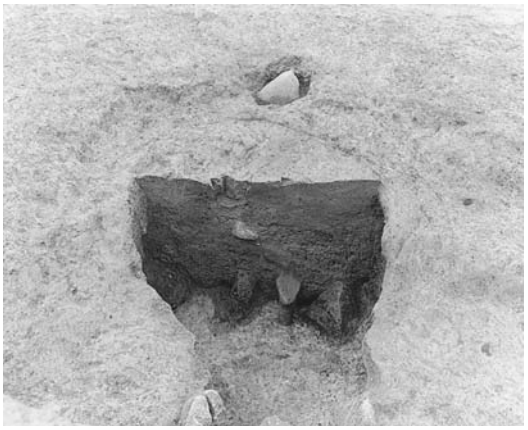


Fig. 43 13区SK102・97・98・99・100・104実測図(1/40)

SK100(Fig.43)　調査区南半部の北西、I64グリッドに位置し、1.75×1.0ｍ深さ10cmを測るB類土壙で、軸は地形に直交する。遺存状況は悪く、床上の３cm程の炭灰層が露出する。 焼土は西側上端の一部に残存するのみである。

SK104(Fig.43 Ph.100)　調査区北半部の中央L61グリッドに位置し、2.2×1.75ｍ深さ54cmを測る典型的A類土壙で、軸は地形に直交する。床上に５cm程炭灰層が堆積し、上面は流土で自然に埋没する。壁は床上５cm程から上端で厚さ４cm程焼け、焼土の遺存状態は良好である。

②溝　調査区中央に南北を画するSD103、南半部に建物SB02と土壙



Ph. 102　13区SX101土層断面（東から）

Ph. 103　13区SX101（東から）

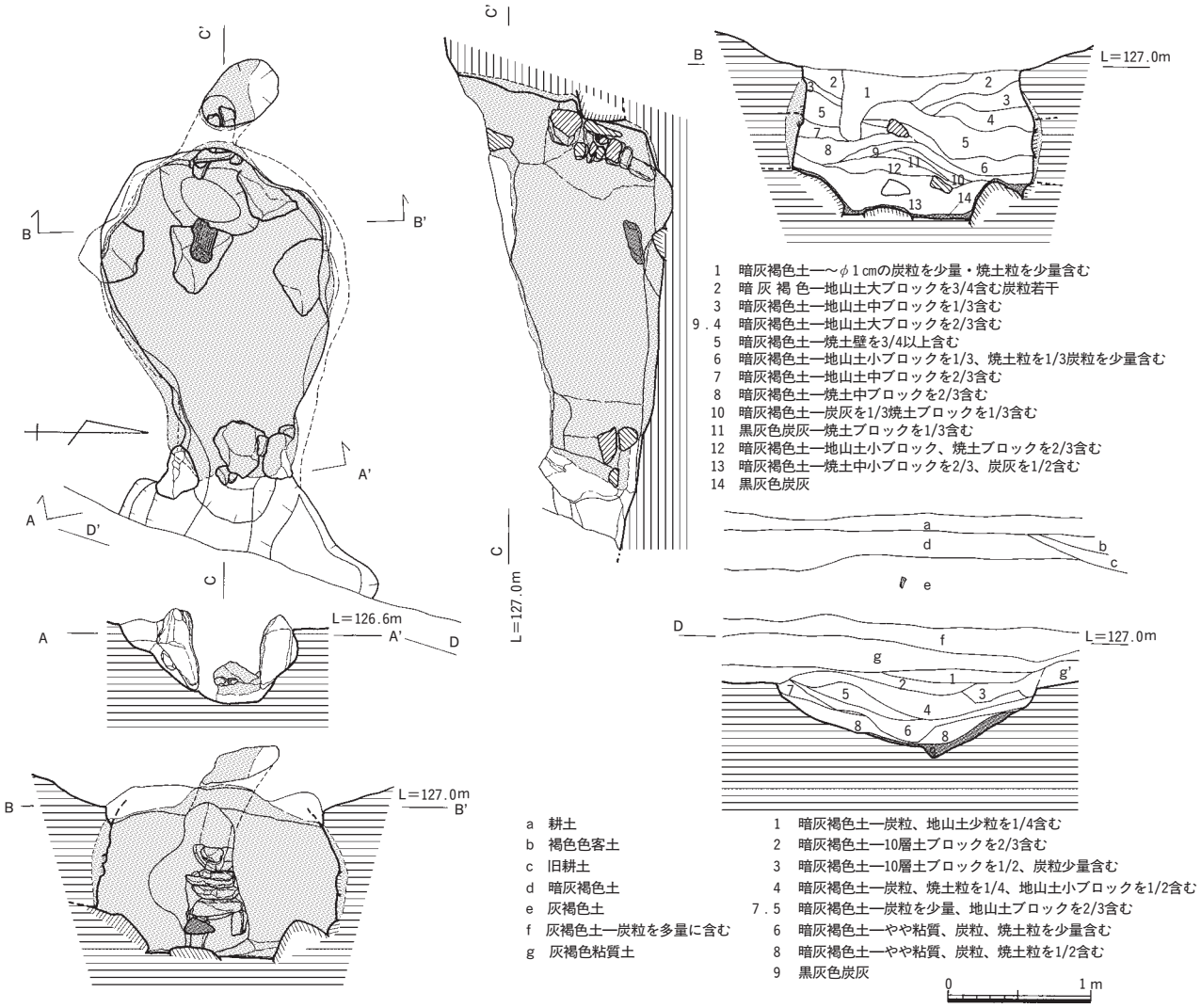
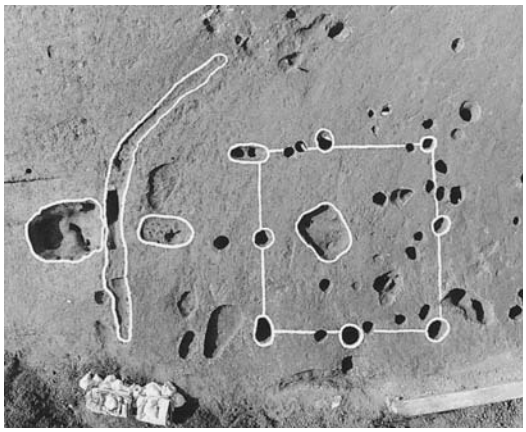


Fig. 44　13区炭窯SX101実測図(1/50)

Ph. 104　13区SX101煙出部（東から）

Ph. 105　13区SX101焚口（西から）

Ph. 106　13区SK114（左）SB01（右・北東から）



Ph. 107　13区SB02（北東から）

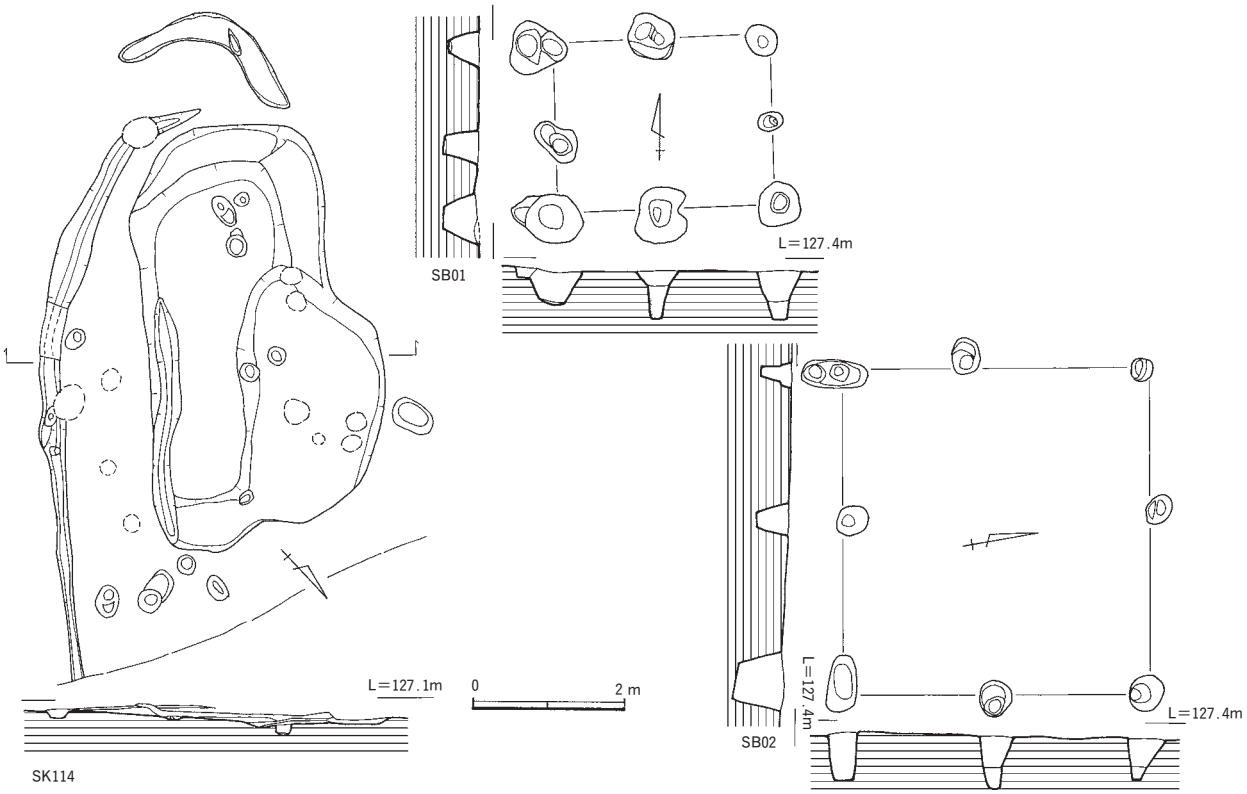
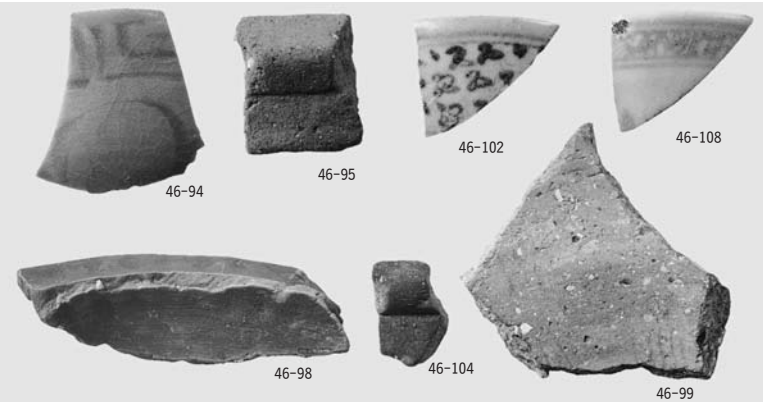


Fig. 45　13区SK114・SB01・02実測図(1/100)



Ph. 108　13区出土遺物

SK114を囲む小溝SD115を、北半部に4～15mの小さな方形に区画する小溝SD110を検出している。

SD103（Fig.43 Ph.101）　調査区を南北に画する溝で地形に直交し、幅1.95m深さ60cmを測る。覆土は暗灰～暗灰褐色粘質土を主とし砂の堆積は無い。中位には礫を多く含む。SD113が並行する。

出土遺物（Fig.46　Ph.108）　**94**は

Fig. 46　13区出土遺物実測図(1/3)

龍泉窯系青磁Ⅴ類碗で口径15.2cm。片切彫りの雷文下にラマ式蓮弁を施す。**95**は肥前系玉縁口縁の土師質鍋口縁片。胎土に粗い石英粒・カクセン石を含む。**96**は土師質の「く」字口縁鍋片。内面は細かなヨコハケ・外面はタテハケ後ヨコナデ炭化物が付着する。**97**は土師器皿で口径8.0器高1.7cm。外底は糸切り。**98**は瓦質湯釜の胴部で鍔径26.4cm。**99**は備前擂鉢片。**100**は瓦質湯釜底部。外底は粗いタテハケ後ヨコナデ・内底は細かな回転ハケ。径12.8cm。**101**は砂岩製の荒砥。**102**はSD113出土の明青花C類碗口縁。15世紀後半～16世紀前半を示す。

SD110 (Fig.42)　北半部で４～15ｍの小さな方形に区画する幅20～100・深さ10cm弱の小溝で、畑の区画を成すと考えられる。覆土は灰褐色砂質土。

③炭焼窯 **SX101** (Fig.44 Ph.102～105)　調査区南端近くに位置し、東に開口する。７×５ｍ深さ50cm程を方形に平坦に掘り下げ、中央をさらに掘り下げて全長3.75全幅1.75全高1.55ｍを測る無断式の半地下式平窯を設けている。焚口は塊石を２段積みこれを縦長の礫２石で挟んで内法47高さ25cmにしつらえ、燃焼・焼成部は床が40cm程下がる。幅90cmまで広げ径175cmの円形焼成部に連なる。残りの壁の立ち具合から、高さ60cm

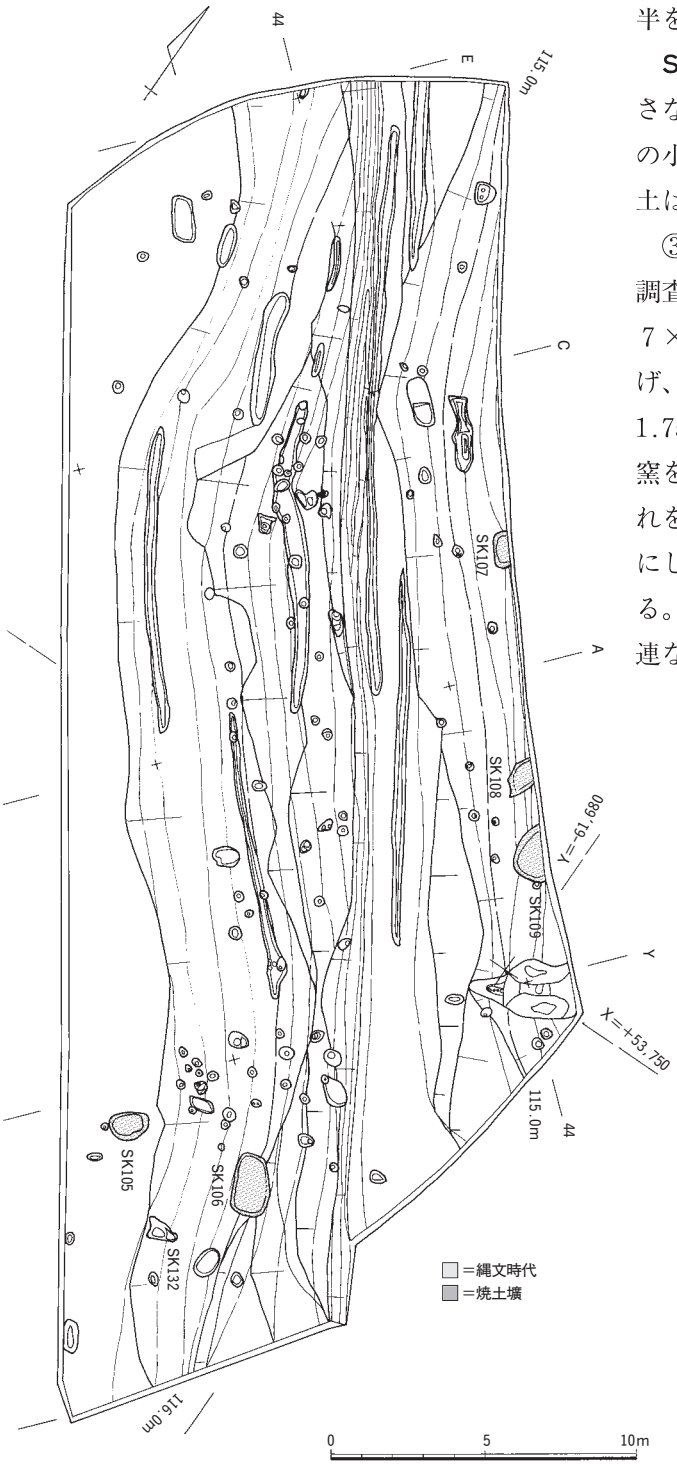
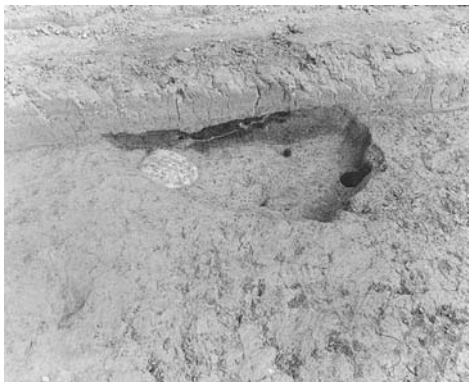


Fig. 47　14区遺構全体図(1/250)

Ph. 109　14区SK106土層断面（西から）



Ph. 110　14区SK109（南から）

の燃焼部から150㎝程のドーム天井へと高さを増した様で崩落した焼土層から（５層）厚さ25㎝程の粘土で天井を覆っていたと思われる。奥壁には幅50奥行き30㎝程２段の階段状に煙道を掘り込み、径40×60㎝の円形の煙出しがトンネル状に上方に抜ける。後、煙の流れが不良であったのか、高さ80㎝ほど礫を積み埋め込む。床上には30㎝弱炭灰層が堆積し壁は最大10㎝焼け、相当量の炭を焼き上げている。煙出しが奥壁から抜ける以外は近代炭焼窯と変わりない。

出土遺物(Fig.46)　**103**は崩落天井上部の上、１層から出土した土師質鍋口縁で15世紀後半以降を示す。他に土師器坏皿片が10片程出土。13層内の炭を分析にかけており（付編)、AMS測定ではAD1150～1220の年代が得られ樹種はツツジ科に比定されている。

④土壙**SK114**(Fig.45 Ph.106)　調査区南半部北のH62グリッドに位置する。5.6×3.1ｍの、二つの方形が重なった深さ15㎝程の浅い土壙で、南に幅40㎝程の周溝がめぐる。南の建物SB02と同じ配置で、柱穴と組合せ簡易な小屋がけの建物と考えられる。

Ph. 111　14区全景（東から）

出土遺物(Fig.46)　**92**は土師質鍋口縁。**93**は土師質擂鉢口縁で内面が摩滅する。15世紀後半。

⑤掘立柱建物　北半部でSB01を、南半部でSB02の２棟を検出した。棟は地形に直交する。

SB01（Fig.45 Ph.106）　中央SD103の北3.5ｍのJ62グリッドに位置する２×２間2.9×2.25

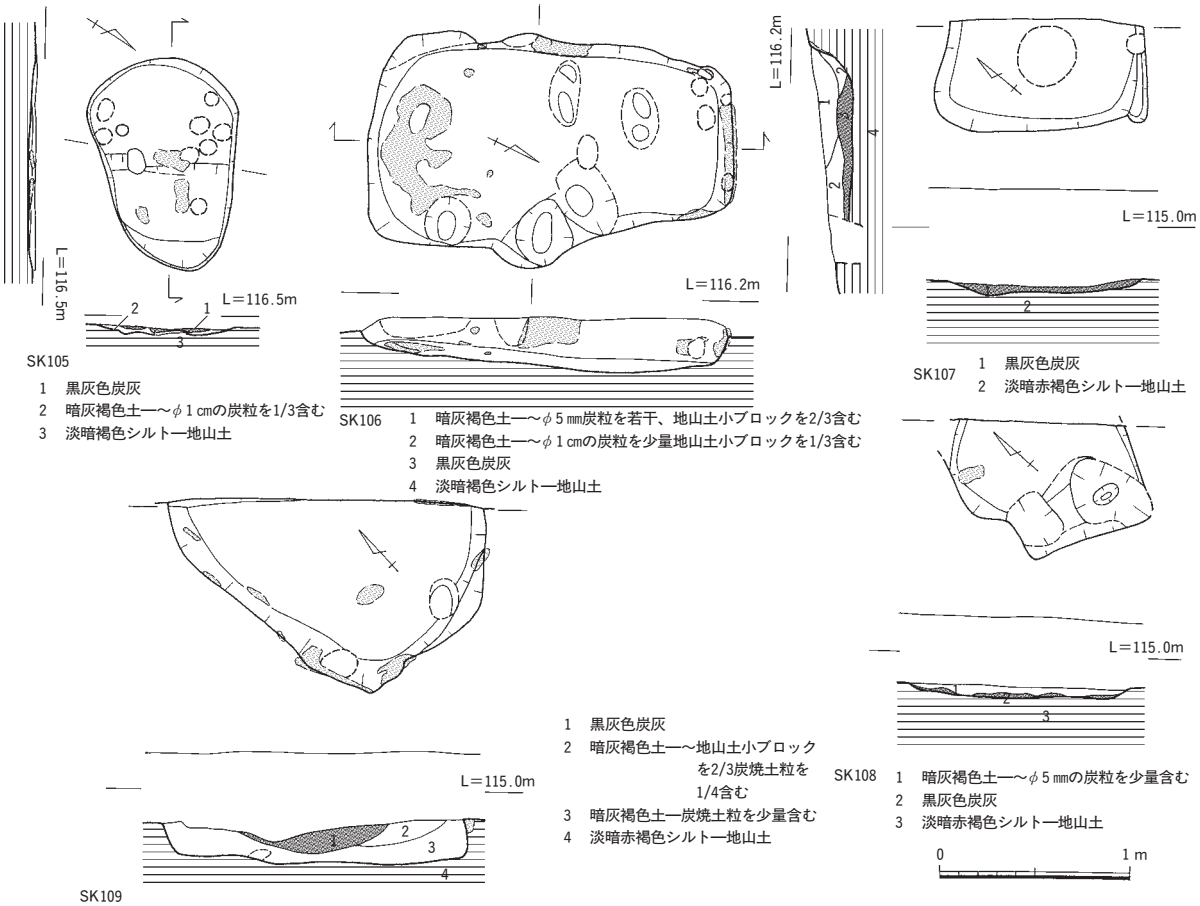


Fig. 48　14区SK105・106・107・108・109実測図(1/40)

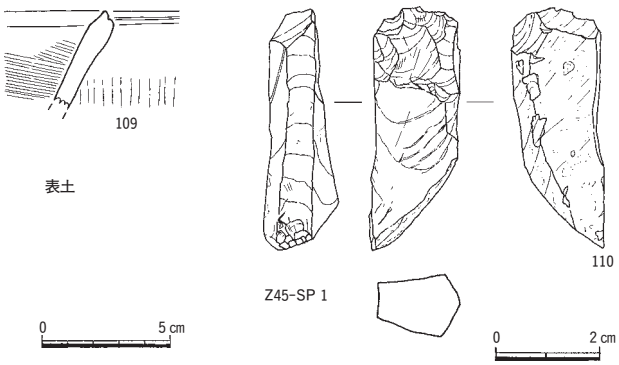


Fig. 49　14区出土遺物実測図(1/3・110-2/3)

mの側柱建物。方位はN－77°－Eで地形に直交する。梁間0.9～1.2・桁行は1.2～1.6mで梁間が狭い。堀方は径30～70・深さ40～65cm。柱径は12cm程。

出土遺物（Fig.46）　**106**は土師器皿で口径10.6器高1.9cm。外底は糸切り。12世紀後半～末。

SB02（Fig.45 Ph.107）　南半部中央のG93グリッドに位置する2×2間4.2×4.05mの側柱建物。方位はN－99°－Eで地形に直交する。柱間は1.7～2.3m。堀方は径25～45・深さ45～65cm。柱径は15cm程。南に幅40cm程の周溝がめぐる。

■＝焼土壙

Fig. 50　15区遺構全体図(1/200)

Ph. 112　15区全景（南から）

出土遺物（Fig.46）　**107**は土師器皿で口径11.0器高2.0㎝。外底は糸切り。12世紀後半～末。

⑥その他の遺物（Fig.46）　**104**は柱穴出土の肥前系玉縁口縁鍋。**105**土師質鍋。**108**は明青花碗。

13. 14区の調査(Fig.47 Ph.111)

13区と並列する北東小支丘上の棚田列の最下方にあり、現田面１面・旧田面５面の、平坦面と北東に下がる緩斜面からなる。検出面は赤褐～黄褐色混礫粘質土

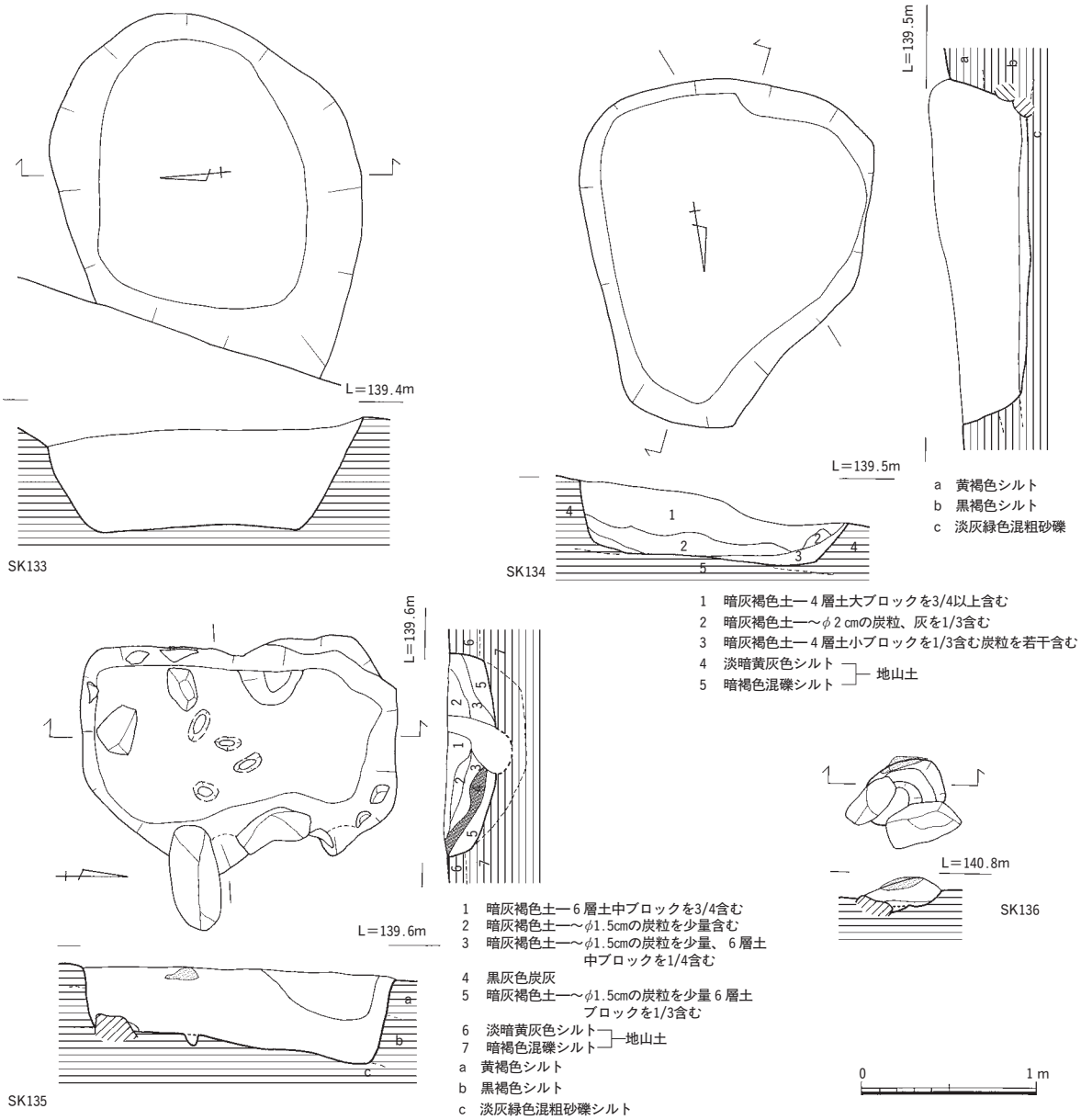


Fig. 51　15区SK133・134・135・136実測図(1/40)

上面、調査面積は979㎡を測る。標高は115～116ｍ。古代～中世の焼土壙５基・土壙１基を検出した。

⑴　焼土壙　調査区上段に２基、下段東端に３基並んで検出した。

SK105（Fig.48）　調査区南西のY46グリッドに位置し、1.1×0.8ｍ深さ4㎝を測る隅丸のA類土壙で、軸は地形に直交する。削平が深く炭灰層が露出する。床上に焼土ブロックが数個堆積する。

SK106（Fig.48 Ph.109）　調査区南端中央に位置し、2.03×1.4ｍ深さ40㎝を測るB類土壙で、軸は地形に並行する。床上に５㎝程炭灰層が堆積し床上に焼土ブロックが部分的に堆積する。上面は流土で自然に埋没する。壁は床上10㎝程から厚さ３㎝程が焼ける。焼土の大部分は剝落する。

SK107（Fig.48）　調査区東端中央寄りのB43グリッドに位置し、幅1.12ｍ深さ５㎝を測り、大部分が調査区外にある。削平が深く炭灰層が残るのみである。

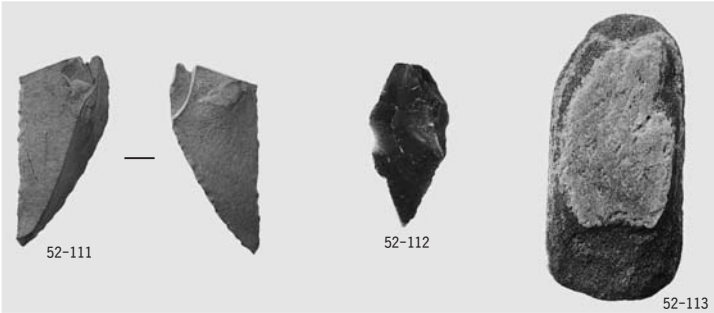
SK108（Fig.48）　SK107の南６ｍに位置し、幅0.93ｍ深さ８㎝を測り、大部分が調査区外にある。数㎝の炭灰層上に流土が堆積する。

SK109（Fig.48 Ph.110）　SK108の南１ｍに位置し、幅1.2ｍ深さ22㎝を測り、大部分が調査区外にある。10㎝程の炭灰層下に同程度流土が堆積しこれが焼土壁を覆ってお

Ph. 113　15区SK133（北から）

Ph. 114　15区SK134土層断面

Ph. 115　15区SK135（東から）



Ph. 116　15区出土遺物

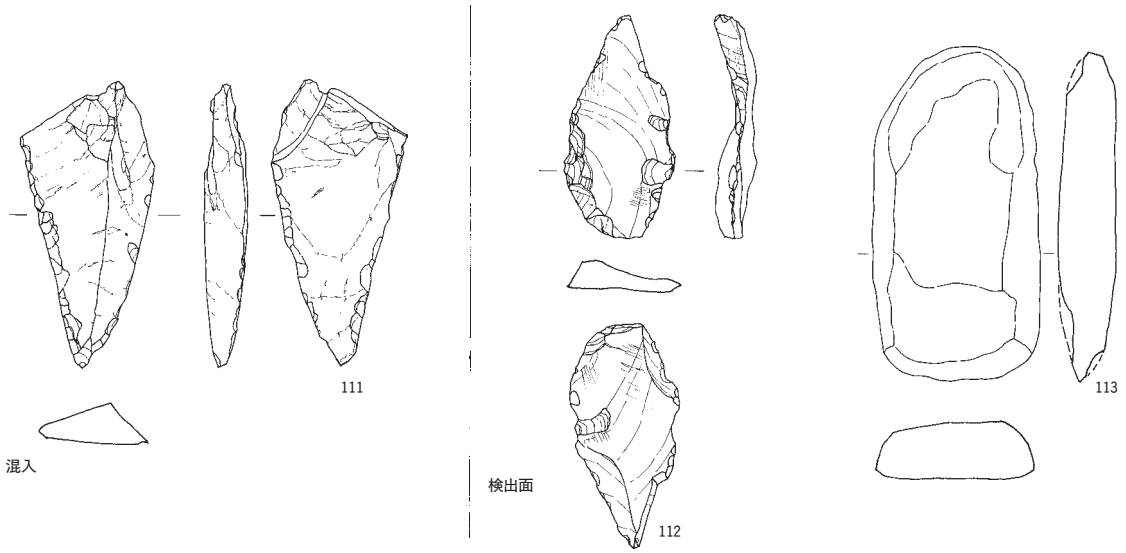


Fig. 52　15区出土遺物実測図(2/3・113-1/2)

り、最初の操業後炭灰層を除去後暫く放置され、半分埋まった時点で２度目の操業を行っている。

⑵　その他の遺物（Fig.48 Ph.109）　**109**は表土出土の、面取りした口唇に沈線・内面を斜めに面取りした瓦質の鍋口縁。**110**は柱穴出土の腰岳産黒曜石角礫の細石核で打面調整を行った正面に幅６㎜の石刃を１枚剝離する。4.8×1.8×1.1㎝を測る。

14．15区の調査（Fig.50 Ph.112）

主丘陵の西緩斜面、縦方向に並ぶ棚田列に、１・２区と並列する調査区で現田面１面・旧田面４面の平坦面と北に下がる傾斜面からなる。１・４区間に位置する。検出面は表土下の赤褐～黄褐色混礫粘質土上面。西側を灰黄色の土石流が覆う。調査面積は988㎡である。標高は140ｍ。検出は古代～中世焼土壙３基、中世土壙1基・土石流１条を検出した。

⑴　焼土壙　焼土壙は調査区西寄りに３基検出した。

SK134（Fig.51 Ph.114）　調査区北西端に位置し、2.0×1.65ｍ深さ59㎝を測る典型的A類土壙で、軸は地形に斜行する。内面の炭灰層は浚えられ、依存せず、床上に10㎝程まで炭粒混じりの流土が堆積し以上は地山土ブロック混じりの客土で埋められる。

SK135（Fig.51 Ph.115）　SK134の東3.5ｍに位置し、1.8×1.62ｍ深さ67㎝を測るB類土壙で、軸は地形に直交。炭灰層下に流土層があり、掘削後暫く放置される。上面に10㎝程流土が堆積した後地山土ブロック混じりの客土で埋められる。焼土壁は上端から数㎝部分的に残るのみである。

SK136（Fig.51）　上段斜面中央に位置し、土壙の隅、0.7×0.55ｍ深さ21㎝が残るのみで、床上10㎝程から壁が薄く焼ける。

⑵　その他の出土遺物（Fig.52 Ph.116）　**111**はSK134混入のt縦長剝片を用いた縄文晩期サヌカイト製削器。両側辺に刃部を形成する。**112**は検出面出土の旧石器黒曜石製使用痕剝片で連続剝離を行った横長剝片の側辺を使用する。右先端に右方からの剝離があり、彫刻刀面の形成の可能性もある。**113**は検出面出土の結晶片岩製扁平打製石斧で、摩滅が著しい。87.1×42×15.7㎜・92ｇを測る。

Ⅳ．小　　結

今回の調査では１区から15区まで、15,755㎡の調査を実施し、縄文時代の包含層・倒木痕・土壙２基・落穴６基、古代～中世の焼土壙81基・炭焼窯１基・掘立柱建物２棟以上柱穴多数・土壙２基・溝20条・土石流、近世水田開墾時の廃石土壙14基・溝１条を検出した。傾斜地形の制約にもよるが、下方の１次調査区よりも遺構は少ない。

遺物も少量で、三稜尖頭器をはじめとする旧石器、縄文時代早期石鏃・晩期土器石器、中世貿易陶磁・国産陶器・土師器等コンテナ１箱の出土である。

旧石器時代は混入資料で、三稜尖頭器・細石核・使用痕剝片等少量検出される。

縄文時代は晩期黒川式期を主とするが明確な遺構は土壙２基・落穴６基で生活域の様相は低い。石鏃も１次調査同様５点中４点が破損し破損率は高い。晩期は倒木痕等の流入土中に炭粒を多量に含む暗褐色土があり、AMS測定の結果はBC1440～1370・BC1220～1050の結果が得られ１次調査の成果BC1400～1250・BC1420～1290と近い数値がでている。該期に焼畑等の森林破壊が進んだ証左であるが土掘り具の扁平打製石斧は１点・横刃石器に対応できる石器はあえて入れて15・26・50・111の４点までで少なく小規模なもののようである。

中世は、本遺跡の集落廃絶の要因が13世紀初めの大規模な土石流であること、再度の入植が15世紀後半以降であることが判明した。また土石流以前の炭焼窯と炭倉・住居の一群の遺構群を検出した。

Tab.1　遺構一覧

遺構番号	地点	種　別	時　期	規　模 縦×横×深さ（m）	主な出土遺物	備　考	写真番号	挿図番号
SK001	1	焼土壙Ｂ	古代～中世	2.14×1.15×0.36			5	5
SK002	1	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.56×0.8+α×0.28		SK03を切る	6・7	5
SK003	1	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.7×1.27×0.39	炭	炭残存	6・7	5
SK004	1	貯蔵穴？	縄文	1.8×1.7×0.30			4	5
SD143	1	土石流	13世紀初		青磁碗(龍泉Ⅱ類)・須恵器(坏)・土師器(甕・坏他)・Ob(ufl)			
SK005	2	廃石土壙Ａ	近世	1.8×1.6×0.61			8	5
SK006	3-1	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.58×0.94×0.32		焼成面2面		8
SK007	3-1	焼土壙Ｂ	古代～中世	0.98×0.72×0.08				8
SK008	3-1	焼土壙Ｃ	古代～中世	1.85×1.67×0.27			10・11	8
SK137	3-2	焼土壙Ａ	古代～中世	1.55×0.84×0.25	炭			8
SK138	3-2	焼土壙Ａ	古代～中世	1.5×0.92×0.4	白磁碗		13・14	8
SD139	3-2	畝溝	15世紀後半	20×3×0.2	土師器(坏)			8
SD142	3-2	畝溝	15世紀後半	30×1.5×0.22	土師器(鍋)			8
SD144	3-1	土石流	13世紀初		土師器(坏)			
SK009	4-1	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.02×0.7×0.22		掘削・焼成に時間差		12
SK010	4-1	焼土壙Ａ́	古代～中世	1.77×1.04×0.46		掘削・焼成に時間差		12
SK011	4-1	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.25×0.73×0.18			16	12
SD012	4-1	土石流	13世紀初	1.8×0.9	土師器（坏・皿他）		17	12
SD013	4-1	土石流	13世紀初	1.8×1.0	土師器(鍋・甕)		18・19	12
SD140	4-2	土石流	15世紀？	0.65×0.18	土師器（鍋）			
SK014	5	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.75×0.77×0.08		掘削・焼成に時間差		14
SK015	5	焼土壙Ａ	古代～中世	1.8×1.15×0.27	縄文土器(条痕文)・炭	焼成面2面・SK16に切られる	21・22	14
SK016	5	廃石壙Ａ・Ｂ	近世	2.4×2.35×0.63	炭	SK15を切る	23	15
SK017	5	廃石壙Ｂ	近世	1.25×0.92×0.11			24	15
SK018	5	廃石壙Ｂ	近世	0.98×0.6×0.20				15
SK019	5	廃石壙Ｂ	近世	1.72×1.1×0.35				15
SK020	5	廃石壙Ｂ	近世	1.85×1.4×0.10				15
SK021	5	焼土壙Ａ́	古代～中世	1.5×0.85×0.25				14
SK022	5	焼土壙Ｃ	古代～中世	1.68×1.6×0.13	焼土塊			14
SK023	5	廃石壙Ｂ	近世	1.5×1.15×0.15				15
SK024	6	廃石壙Ｂ	近世	2.05×1.17×0.25	縄文土器(粗製)		28	18
SK025	6	廃石壙Ｂ	近世	1.1×0.8×0.40				18
SK026	6	廃石壙Ａ・Ｂ	近世	0.95×0.82×0.23			29	18
SK027	7	焼土壙Ａ？	古代～中世	2.0×0.75+α×0.44	炭	炭残存		19
SK028	7	廃石壙Ｂ	近世	1.53×1.15×0.24	白磁(伊万里)	SK29を切る		19
SK029	7	焼土壙	古代～中世	1.5×1.1×0.14				
SK030	7	廃石壙Ｂ	近世	4.65×2.7+α×0.60		加熱破砕	34	19
SX031	7	倒木痕	縄文晩期	1.55×1.64+α×0.35	縄文土器(条痕文)・炭	AMS分析・樹種同定（ヒサカキ）	31	21
SK032	7	焼土壙Ｂ	古代～中世	2.25×1.4×0.53	炭	焼成面2面	33	19
SX033	7	倒木痕	縄文晩期	2.4×1.4×0.22	炭			21
SX034	7	倒木痕	縄文晩期	2.35×2.25×0.65	縄文土器(粗製・精製)・炭	AMS分析・樹種同定（アカガシ亜属）	32	21
SK035	8	廃石壙Ｂ	近世	1.6×1.2×040			40	23
SK036	8	落穴	縄文	1.4×0.8×0.92			37	23
SK037	8	焼土壙Ａ	古代～中世	1.5×0.95×0.34		焼成面2面	38・39	23
SK038	8	焼土壙	古代～中世	1.5×0.95×0.34				23
SX039	8	倒木痕	縄文	3.8×2.35×0.1	焼土塊・Ob(ufl)			
SD040	8	暗梁	18世紀後半	2.7×0.5	土師器(湯釜)・染付(皿)・焼石		42	23
SX041	8	倒木痕	近世	1.54×1.16×0.3	陶器(薬罐)			
SK042	9	焼土壙Ｃ	古代～中世	1.0×0.95×0.37				27
SK043	9	落穴	縄文晩期	1.2×0.8×0.65	精製浅鉢			27
SK044	9	焼土壙Ｂ	古代～中世	0.9×0.73×0.18		焼成面2面		27

遺構番号	地点	種　別	時　期	規　模 縦×横×深さ（m）	主な出土遺物	備　考	写真番号	挿図番号
SK045	9	落穴	縄文	1.0×0.73×0.71		逆茂木	45	27
SK046	9	焼土壙Ａ	古代～中世	2.0×1.5×0.42			46	27
SK047	9	焼土壙Ａ	古代～中世	1.5×0.85×0.21	土器片円盤・炭		48	27
SK048	9	焼土壙Ｃ	古代～中世	0.5×0.5×0.11				27
SD049	9	土石流	13世紀初		青磁(龍泉Ⅱ碗)・土師器(坏・皿・鍋)		47	27
SX050	9		縄文		土器片円盤			
SX051	9		中世		土師器（坏・皿）			
SK052	10	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.3×0.8×0.19	炭		53	30
SK053	10	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.15×0.9×0.17	炭	SK54を切る・焼成面2面		30
SK054	10	焼土壙Ｂ	古代～中世	0.75×0.4+α×0.15				
SK055	10	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.46×0.72×0.7				30
SK056	10	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.52×0.98×0.26	炭		54	30
SK057	10	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.26×1.05×0.35	炭		55・56	30
SK058	10	焼土壙Ｃ	古代～中世	1.32×1.1×0.38	炭		57	30
SK059	10	焼土壙Ａ	古代～中世	1.70×1.18×0.25	焼土塊・炭			31
SK060	10	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.87×13.0×0.44	炭		59・60	31
SK061	10	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.90×1.35×0.68	縄文土器(鉢・淺鉢)・炭化物		61・62	31
SK062	10	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.02×0.95×0.30	炭			31
SK063	10	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.19×1.3×0.43	炭		63・64	31
SK064	10	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.88×1.15×0.37	炭		58	31
SK065	10	焼土壙Ｃ	古代～中世	1.57×1.42×0.40	炭・炭化物		65	32
SK066	10	落穴	縄文	2.14×0.84×0.55			51	
SK067	10	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.65×0.95×0.50	炭	焼成面2面	66	30・32
SK068	10	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.22×0.8×0.16	炭			32
SK069	10	焼土壙Ａ	古代～中世	1.65×15.2×0.42	土師器(甕)・焼土塊・Ob(fl)・炭		67	32
SK070	10	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.5×0.9×0.42	炭・炭化物	掘削・焼成に時間差		32
SK071	10	廃石壙Ｂ	近世	1.95×123×0.50			68	32
SK072	10	落穴	縄文	2.05×0.68×1.03			52	30
SK073	11	焼土壙Ａ	古代～中世	1.24×0.87×0.18		掘削・焼成に時間差		35
SK074	11	焼土壙Ａ？	古代～中世	0.85×0.55+α×0.22			71	35
SK075	11	焼土壙Ａ́	古代～中世	1.35×0.87×0.35	炭		73・74	35
SK076	11	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.75×0.82×0.18	炭	焼成面2面	75・76	35
SK077	11	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.2×1.08×0.28	炭			35
SK078	11	焼土壙Ａ	古代～中世	1.78×1.3×0.13				35
SK079	11	焼土壙Ａ́	古代～中世	1.75×1.12×0.22	炭		72	35
SK080	11	焼土壙Ｃ	古代～中世	2.15×1.8×0.18	陶器(甕)・炭			35
SK081	11	焼土壙Ａ	古代～中世	1.6×1.4×0.22	炭			36
SK082	11	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.5×0.9×0.12	炭	掘削・焼成に時間差・焼成面2面		35
SK083	11	焼土壙Ａ́	古代～中世	1.4×1.0×0.38	炭		79	36
SK084	11	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.5×0.8×0.23	炭		77・78	36
SK085	11	焼土壙Ａ	古代～中世	1.56×1.32×0.23	炭		80	36
SK086	11	焼土壙Ａ	古代～中世	1.9×1.4×0.38	炭		81・82	36
SK087	11	焼土壙Ａ	古代～中世	1.38×1.15×0.37	炭			36
SK088	11	焼土壙Ａ	古代～中世	1.32×0.8×0.13	炭			36
SD089	11	自然流路	縄文晩期	8.8×1.0×0.5	縄文土器(条痕文)		83	36
SK116	11	肥溜	近世	1.0×0.9×0.43	肥前系陶器(皿)・土師器			
SD117	11	畝溝	15・16世紀	0.38×0.14	瓦器(?)			36
SD118	11	畝溝	15・16世紀	0.45×0.14	土師器(皿)			36
SK090	12	焼土壙Ａ	古代～中世	1.82×1.4×0.50	炭	SD122に切られる	86	39
SK091	12	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.76×0.95×0.30	炭		88・89	39
SK092	12	焼土壙Ａ	古代～中世	1.65×0.98×0.22	炭			39
SK093	12	焼土壙Ｃ	古代～中世	1.32×1.04×0.16	炭		87	39
SK094	12	焼土壙Ａ́	古代～中世	1.55×1.1×0.36	炭		90	39

遺構番号	地点	種　別	時　期	規　模 縦×横×深さ（m）	主な出土遺物	備　考	写真番号	挿図番号
SK096	12	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.81×1.2×0.45	炭	上下の重複	92・93	
SK095	12	焼土壙	古代～中世	1.8×1.32×0.42	炭・Ob(ufl)		91	39
SD119	12	畝溝	15・16世紀	1.15×0.24	縄文土器			
SD120	12	畝溝	15・16世紀	1.7×0.09	Ob（石鏃）			39
SD121	12	畝溝	15・16世紀	0.98×0.08	Ob(ufl)			
SD122	12	畝溝	15・16世紀	0.75×0.10	土師器（坏・鍋）			
SD123	12	畝溝	15・16世紀	1.5×0.05	Ob(fl)			
SK124	12	土壙	縄文	0.62×0.5×0.24	縄文土器			39
SD125	12	畝溝	15・16世紀	2.35×0.06	土師器			
SD126	12	区画溝	15・16世紀	0.92×0.09	須恵器（甕）			40
SD127	12	区画溝	15・16世紀	1.26×0.09	土師器（擂鉢他）・焼土			40
SX128	12	倒木痕		2.86×1.95×0.12	Ob(ufl)・サヌカイト(fl・石鏃)・炭・炭化物			
SX129	12	倒木痕	近世～近代	2.8×1.6×0.07	上野高取系（ぐい呑み）			
SK097	13	焼土壙Ａ	古代～中世	1.84×1.35×0.46	炭	上下の重複		43
SK098	13	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.18×0.6×0.06	炭			43
SK099	13	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.26×1.18×0.26			99	43
SK100	13	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.75×1.0×0.22	炭			43
SX101	13	炭焼窯	13世紀初	3.75×1.75×1.55	土師器（坏・皿・鍋）・炭	半地下式円形平窯	102～105	44
SK102	13	落穴	縄文	1.32×0.65×0.95			97	43
SD103	13	区画溝	15・16世紀	1.95×0.6	土師器(皿・鍋・湯釜)・青磁(龍泉Ⅴ碗)・備前(擂鉢)石器(砥石)・サヌカイト(fl)		101	
SK104	13	焼土壙Ａ	古代～中世	2.2×1.75×0.54	炭		100	43
SD110	13	区画溝	15・16世紀	0.9×0.15	土師器（坏）			
SX111	13	倒木痕	縄文	3.6×0.05	縄文土器			
SX112	13	倒木痕	縄文晩期	3.05×0.15	縄文土器（粗製）			
SD113	13	溝	中世	0.68×0.11	土師器・明青花（碗）			
SK114	13	土壙	15世紀後半	2.3×1.28×0.58	土師器(鍋・擂鉢)・焼土塊・炭	周溝を持つ小屋	106	45
SD115	13	溝		0.41×0.1				
SX130	13	土壙	中世	1.05×0.25	土師器			
SD131	13	溝	中世	0.9	土師器			
SB001	13	掘立柱建物	12世紀末	2×2間（2.9×2.25）	土師器（鍋・坏）		106	45
SB002	13	掘立柱建物	12世紀末	2×2間（4.2×4.05）	土師器・縄文土器・炭		107	45
SK105	14	焼土壙Ａ	古代～中世	1.1×0.8×0.11				48
SK106	14	焼土壙Ｂ	古代～中世	2.03×1.4×0.40	炭		109	48
SK107	14	焼土壙	古代～中世	1.12×0.6+α×0.14	炭			48
SK108	14	焼土壙	古代～中世	0.65+α×0.93×0.05	炭			48
SK109	14	焼土壙	古代～中世	1.0+α×1.2×0.45	炭	焼成面２面	110	48
SK132	14	土壙	古墳？	1.04×0.68×0.32	須恵器（甕）			
SK133	15	土壙	中世	2.2+α×2.0×0.70	土師器		113	51
SK134	15	焼土壙Ａ	古代～中世	2.0×1.65×0.59	炭・Ob（ナイフ型石器）		114	51
SK135	15	焼土壙Ｂ	古代～中世	1.8×1.62×0.59	炭		115	51
SK136	15	焼土壙	古代～中世	0.7×0.55×0.21	炭			51
SK141	15	不整形土壙	中～近世	2.3×1.28×?	陶器（瓶）			

付編：上広瀬遺跡第２次調査に伴う自然科学分析委託

Ⅰ．放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・瀬谷薫
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・佐々木由香

１．はじめに

福岡市早良区に位置する上広瀬遺跡（第二次）より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。試料調整は、山形、瀬谷、Lomtatidze、Jorjolianiが、測定は小林、丹生、伊藤が行い、本文は佐々木、伊藤が作成した。

２．試料と方法

測定試料の情報、調整データは表１のとおりである。

測定試料は３点で、いずれも炭化材である。７区SX31とSX34は、縄文時代晩期に属すと考えられている倒木痕で、その覆土の中に出土した炭化材破片（樹種は未同定）を測定試料とした（PLD-6771・6772）。炭化材はいずれも最外年輪以外の部位不明であった。また13区SX101は古代に属すと考えられている半地下式の炭焼窯で、遺構内から出土した炭化材（樹種ツヅジ科）を測定試料とした（PLD-6773）（樹種同定の詳細は樹種同定の項参照）。測定試料は最外年輪から採取した。

試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

表１　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測　　定
PLD-6771	位置：７区 遺構：SX31 その他：縄文倒木痕	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N，水酸化ナトリウム1N，塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6772	位置：７区 遺構：SX34 その他：縄文倒木痕	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N，水酸化ナトリウム1N，塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6773	位置：13区 遺構：SX101	試料の種類：炭化材(12年輪) 試料の性状：最外年輪 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N，水酸化ナトリウム1N，塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH

３．結果

表２に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行った^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を、図１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表２　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ^{13}C (‰)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲		暦年較正用年代 (yrBP±1σ)
			1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	
PLD-6771	-27.21±0.16	3120±20	1430BC(68.2%)1390BC	1440BC(86.7%)1370BC 1340BC(8.7%)1310BC	3120±18
PLD-6772	-27.71±0.14	2930±20	1210BC(64.1%)1110BC 1100BC(4.1%)1080BC	1260BC(2.9%)1230BC 1220BC(92.5%)1050BC	2932±18
PLD-6773	-26.82±0.15	870±15	1160AD(68.2%)1210AD	1150AD(95.4%)1220AD	868±16

４．考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

７区SX31から出土した炭化材（PLD-6771）は^{14}C年代で3120±20yrBP、暦年較正年代を行った結果、1σ（68.2％）の確率で、1430-1390calBC（68.2％）、2σ（95.4％）の確率で、高い確率範囲をとると1440-1370calBC（86.7％）であった。同様にSX34から出土した炭化材（PLD-6772）は^{14}C年代

で2930±20yrBP、高い確率範囲をとると1σの確率で、1210-1110calBC（64.1%）、2σの確率で、1220-1050calBC（92.5%）であった。九州北部における縄文時代晩期の年代測定例は少ないため、九州における縄文時代晩期の土器付着炭化物の年代測定結果と比較すると、^{14}C年代で3120±20yrBP前後は天城式、2930±20yrBP前後は天城式と黒川式の測定結果が報告されている（藤尾2006）。ただし、測定試料は最外年輪が不明な炭化材のため、最外年輪を試料とすれば年代値は枯死年あるいは伐採年を示すが、内側の年輪を試料とすればその分古い年代を示すという、測定試料の古木効果を考慮する必要がある。

13区SX101の炭焼窯から出土した炭化材（PLD-6773）は^{14}C年代で870±15yrBP、1σの確率で、1160-1210calAD（68.2%）、2σの確率で、1150-1220calAD（95.4%）であった。古代末から中世にあたる12世紀中頃から13世紀初頭の年代範囲が高い確率を示した。

参考文献

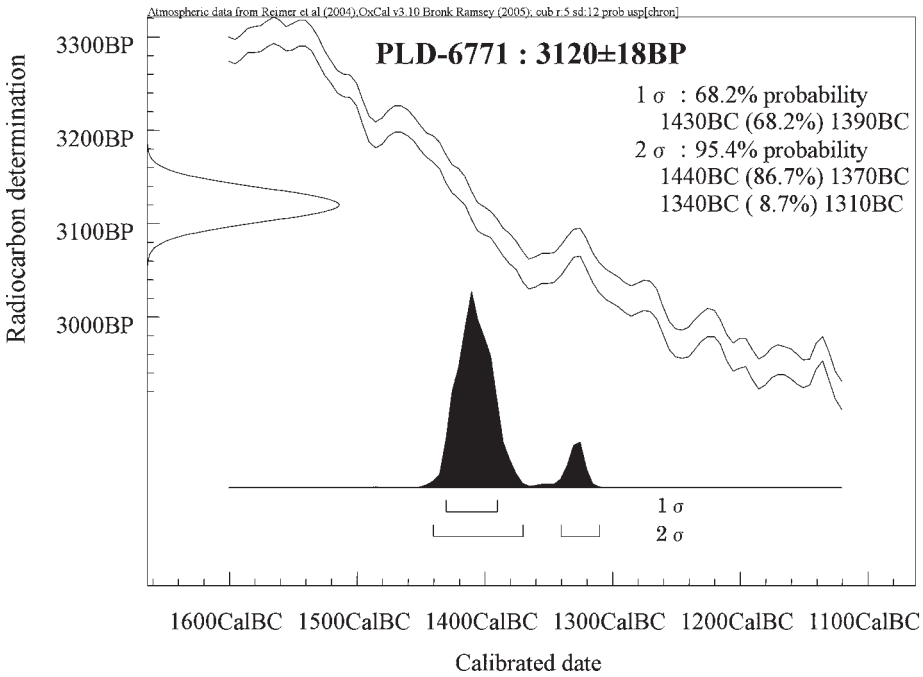
Bronk Ramsey C.（1995）Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy： The OxCal Program, Radiocarbon, 37, 425-430.

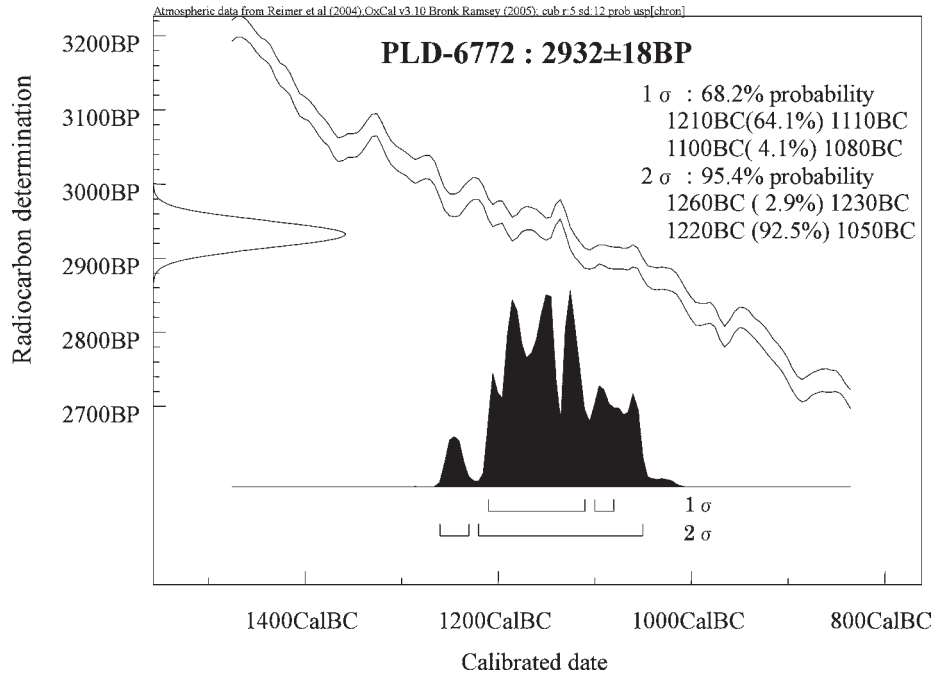
Bronk Ramsey C.（2001）Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, 355-363.

藤尾慎一郎（2006）九州における年代測定の結果―特に縄文時代晩期について―．西本豊弘編「弥生時代の新年代」：90-94，雄山閣．

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代，3-20．

Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer.（2004）IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP, Radiocarbon, 46, 1029-1058.




Atmospheric data from Reimer et al (2004);OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005); cub r:5 sd:12 prob usp[chron]
PLD-6772 : 2932±18BP
1 σ : 68.2% probability
1210BC(64.1%) 1110BC
1100BC(4.1%) 1080BC
2 σ : 95.4% probability
1260BC (2.9%) 1230BC
1220BC (92.5%) 1050BC
Radiocarbon determination
3200BP
3100BP
3000BP
2900BP
2800BP
2700BP
1 σ
2 σ
1400CalBC
1200CalBC
1000CalBC
800CalBC
Calibrated date

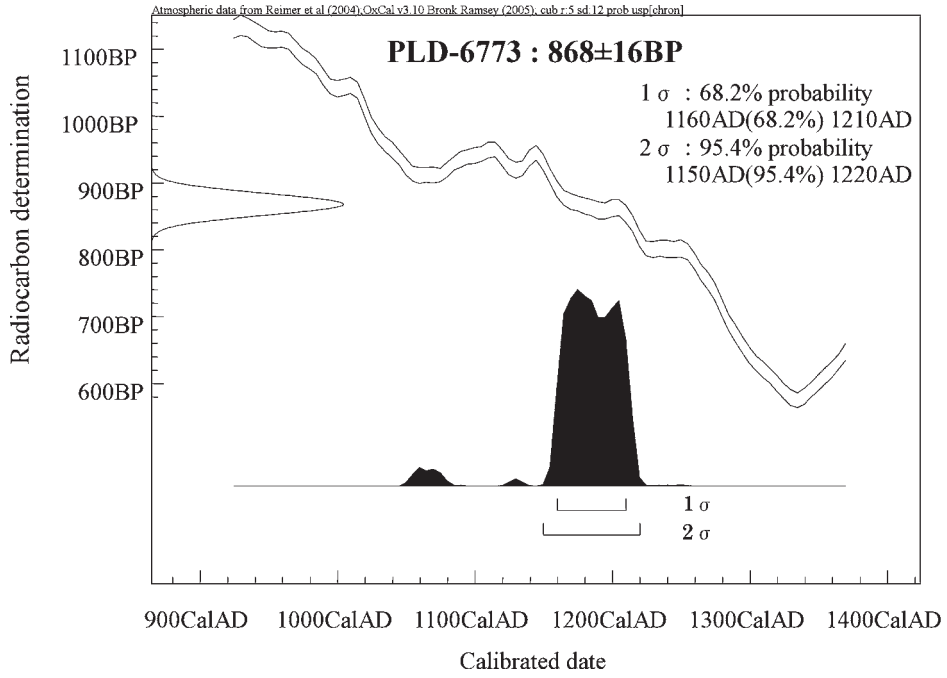

Atmospheric data from Reimer et al (2004);OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005); cub r:5 sd:12 prob usp[chron]
PLD-6773 : 868±16BP
1 σ : 68.2% probability
1160AD(68.2%) 1210AD
2 σ : 95.4% probability
1150AD(95.4%) 1220AD
Radiocarbon determination
1100BP
1000BP
900BP
800BP
700BP
600BP
1 σ
2 σ
900CalAD
1000CalAD
1100CalAD
1200CalAD
1300CalAD
1400CalAD
Calibrated date

図１　暦年較正結果

II．上広瀬遺跡第２次調査出土炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

１．はじめにここでは縄文時代の倒木痕が含まれる覆土から出土した炭化材２点と、古代末～中世の炭焼窯出土炭化材１点の樹種同定結果を報告する。

２．方　法

同定は、炭化材の３方向（横断面・接線断面・放射断面）の断面を作成し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-5900LV型）で観察と写真撮影を行った。同定した炭化材の残り破片は、福岡市教育委員会に保管されている。

３．結果および考察

縄文時代晩期と考えられる倒木痕が含まれる覆土から出土したいずれも小破片の炭化材は、常緑広葉樹のアカガシ亜属とヒサカキであった。同様に年代測定の結果から、古代末から中世の時期内に操業されていたと考えられる炭焼窯から出土した炭化材は、ツツジ科であった。推定直径６㎝前後で樹皮が残存する丸木の材であったと思われる。

縄文時代の倒木痕が含まれる覆土から出土した炭化材はいずれも常緑広葉樹であったことから、当地域の自然植生である照葉樹林が成立していたものと考えられる。古代末から中世の炭焼窯から出土した炭化材は、ツツジ科であり、常緑性と落葉性を含み材組織からは種類を特定できない。ツツジ科は、自然林や二次林に多く生育することから、当時においても入手容易な樹木であったのだろう。

表１　同定結果一覧

地区・遺構	遺構の性格	樹　種	備　　考
７区SX31	縄文時代晩期倒木痕	ヒサカキ	放射径1.0×接線径0.8㎝破片
７区SX34	縄文時代晩期倒木痕	アカガシ亜属	放射径0.7×接線径0.5cm破片
13区SX101	古代末～中世の炭焼窯	ツツジ科	放射径2.6×接線径2.1cm破片　樹皮付き

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の３方向の組織写真を提示した。

⑴　コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　ブナ科　図版１　1a-1c（7区SX34 縄文倒木痕）

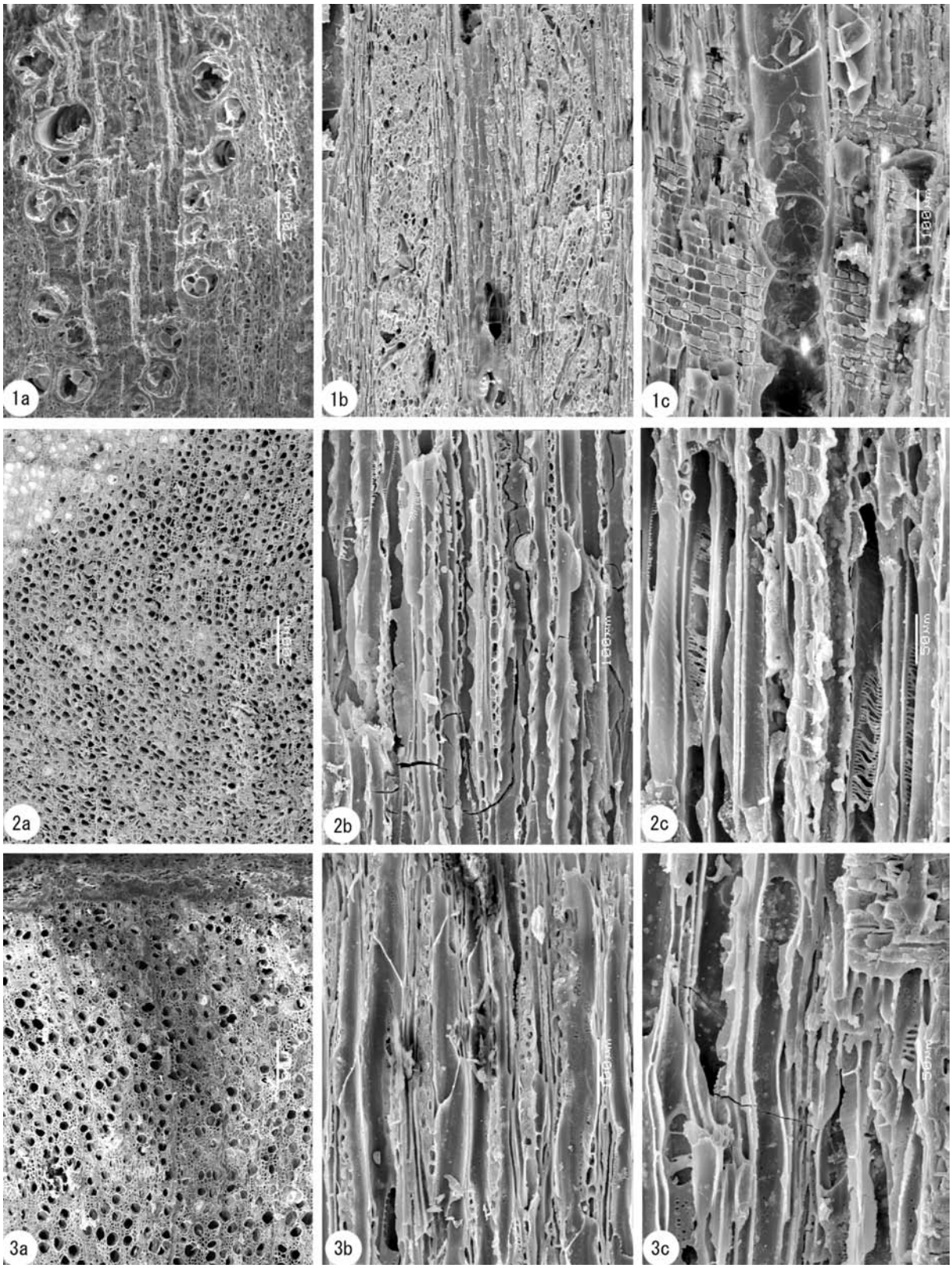
集合放射組織を挟み小型～中型の単独管孔が放射方向に配列する放射孔材。道管の穿孔は単穿孔、放射組織は単列のものと集合射組織がある。

⑵　ヒサカキ　*Eurya japonica* Thunb.　ツバキ属　図版１　2a-2c（7区SX31 縄文倒木痕）

非常に小型で多角形の管孔が多く分布する散孔材。道管の壁孔は交互状から階段状、穿孔は横棒数が非常に多い階段穿孔、放射組織は異性で２細胞幅が多く、道管との壁孔は交互状・階段状である。

⑶　ツツジ科　Ericaceae　図版１　3a-3c（13区SX101 古代末～中世 炭焼窯）

極めて小型で角形の管孔が多数分布する散孔材。道管の穿孔は単穿孔と横棒数の少ない階段穿孔、放射組織は異性で1～3細胞幅である。



図版 1　上広瀬遺跡第 2 次出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真
1a-1c：アカガシ亜属（7 区 SX34 縄文倒木痕）　2a-2c：ヒサカキ（7 区 SX31 縄文倒木痕）
3a-3c：ツツジ科（13区 SX101 古代末～中世 炭焼窯）
a：横断面　b：接線断面　c：放射断面